
続・ストライクウィッチーズ 影のエース戦記

教授

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続・ストライクウィッチーズ 影のエース戦記

【Nコード】

N7442W

【作者名】

教授

【あらすじ】

1942年——アフリカの大地に、扶桑陸軍の精鋭が降り立った。その部隊長は、東部戦線の影？シャドウ？こと上坂啓一郎——彼の戦いは、まだまだ続く——
ようやくブリタニア編に突入

設定（前書き）

みてみんなに彼のイラストをアップしました。ヘタですが、想像の手助けになればと……

設定

所属 扶桑皇国陸軍

生年月日 1922年5月5日生（1942年時19歳）

身長 170？ 体重 不明

使い魔 トラフズク（フクロウの仲間）

一人称 俺、自分

モデル 上坊良太郎大尉

階級 中尉

仇名 シャドウ
影

固有魔法 ボルトガイスト
物体操作

？ 物体を浮遊させて操ることができるので背中に背負った2丁の銃を操り、攻撃することができる。魔法同調率を上げれば何丁でも可能だが、髪が伸びるという弊害があるのであまり使わない。

？ 一見してチートっぽく見える能力だが、上坂の場合、索敵系魔法を持っていないため、有視界内でしか対処できない。しかし、あの程度は勘で補っている。

？ 固有魔法ではないが、使い魔の影響で、夜目がよく効く。

？ のちに名作となる「機動戦士ガ・ダム」に出てくる兵器の参考になったとも……

性格

？ 非常にまじめで温厚、基本に忠実で言葉は少ないが、的確にものを言うため毒舌といわれる、しかし基本的にどんな無茶も大抵はため息で済みます。

？ とある事件により、トラウマを持ってしまったが、最近結構和らいでいる。

？ 趣味が裁縫や料理だが、トラウマの時の影響で飲酒や喫煙もするようになった。

？ もともとは気が弱く、読書が好きな少年だったが、10歳の時に使い魔と契約し、ウィッチとなった。

？ 才能は非常に高く、非公式ながら扶桑陸軍最強ともささやかれている。

？ 自分を死んだ人間とっていて、撃墜数に関心がない。

？ 代々忍びの家系で、多くのウィッチを輩出してきたが、男性魔女は啓一郎が初めてといわれている。（資料がないため不明）

？ 最近成長したためか、小さい子から、顔を見るなり泣かれることが多くなった。これは、頬の傷と相まって、無表情さが仇になっている可能性がある。

？ 意外と繊細で、ちょっとしたことで傷つくことがあるが、すぐに忘れる。

？ 結構世話焼きなところがあり、男は男らしく、女は女らしくと言うのが持論だが、性知識には乏しく、女性の裸を見ても特に動揺しない。というより子供の作り方すら知らないで、そもそもなぜ男と女に分かれているのかすら知らない。

基本装備

黒耀

上坂家の蔵に眠っていた刀。刀身が黒く、魔力を通すと赤く光る。一般的なウィッチだと、生理的嫌悪感に襲われるらしいが、上坂はむしろ相性がいいのか、愛刀として使っている。ちょっとした傷も、自己修復できるらしい。

苦無

扶桑に古くから伝わる忍びの武器。手裏剣として投げたり、小刀として使ったりと、結構便利。上坂の場合、8本ほど所持しているが、どこにあるかは不明。

14年式拳銃前期型

扶桑で開発された自動拳銃。口径は8mmと諸外国のに比べて小さく、ストッピングパワーも小さいが、反動が少なく軽量で、グリップも細いことから小さいウィッチ達に愛用されている。

雑囊

ピストルホルダーに繋がっているもので、中には薬草や包帯、食料など緊急時の物が入っている。その他にも色々な物が入っていたことから、のちの名作「ドラ。もん」のモチーフになったとも……

第一話（前書き）

文章能力をアップして戻ってまいりました。
基本的に同人の作品の、二次創作です。

第一話

1942年、トブルク――

「なんなのよいったい……」

元扶桑陸軍魔女――現フリージャーナリストの加東圭子は、不機嫌だった。

アフリカの昼間は非常に暑いので、トブルクのホテルで休んでいたら、前にトラックに乗せてくれたブリタニア軍の兵士がやってきた。彼が言うには港に荷物が届いたので来てほしいということらしい。

加東は気が進まなかったが、車で港まで送ってくれるということで、渋々普段着の上に、スカーフとゴーグル、それに愛用のライカ？を持って、車の助手席に座ったのだった。

「まあ、行ってみるといいですよ、結構笑えますからね」

隣の運転席から、ガードナー上等兵が話しかけてくる。かつて彼を取材した後、それらの写真を各国の新聞社に送ったら、母国で新聞や雑誌に載ったらしく、非常に喜んでいたのだ。

それからというもの、彼は何かと取材の便宜を図ってくれたりして、頼りにしている。

「何が笑えるのよ……」

扶桑に帰る船に乗りそびれてしまって、現在の加東は非常に不機嫌だ。

そうこうしているうちに車は港に差し掛かり、普通の波止場ではな

く、軍用埠頭の一角で止まった。

「ここ？」

「ええ、あれです」

ガードナーの指差す方には百個を優に超える人の背丈よりも大きく、嚴重に梱包された木箱が積み重なっていた。

「……ナニ、これ？」

驚く加東を見て、ガードナーはニヤニヤと笑いを浮かべたまま、肩をすくめる。

「さあ、お国の船が置いて行ったもので、一個大隊分の荷物はありますね」

「……これ、全部私宛の物なの？」

「さあ？ 僕も着いた船から、扶桑の女性記者を知っているかって聞かれただけですから」

ガードナーはまた、軽く肩をすくめる。

「ま、僕は用があるので基地に戻りますけど、荷物を運ぶ必要があるなら、第八軍まで連絡してください。最も……」

笑いながらガードナーは、車に乗り込む。

「この量を見れば、手がいらないうことではないでしょうけど」

ガードナーは爆笑しながら車を発進させ、行ってしまった。

「誰が何をこんなに送ってきたのよ。それ以前に本当に私宛なの？」

加東はブツブツと悪態をつきながら、荷物の山に近づいていく。すると暑い中、きつちりと整列している防暑衣の一団が目に入った。服装からして、扶桑陸軍の部隊。

「全く、ここは砂漠なんだから、日陰にいさせなさいよ。いったいどんなボンクラが指揮官やっているんだか……」

加東が近づいていくと、衛兵が彼女を呼び止める。相変わらずの杓子定規で、融通の利かない扶桑陸軍に呆れながら、前に届いた陸軍省からの手紙を見せるた。

衛兵は怪訝な顔で、加東の顔と手紙を見ていたが、理解した表情を見せると、大慌てで挙手の礼をする。

「ただ今指揮官をお呼びしてきます！」

加東が答礼をすると、衛兵は並んでいる一団へ走り出す。しばらくするとその一団から、中肉中背の男性らしき人物がやってきた。加東は頭に巻いていたスカーフとゴーグルを外す。

「あなたが指揮官ですか……ってあなたは！？」

「えっ？ …… あっ！」

二人は驚愕する。防暑衣の中から出てきたのは、かつて扶桑海事変で一緒に戦った上坂啓一郎の顔だった。

「な、なんで啓一郎がいるのよ！」

「なんでヒガシさんがここにいらっしゃるんですか！」

突然の、思ってもみなかった人との再会に、二人はただ混乱するばかり。その様子を衛兵は何が何だかわからずに、ただその光景を見ていた。

「……ということは、トブルクの女性記者ってヒガシさんだったんですか……」

「ええ、そうよ。それにしてもアフリカに派遣なんて……なんかやらかしたの？」

ようやく混乱から立ち直った上坂と加東は、お互いのことを話し始める。いろいろと積もる話でもあったのか、二人共饒舌になっていた。

「別に何も……東部戦線で一段落ついたら、参謀本部からアフリカ派遣部隊の司令官になってくれって言われただけですよ」

「アフリカ派遣部隊？」

加東は怪訝な顔になる。そんな部隊は聞いたこともなかったからだ。

「ええ、俺と新人、それに現地にいる元ウィッチを指揮下に置けて……」

「新人？ そんな子どこに……」

その瞬間、どこからともなく声がする。

「ふ、扶桑海の電光、加東大尉にお会いできるなんて、感激であります！」

「え、今の声、ナニ？」

加東は周囲を見回すが、誰もいない。

「ああ、下です、下」

「下？」

上坂に言われて、下を見ると、そこには防暑衣の塊があった。

「これ？」

よく見ると、その塊は動いていて、手と顔が見えた。扶桑人にしでは真っ白で柔らかそうな手と顔。防暑衣が大きすぎるようで、服に埋もれているように見える。

「はい、わたくしは扶桑皇国陸軍アフリカ派遣独立飛行中隊所属、稲垣真美軍曹であります！」

120？もない身長で、一生懸命加東に対して拳手の礼をしていた。その姿を見て、加東は少し顔をひきつらせながら、上坂に尋ねる。

「この子が新人？」

「そうです」

冷静に答える上坂。これだけは昔から変わらない。加東は諦めたのか、ひざを曲げて稲垣の目線に合わせた。

「……ええと、あなたはいくつ？」

「はい、12歳であります」

「12歳か……」

加東はあまりにも小さい稲垣を見て、一桁なのではないかと心配していた。そのため今の発言で安堵のため息をはいた。

「……ヒガシさん、さすがに参謀本部も一桁の子を送ってくるような真似はしないでしょ」

上坂は加東の心配に気付いていたのか、さらりと言う。

「あつ……」

その言葉に傷ついたのか、稲垣は少し困った表情になった。

とりあえず荷物を運ぶために、加東はブリタニアの第八軍に電話をかけ、車両の増援を頼む。その間、上坂は部下達を日陰に移させ、休ませるようにした。

ちなみにだが、上坂から渡された手紙には、加東は大尉として復帰する旨が書かれていて、上坂と同階級になってしまったのだが、上坂の方が先任なので、上坂の方が偉い。

しかし、上坂はそのことをあまり気にせず、加東に対して敬語を使っていた。

「……それにしても、ヒガシさんが現地の軍と交流があつたなんて……助かりました」

「まあ私もあちこちと取材をしていたからね。そのツテよ」

「出来ればトラックとかを調達したいのですが……何とかできませんかね？」

「トラックを？ ウーン、とりあえず第八軍に聞いてみるわ」

「ありがとうございます」

そんなやり取りしている間に、先ほどの車を先頭に、十台以上のトラックがやってきた。

先頭の車が二人の前で止まると、先ほど加東を送ってくれたガードナーが出てきた。

「やあカトー、また会ったね」

「ええ、あなたの言う通り、手伝ってもらう必要があったわ」

ニヤニヤと笑っていたガードナーだったが、隣に立っている上坂を見て、少し怯えた様子になる。上坂の右頬には大きな傷があり、その無表情さと合わせると、どこかの極道さんか、マフィアを連想させた。

「ああ、初めまして、扶桑皇国陸軍アフリカ派遣独立飛行中隊、通称砂隊隊長、上坂啓一郎大尉であります」

上坂が挙手の礼をすると、ガードナーはその顔に加えて、階級の高さにも怯えながらも答礼をする。その姿を見て、加東は少し溜飲が下がる思いがした。

その後、上坂は整備曹長の氷野に命令して、班ごとに荷物をトラックに積み込んでいく。加東は、その間を縫うように歩きながら写真を撮る。

こつという風に、ブリタニア軍と扶桑軍が仲良く作業している写真を送るためだ。と、加東が夢中になって写真を撮っていたら、彼女の横を、木箱が通り過ぎて行った。

加東は驚いて振り返ると、稲垣が軽々と、重そうな木箱を持ち上げている。

ウィッチなら重い荷物を運ぶことが出来るが、傍目から見ると、幼い少女にしか見えないので、周囲のブリタニア兵もどよめいていた。

そんなことがありながらも、荷物を確認していると、武器や弾薬

類は非常に多いが、食料などが、圧倒的に足りないことに気が付き、上坂に確認しようと近づく。

上坂はガードナーと話し合いながら、荷物の確認をしていた。

「ねえ啓一郎、荷物足りないんじゃないの？」

加東は上坂に話しかけると、途端に困った顔をする。

「ああ、食料類などが圧倒的に足りないな、まあ部隊の人数が少ないから、何とかなるとは思うが」

今回派遣された部隊は、中隊とは名前がついているが、実際は40人ほどしかない。

「他に荷物はなかったの？」

「……実は、ジブラルタルで降りた大尉達が持って行ったんですよ」

上坂は声を潜める。説明によると、上坂がジブラルタルで部隊と合流した時、扶桑から引率していた士官達が荷物を降ろしていったという。

「……ちなみにどれを降ろしたの？」

「……これです」

上坂は手に持っていたリストの、一番最後の所を指さす。そこには部隊の運営費と書かれていた。

「……ねえ、これって横領ってヤツじゃないの？」

「やっぱりヒガさんもそう思いましたか……」

上坂は軽いため息をつく。

「曹長の話によると、航海中から、途中で逃亡するとか、これだけあればリベリオンで遊んで暮らせるとか、不穏な話をしていたそうなので、自分の独断で別な箱と取り替えました」

「どれと取り替えたの？」

「ええと……曹長！」

「はっ！」

上坂に呼ばれて、氷野がやってくる。

「運営費はどれと変えたんだ？」

「はい、これです」

曹長が指さした先には、一覧に金物と書かれた番号の、細長い箱があった。

上坂が箱を開けると、金色に光る金塊が、ぎっしりと詰まっていた。

「……相変わらず黒いわね、アンタ」

「……褒め言葉として受け取っておきます。それよりも……」

上坂は呆れたようにため息をはく。

「まったく、参謀連中は何を考えているんだか……それにあいつらも、最前線では若い少女達が戦っているというのに……」

上坂は、東部戦線で戦っていたため、戦場の惨状をよく知っている。

一週間に一人は未帰還者が出て、それがなかったとしても、過労や魔法力不足で飛べなくなるウィッチ達。上坂は逃げた大尉達ぶん殴りたい気持ちになった。

「……ねえ、それよりも」

そんな思考に陥っていた上坂に、加東は話しかける。

「話を聞くと、さつさと着任報告を済ませるべきだと思っただけど……」

「どうしてですか？」

「だって、中身が違うことに気が付いたら、本国にあらぬことを吹き込んだりしないかしら？」

「……あ」

隣で聞いていた曹長の顔が青くなる。しかし、上坂は大丈夫と言う。

「それはあり得ませんね。それにそんなことをしても、俺の上司なら何とかしてくれますし」

上坂は、冷静にそう言い放った。

そうしている間に、荷物をすべて積み込み終わり、ガードナーがそれを伝えに来た。

「荷物の積みこみは完了しました。それで、これをどこに運びますか？」

「ええと……このあたりで空いている飛行場はあるか？」

「このあたりで空いている飛行場はありません。使わないとすぐに砂に埋まりますので」

「そうか……とりあえず、ブリタニアの駐屯地に預かってもらえないだろうか？」

「わかりました。なら第八軍の駐屯地に案内します」

そういうと、全員がトラックに乗り込み、加東と稲垣は先頭の車の後部座席に、上坂は助手席に乗り込むと、トブルク要塞へと向かい始めた。

「そういえば、あなたはどうして陸軍に入ったの？」

車中の移動中、加東は隣に座っている稲垣に質問をする。

「は、はい、私は映画で見た扶桑海の閃光を見て、陸軍に入ろうと

思いました」

稲垣は緊張しながら答える。扶桑海の閃光とは、1937年に起こった扶桑海事変を題材に、扶桑陸海軍全面協力の元、作られた映画で、同じ部隊だった穴吹智子少尉（当時）が、主役として登場していた。加東もその映画に、少し出演していたが、上坂は出ていなかった。

「そうなんだ、でもあの戦いでは海軍も活躍していたけど？」

「……あの、笑わないで聞いてくれますか？」

稲垣の声が、小さくなる。

「いいわよ」

「わたし、船が苦手なんです……」

「船が？」

加東は稲垣の答えに、少し頬が緩む。そして恥ずかしがっていた稲垣に、そっと耳打ちした。

「大丈夫よ、その理由で、陸軍に入った人を、もう一人知っているから」

「えっ？」

稲垣が素っ頓狂な顔を見ると、前の助手席に座っていた上坂が、小さくくしゃみをした。

「……むう、風邪か？」

その様子を見て、加東は一人、含み笑いを浮かべていた。

第一話（後書き）

イ「というわけで、『続・ストライクウィッチーズ 影のエース戦記』の始まりです。それにしても……」

マ「……だいぶ文章変わったね。もしかして作者が変わったんじゃない……」

作「失敬な！……というより、書き始めてから（投稿し始めてから）小説の書き方を調べたら、全然違っていることに気が付いてね……かといって途中から変更するのもあれだし」

イ「まあそうね。まっ、これでだいぶ読みやすくなったわね」

マ「そうだね」

作「というわけで、今回は特別に、主人公の初期プロットを教えるぞ」

マ「初期プロットって……最初に考えたものですよね？」

作「そういうこと。まあこれを見なさい」

設定

笹本拓也

所属 扶桑皇国海軍

生年月日 1924年 そのあとは考えていない（1944年時17歳）

身長 170？ 体重 不明

使い魔 黒柴

一人称 俺

モデル 笹井諄一大尉

階級 大尉

仇名 無し

固有魔法 コピー

イ「へえ、陸軍じゃあないんだ」

マ「それに、コピーって？」

作「要するに、他のウィッチの固有魔法を使うことが出来るってこと。さすがにチートすぎたけど」

イ「今でも十分チートだけどね……」

作「ちなみにだけど、固有魔法なしで、笹本君はいる設定だよ」

マ「えっ！ それって……」

作「まあそれは後のお楽しみで」

第二話（前書き）

この前「MG15/20」と検索したら、前作がヒットしてびっくりしました……

第二話

しばらく車を走らせていると、やがてブリタニアの駐屯地に着いた。ここは第八軍の中でも、デザートラッツとして知られた第七機甲師団、その第八輕騎兵連隊の駐屯地で、他にも補給中隊や師団工兵が一緒にいるので、規模が大きく、空いている倉庫などもある。で、上坂はそこを一時的に貸してもらおうように、師団長に挨拶に行くことになった。

上坂は、顔が知られている加東や、見栄えのいい稲垣も一緒に来るように言ったので、加東は荷物の中にあつた、陸軍の正装である白衣と緋袴を身に着けた。

「全く、これって手甲と脚甲をつけなくちゃならないのよね。砂漠だとこれじゃあ暑いわよ」

「なら別に外してもいいですよ。要するにインパクトが重要なだけですから」

「……インパクトならあなただけで十分だと思うけどね」

「……………」

確かに、彼女の言う通り、上坂のインパクトは強烈だろう。しかし、それで友好的な関係が築けるかと言えば、それは激しく間違っているが。

そんなくだらないやり取りをしながら、師団司令部に向かっていくと、一人の男性が、加東に話しかけてきた。

「おや、カトーじゃないか」

「あれ、ウエルナー。あなた、なんでここにいるの？」

「いやだなあ、僕はここの参謀だよ」

ブリタニア軍の参謀と仲良く話している姿を見て、稲垣は目を丸くしていた。

「ところでこの可愛いお嬢さんと、マフィアみたいな人は？」

「……………」

上坂は傷ついた表情になる。加東は苦笑いしながら、説明する。するとウエルナーは少し顔を引き攣らせながらも、師団長に取り次いでくれて、あっさりと面会することが出来た。

「……なあ、ヒガシさん」

「なにかしら？」

「……俺ってそんなに怖く見えますか？」

「……そうかもね」

「……………」

石造りの殺風景な部屋に通され、少し待っている間、そんなやり取りをしていたら、細身で少将の階級章をつけた男性が入ってきた。

「私が師団長のオコーナーだ」

「始めまして、扶桑皇国陸軍上坂啓一郎大尉であります。こちらは部下の加東圭子大尉、そして新人の稲垣真美軍曹です」

「ほう、東部戦線の影が^{シヤドウ}アフリカに来てくれるとは……」

オコーナーは少し顔を綻ばせた。加東と稲垣は、上坂がそこまで有名なウィッチであることに驚く。

上坂は、増援として、ウィッチ二名、教官一名、その他それを支援する独立飛行中隊が到着したことを伝え、連合軍指揮下に入ることを申告した。

オコーナーも、たった三人とはいえ、ウィッチの増援が来たことが嬉しいらしく、何かと便宜を図ってくれる約束をしてくれた。

とりあえず、細かいことはウエルナーと打ち合わせをするように言われ、オコーナーの元を辞する。

外で待機していたウエルナーに、上坂は補給や、移動に関して簡単な打ち合わせをして、ついでに扶桑へ電信を打って貰う。

「どうせあの馬鹿参謀どもは、俺達を派遣したことを忘れているに決まっている。電話だったら担当の奴が握りつぶす可能性があるしな」

「……けっこうあなたって過激なのね……」

そう話をしているうちに、通りかかる人達が、物珍しそうに上坂達の周りに集まってきた。

扶桑陸軍のウィッチの正装は、巫女服を元にしており、紅白で色鮮やかなので、戦場では結構目立つ。また、物珍しさもあって、加東と稲垣と、写真を撮って欲しいとせがまれた。

上坂は、加東のライカを借りて、何枚も撮影する。

加東曰く、これらの写真は、後でブリタニアと扶桑の新聞社に送って、宣伝材料にするのだそうだ。

やがて、フィルムが底をつき、三人は写真を撮れなくて残念がつている兵士達に謝りながら、その場を後にした。

「……それにしても、加東大尉は人脈が豊富なんですね」

各国の駐屯地に挨拶をして、次にカールスラント軍が使用する飛行場に、挨拶しに行こうとしていた道中で、稲垣は感嘆する。

ブリタニア軍に車を借り、上坂が運転している後ろに、加東と稲垣は座っていた。

「そう？ 別に報道員をしていると、自然にこのくらいの人脈は出来るわよ」

「それでも、新参者の扶桑陸軍にとっては、有難いですよ」

運転していた上坂が口をはさむ。

「なにせ、俺だと他の軍とあまり友好な関係が築けそうではないですし、稲垣はまだ新人ですから、こういった交渉ことは苦手ですね」

「まあそうね」

加東もそこは同意する。今年20歳を迎える上坂は、元々の無表

情さに合わせて、扶桑海事変の時の傷もあり、怖い印象を持ってしまう。実際、初めて稲垣と会ったときは、怖がって泣かせてしまったと、上坂はため息をつきながら言っていた。

しかし、彼は非常に優しく、料理と裁縫が趣味という、非常に女性らしい一面も持ち合わせている。

「……あ、そう言えば」

「なんですか？」

ふと気付いたのか、加東は稲垣に向き直る。

「私のことはケイって呼んでいいわよ」

「ケイ、ですか？」

「そう、親しくなった人にはそう呼ばれるしね」

欧州では、一般的に扶桑の名前は呼ばれにくいとされるが、ケイやカトーは、欧州にもある名前なので、呼びやすい。そのため欧州では、ケイと呼ばれることが多いのだ。

「け、ケイさん……？」

少し恥ずかしいのか、それとも尊敬する人をそんなふうに呼んでいいのかと、稲垣は恥ずかしそうに、つぶやく。

「そう、それでいいわ」

加東はその光景を、微笑ましく見守っていた。

カールスラントの野戦飛行場――

アフリカにおいて、唯一の飛行隊であり、アフリカ防衛の要と称されるこの場所に、上坂達は着いた。

早速現地の部隊長に挨拶しようとする、加東が待ったをかける。

「ここは私が先に行くわ」

「どうしてですか？」

「このウィッチは結構気難しくて、でも私とは会ったことがあるから大丈夫なの」

「そうですか、ならお願いします」

そういうと、加東は有刺鉄線で囲まれた、基地の一角に走っている。その入り口には、看板が立っていて、ブリタニア語で【gentleman off limit】と書かれていた。どうやらあそこがウィッチ達の居住区画なのだろう。

加東はその一角にいた、黒人の女性に話しかけると、少しして、手招きをした。

「よし、行くぞ稲垣」

「は、はい！」

二人は後を追うように、その一角に近づいて行く。

上坂が入り口を越えたとき、黒人の女性が、少し顔をしかめたが、そんなことは気にせず、一つのテントの中に入る。中は思ったより広く、入口の所が二重になっていて、中に砂埃が侵入しない様になっていた。

「なんだ？　ここはウィッチ以外立ち入り禁止なはずだが……」

そのテントの中に、いかにも勝気なウィッチが、椅子に座って上坂を睨みつける。

「俺もそのウィッチなんだがな……」

「私をからかっているのか？　カールスラントには男性ウィッチなんていないぞ」

「……探せばいると思うぞ。今度よく探してみればいい」

初対面で、いきなり険悪な雰囲気になりかけた二人（といっても、上坂は気にも留めていないが……）の間に、加東は慌てて入り込む。

「あ、ほら、この人が私の上司なのよ」

「失礼した、扶桑皇国陸軍アフリカ派遣独立飛行中隊隊長、上坂啓一郎大尉だ」

上坂は、あくまで冷静に自己紹介する。その様子を見て、目の前のウィッチは、含み笑いを浮かべながら自己紹介をした。

「失礼しました、カールスラント空軍JG27所属、ハンナ・ユス

ティーナ・マルセイユ中尉です。どうぞよろしく」

挑発的なマルセイユの答礼だったが、上坂は軽く息をつくだけだった。それを見た加東は、マルセイユに向き直り、話を進める。

「ええと……とにかく私たち扶桑皇国陸軍も、この基地を使わせて欲しいの。だから挨拶に来たのよ」

「そうだ、……一応扶桑の酒を持ってきたんだが、いるか？」

「いる！」

上坂の言葉に飛びつくマルセイユ。さっきの嫌味はどこへ行っただのか、途端に笑い声をあげた。

「いやー、扶桑の男性は固い奴ばかりだと聞いていたが、イチローはなかなか話の分かる奴じゃないか」

「……どうなっているの？」

突然の変貌ぶりに、加東は、困惑しながら上坂に尋ねる。

「恐らく俺達を試していたんだろう。それにこいつの性格は、東部戦線で知り合ったウィッチから聞いていたしな」

「あ、そう……」

「あはははは……それにしても、加東のその恰好はなんだ？ ひよつとして、それが噂に聞くサムライの衣装なのか？」

「え、ええ、これは扶桑陸軍の正装なの。もう一度空を飛ばうと思っ
てんね」

「そうか、飛ぶ気になったのか」

マルセイユは微笑を浮かべる。

「ええ、あなたのおかげでね」

加東もつられて微笑を浮かべた。

「我々は空に生き、空に帰る。飛ぶのが我々の宿命だ。地べたを這い
ずり回るような真似は二度とできない」

「確かにそうだな、そのための魔法だ。俺達は憧れの存在でなければ
ならない、人類の勝利のために」

マルセイユと上坂のやり取りを見て、加東はこの二人が誇りを持
って飛んでいることに気付き、根っこの部分が似ているんだと思っ
た。

「それで、そっちの小さいのは？」

「ああ、新人の稲垣真美軍曹だ」

二人のやり取りを、ぼーっと見ていた稲垣は、慌てて挙手の礼を
する。

「は、初めまして！ 稲垣真美軍曹であります！」

「ああ、宜しく」

マルセイユは答礼をする。その顔は穏やかだ。どうやら素直そうな稲垣を見て、年上としての品格を見せたのだろう。

「……ところで、上坂は大尉だったよな？」

「ああ、そうだが……」

「なるほど……」

マルセイユは、何かを思いついたかのような笑みを浮かべる。と思ったら、部屋の隅に控えていた女性を呼んだ。

「おい、マティルダ、電話を持ってきてくれ」

「はい」

しばらくして、野戦電話を持ってきたマティルダ。それを受け取ると、何処かへと電話を掛けた。

「ああ、私だ、將軍はいるか？ 今日現場で視察中？ ……じゃあ君でいい。……うん、……そう、実は今、うちの基地に扶桑の増援が来たんだ。……そうそう、それだ。そこでだ、前にちよつと聞いた、統合戦闘航空団の件なんだが……」

しばらく会話が続いたが、話がついたようで、マルセイユは電話を切る。そして、嬉しそうに上坂を見た。

「よし、イチロー、今日から司令官をやってくれ」

「……はっ？」

思わず間拔けな声を上げる上坂。加東も話がよくわからず、ただ話を聞いている。

「……いきなりなんだそれは」

「簡単なことだ。ここに統合戦闘航空団を作ろうということだ」

「統合航空戦団……ってスオムスにあるアレのこと？」

「そうだ」

加東の問いに、肯定する。1939年に設立された、スオムス義勇軍飛行中隊は、当初の予想を大幅に裏切って、大幅な活躍をした多国籍部隊のことだ。マルセイユは、それをアフリカにも作ろうというのだ。

「まあ要するに、面倒事は嫌だから、イチローが全部やってくれてことだ」

「おい」

マルセイユのあけすけな言葉に、上坂は思わずツツコむ。

「大体それなら、戦闘に参加しないヒガシさんの方が……」

「頑張ってくださいね、先任殿」

加東は、面倒事に巻き込まれまいと、前任士官であることを理由に、隊長になることを笑顔で（明確に）拒否した。

「……はあ」

上坂は観念したのか、盛大なため息をはく。

ここに、中間管理職、上坂啓一郎が誕生した瞬間だった……

第三話

マルセイユの、爆弾発言の翌日――

上坂は、たった一晩で、統合戦闘飛行隊を作り上げた。

さすがに人数が足りなく、戦闘団規模にはできなかったものの、カールスラントと扶桑のウィッチを中心に、ブリタニアからは、専属運転手のガードナーを、ロマーニャからはコックを派遣してもらい、とりあえずの体裁を、でっち上げる。

「俺は寝るぞ……」

丸一晚、各国の將軍と電話での会談をしたり、膨大な量の書類を書き上げた上坂は、目の下に隈を作り、フラフラと自分のテントに入っていた。

加東はその様子を、痛む頭を押さえながら、上坂を見送っていた。彼女は彼女で、マルセイユに誘われて、一晩中飲んでいたのだ。とはいっても、上坂に比べればはるかに楽なのだが……

「……お疲れ様」

ともあれ、ようやく統合戦闘飛行隊、「アフリカ」は、上坂啓一郎を隊長として、加東圭子大尉、ハンナ・ユスティーナ・マルセイユ中尉、ライーサ・ペットゲン少尉、稲垣真美軍曹のメンバーで、設立された。

加東は、上坂の代わりとして、氷野とガードナーに連絡し、ブリタニア軍に預かってもらっていた兵員と物資を、基地まで運ぶように指示を出す。そして、加東はカールスラント軍の整備兵達にも挨拶しようと、稲垣を連れ、格納庫になっているテントに向かった。テントの中で、朝早くからストライカーユニットや、銃のメンテナンスをしていた整備士達に、自己紹介する。幸い彼らは、加東や稲垣を快く迎えてくれた。

昼頃になり、上坂が起きたちょうどに、物資が基地に届き、早速ストライカーユニットの点検と、砂漠使用の改造を始める。

「へえ、珍しいわね、液冷式なんて」

扶桑の物資を運び入れているため、活気だっているテントの中で、加東の目の前にある、日月旗が書かれた、カールスラントのBf 109に似た機体を眺めていた。

「ああ、今年から量産が開始されたキ61三式戦闘機「飛燕」だ。最高時速610km/h、航続距離約1800km、メッサーに比べて、最高速度こそ劣るものの、航続距離が長く、キ43に比べると、バランスの取れた機体だな」

「これが新しい翼……」

加東はそっと、機体の外板をなでる。その冷たい金属の感触に、久しぶりに、空を飛んでいた頃の感覚が甦った。

かつて大空を舞っていたあの頃の記憶――

二度と飛べなくなつたと諦めていたが、こうやって再び空に上がれることが、うれしくてたまらなかった。

「大尉、とりあえず二機の調整は完了しました」

「ご苦労、……さて、ヒガシさん、最初に飛びますか？」

「えっ？」

思ってもみなかった言葉に、加東は目を丸くする。上坂は、良くも悪くも戦闘のことを第一に考えていて、最初は上坂自身が飛ぶと思っていたからだ。

「い、いいの？」

「特に問題はありませんが……それに、俺の飛び方は癖があるので、稲垣には教えられませんし……」

上坂は、自分では、新人の稲垣に教えることが出来ない。しかし、現役時代の加東の飛び方は、非常に模範的で、戦闘は無理でも、基本的な飛行法なら教えられると考えていた。

それに加えて、加東の空への憧れを、ひしひしと感じていたので、最初に飛んでもらおうと思っていた。

「……ありがとう、啓一郎」

「ま、稲垣の手本になるような飛び方をお願いします」

上坂は、軽く肩をすくめた。

「ほお……ケイが飛行するのか」

滑走路に、加東と稲垣がキ61を履いて、待機している時、遠くから眺めていた上坂の隣に、先ほど起きてきたマルセイユがやってきた。

「ずいぶんと遅いな。今日の出撃は？」

「今日は無し、昨日ネウロイが出たばかりだしな。……それより、ケイは大丈夫なのか？」

珍しく、マルセイユが人の心配をする。加東は既に20歳を超えていて、魔法力の大幅な減衰が危惧されていたからだ。

「まあ何とかなるでしょう。それに、稲垣も一緒に飛びますしね」

「まあそついうものか。……そついえば」

マルセイユは、不敵な笑みを浮かべると、上坂に提案をする。

「たしかイチローは、東部戦線では相当活躍したそうだな……どうだ、後で模擬戦をやらないか？」

「別にかまわないが」

「そうか、ならユニットの調整が済んだら教えてくれ」

「わかった」

二人が話し終わると、加東と稲垣は、足元に大きな魔方阵を浮かび上がらせる。ようやく発進するようだ。

「お、そろそろ行くな」

「ふむ、あの大きさなら大丈夫だろう」

やがて、二人は一気に加速すると、大空へと飛び立っていった。

（……うん、出力が強いけど、扱いやすそうね）

加東は、自身の使用しているキ61が、なかなか扱いやすい機体だということを、確認する。それを証明するように、後ろを飛んでいる稲垣も、特に問題なさそうに、追ってきていた。

「それじゃあ、私の機動について来て」

加東はそういうと、横にロールし、稲垣もそれに続く。その後、ループ、シャンデル、さらにインメルマン・ターンまで行ったが、稲垣はその動きすら、ついていくことが出来た。

（これはちょっとした才能ね……）

加東は、新人とは思えないほどの技量を見せる稲垣に、内心驚いていた。

稲垣は、その小ささをうまく生かし、加東よりも小さな旋回半径

を絵描けるだけでなく、度胸も据わっていて、ちょっと練習しただけで、即戦力になってくれそうだと確信した加東は、次のステップへ進む。

「それじゃあ今度は、私の後ろを取ってみて」

「わかりました！」

加東は、一気に加速して、稲垣を引き離そうとする。それに遅れまいと、稲垣は懸命に追いかける。と思ったら、加東がバレル・ロールを行い、加速がついていた稲垣を、オーバーシュートさせる。稲垣は、慌てて回避運動を取ろうとするが、そうする前に、加東は持っていたライカで、稲垣の後ろから写真を一枚撮った。

その後も大空の鬼ごっこが行われるが、そこは歴戦の加東。稲垣に一度も後ろを取らせず、何度も後ろから写真を撮った。

「さて、そろそろ終わりにしましょう」

「はい……」

稲垣は、結局一度も後ろを取れず、ガッカリしていた。

「はあ……全然だめですね」

「そんなことないわよ、いい動きしていたわ」

「でも、一度も後ろを取れませんでした……」

「それはキャリアの違いよ、そう簡単には追い付けないわ」

二人はそのまま滑走路へと降り立ち、整備用ラックにユニットを収め、曹長に修正個所を伝える。

「高速時に、舵が効きにくいわ、もう少し高速寄りにセットしておいて」

「了解しました」

加東はそのまま周りを見渡す——すると、マルセイユと上坂が、銃を持ってユニット履いていることに気付き、二人に駆け寄った。

「何やっているの、あなた達？」

「ああ、ヒガシさんか。新型機の慣熟のために、マルセイユと模擬戦をするところですよ」

「模擬戦を？」

「ええ、そうです」

マルセイユの隣にいた、僚機のライーサがうなづく。

「何でも上坂大尉は、東部戦線では相当活躍されたそうで……それでハンナが刺激を受けて、模擬戦をすることになったそうです」

「へえ、そうなんだ……」

「……さて、さっさと始めようか、イチロー」

「そうだな」

そういうと、二人は魔方陣を浮かび上がらせて、一気に空へと舞い上がった。

それを、見上げる加東とライーサ。

「さて、どっちが勝つんだか……」

「どういうことですか、加東大尉？」

ライーサは、マルセイユの勝ち揺るがないと思っていたのか、驚いた表情で加東を見つめる。

「あー、そう言えば知らなかったのよね……」

加東は、現役時代の時、模擬戦で戦ったことを、目を虚ろにしながら思い出す。

「ああ見えて、啓一郎って一度も模擬戦で負けたことがないのよ。だから非公式にだけど、扶桑最強のウィッチと呼ばれていたのよね……」

「さ、最強ですか……」

「ええ……」

加東は少し呆れた表情で、空を見上げる。空では二人の空中戦^{ドックファイト}が始まるうとしていた。

30分後――

計20回もの模擬戦を行い、二人は帰ってきた。

上坂は、空に上がった時と全く変わらず、汗一つ掻いていないのに対して、マルセイユは、全身を黄色く染め、傍から見ると、誰だかわからない状態になっている。

「あー……お疲れ、啓一郎」

「ああ、どうも。キ61はなかなかいいな、思い通りに動いてくれる」

達観とした上坂の横で、マルセイユはブツブツとつぶやいていた。

「……私が負けた、私が負けた……」

「……………」

マルセイユの、いつもと明らかに違う様子に、加東とライーサは、黙って見守ることしかできない。

最初は、お互い魔法力を駆使して、上坂の“ポルターガイスト物体浮遊”に翻弄されたマルセイユ、その後、魔法力なし、高位、劣位での戦闘など、あらゆる想定で戦ったのだが、結局マルセイユは、一度も上坂に勝つことが出来なかった。

「ダ―――！」

夕日に染まるアフリカの砂漠に、マルセイユの叫び声が響き渡っ

た。

その後――

アフリカの基地では、事あるごとに上坂に模擬戦を申込み、そのたびに敗北するマルセイユの姿が見えた。そしてそのたびに、上坂とカールスラント軍の整備兵達との関係は悪化していったというのは言うまでもない……

第三話（後書き）

扶桑のユニットは割増しの能力で書いています。というのも、史実に比べて工作精度が高く、いい部品を使っているからです。

第四話

「ネウロイ来襲！」

扶桑陸軍が増援としてやってきて、しばらくたつたある日――突如基地のサイレンが鳴り響き、兵士達が慌ただしく動き出す。ハルファヤ峠で、ネウロイの大規模侵攻が確認されたためだ。

「ただちに出撃する！」

「全機、出撃せよ！」

上坂とマルセイユが、あつという間に自身のストライカーを履き、タキシング待機状態になる。二人の手には、カールスラント製のMG34が握られ、上坂はそれに加え、背中にも2丁、機関銃を背負っていた。

「発進！」

二人は同時に叫ぶと、そのまま高度を上げて、大空に舞い上がる。

「私達も行くわよ！」

「了解！」

後に残された、加東とライーサ、それに稲垣も、発進の準備を進める。

本来なら、射撃の練習をしていない稲垣を連れて行きたくなかったが、抱き規模侵攻では、一人でも多くのウィッチが欲しいので、仕方なく出撃を許可した。

「いい、私から離れないでね！」

「わかりました、ケイさん！」

頷いた稲垣の顔は、初の実戦の影響か、緊張していた。

「……まさかこの私が二番機になるとはな……」

「なんか言ったか、マルセイユ？」

「いいや、何でも……」

二人は上坂を先頭に、高度3000mを進撃する。アフリカの航空型ネウロイは、低空で飛ぶことが多く、これでも“高空”として扱われることが多い。

「……それにしても大丈夫なのか、私達が先行して」

「心配ないだろう。それに、ウチ（扶桑陸軍）のヒガシさんや稲垣は、実戦に出せないからな。ライーサに護衛してもらった方がいいだろう」

「まあそうだな、ライーサは私の僚機を務めるぐらいだしな」

マルセイユもそこは同意する。稲垣はまだ実戦に出たことはない

し、加東は魔法力の衰えでシールドを張ることが出来ない。それならば、護衛としてライーサがいると心強い。

やがて、前方のあちこちで爆発が見えてくる。どうやら戦場に到着したようだ。

上空には、アフリカでおなじみの飛行壺フライングボットが、地上型ネウロイに混じって、味方の地上部隊に攻撃をしていた。

「ようやくだな……よし、どっちが多く撃墜できるか勝負だ!」

「……全く」

編隊を崩し、先に突撃していったマルセイユにため息をつきながら、上坂も戦場に突入していった。

「……えっ?」

ブリタニア陸軍第4戦車旅団C中隊隊長、セシリア・G・マイルズ少佐は、上空を飛んでいた飛行壺フライングボットが、何機も爆発していることに気付いた。

慌てて空を見上げると、上空で二人のウィッチが戦闘を開始している。

一人は見たこともない濃緑の軍服を着ていて、誰だかわからないが、もう一人は見間違えるはずもない――

いつも上空援護してくれる、頼れるエース。

「全員に告ぐ! “アフリカの星”が来てくれたぞ!」

マイルズが叫ぶと、途端に湧き上がる歓声。ネウロイの猛攻によって、下がり始めていた士気は、一気に最高潮に達した。

「さすが“アフリカの星”ね……って、あら？」

マイルズは、マルセイユが迎撃している空に、機関銃だけが勝手に飛んで、ネウロイに銃撃を加えているのが見えた。

「なに、あれ……」

謎の珍現象に、マイルズは戦場にもかわらず、思考停止に陥る——と。

「隊長！」

「……あ、ああ、すまん！」

部下の声で現実に取り戻され、慌てて戦場に戻っていった。

「……さすがは噂通りだな、シャドウ“影”」

前線から少し離れた場所で、カールスラント陸軍、エルヴィン・ロンメル中将は、双眼鏡越しに、戦闘を見ていた。

彼の視線の先には、飛行壺相手に、圧倒的な強さを見せる上坂の姿がある。

ロンメルは、扶桑陸軍が来たとの報告を受けた後、あらゆる手段を使って、彼女（彼）らのことを調べた。すると、加東は扶桑海事変で23機撃墜したエース、上坂は東部戦線で数えきれないほどのネウロイを撃墜したエースと分かり、彼はそれを確かめようと、わざわざ少数の護衛を連れて、戦闘の視察をしに来たのだった。

そして実際見てみると噂通り——いや、噂以上の働きをしていて、ロンメルも思わずにやりとしていた。

「これでアフリカも安泰だな……」

「閣下！」

ロンメルがそうつぶやいたとき、部下が地平線の向こうを指さす。

ロンメルは双眼鏡でその方向を見ると、遠くから大型陸戦型ネウロイが3機、こちらに向かって来ていた。

「これはまずいな……」

ロンメルは、額に汗をかきながらつぶやく。大型陸戦型は、非常に装甲が固く、依然戦った時も、陸戦ウィッチが弾切れになるまで打ち込んでも破壊できなかった。

今回はそれが3機も来ていて、ネウロイが本格的な攻勢に出てきていることの証とも言えた。

「く……、このままでは……」

ロンメルは、ただ悔しそうに見つめていることだけしかできなかった。

「はっはっは、今回は私の勝ちだな！」

敵がいなくなった空に、高笑いするマルセイユの声が響く。今回の戦闘で、マルセイユは7機、上坂は6機を撃墜し、撃墜数で勝ったことで、喜んでいた。

しかし、そんなマルセイユとは対照に、上坂は地平線の向こう側から近づいてくる地上型ネウロイを見つめていた。

「これはまずいかな……」

「何がだ？」

上坂の様子がおかしいと気付いたマルセイユは、上坂の見ていた方を見て、途端に険しい顔になる。

「あれはいつかの！ くそ、MG34じゃ全然効かないぞ！」

「……仕方がないな」

「えっ？ ……あ、待て！」

マルセイユが止める間もなく、上坂は一気に急降下を開始した。

「まずい、あんなのが3機も……」

地上では、マイルズ少佐が部下達と共に、ありったけの弾を大型陸戦型ネウロイに浴びせかける。しかし、敵はまだ距離が離れているためか、命中しても平然とこちらに向かって来ていた。

「隊長！ 徹甲弾、あとわずかです！」

「く、これでは……！」

人類は北アフリカを失う――

そう思った時だった。

「えっ？」

マイルズの横を、黒い影がよぎる。

濃緑の軍服を着たウィッチが、超低空を飛んでいた。

いや、確かにストライカーユニットは履いているが、あれはどう見ても……

「お、男！？」

マイルズは、突然の出来事に、素っ頓狂な声を上げる。そうしている間にも、男性魔女は、一気に大型陸戦ネウロイに突撃していく。

そして、彼がネウロイの横を通り過ぎた瞬間――

ネウロイの体が横に真っ二つに切れ、そのまま大地に崩れ落ちた。

「なっ……」

その場にいた全員が、言葉を失う。その間に男性ウィッチは、あつという間に残りのネウロイも、破壊した。

彼の手には、赤く光る、反りが入った剣が握られている。恐らく、それで敵を切り裂いたのだろう。

「む、無茶苦茶よ……」

通常空中戦は、非常に高速かつ高機動の中で行われる。そのため、少しでも操作を誤ると、空中衝突を起こし、大事故につながる。そのため欧州の航空ウィッチの兵装は、あくまで遠距離攻撃が出来る銃火器に限られていた。

そんな常識を覆した謎の男性ウィッチを見て、マイルズは、戦闘が終わった後も、しばらく固まったまま、空を見上げていた。

3機の大型陸戦型ネウロイを“撃墜”した上坂は、マルセイユの所まで上昇する。その光景を見ていたマルセイユは、無然とした表情で、上坂を迎えた。

「……別に地上撃破は数えなくてもいいぞ」

「ダ——！ 負けたー！」

上坂のつぶやきに、マルセイユは頭を抱え、たいそう悔しがる。

以前大型陸戦型ネウロイと戦った時、全く役に立てなかったマルセイユにとって、その3倍もの敵を、あっさりと撃破した上坂に、勝った気がしなかったからだ。

「くそ……こうなったら私も剣を……」

マルセイユがブツブツとつぶやいていると――

「マルセイユさん！」

「ん？ ……おわっ！」

遅れてきた稲垣が、マルセイユの胸に飛び込んだ。その様子を、少し離れたところから撮影する加東。

「遅いですよ、ヒガシさん」

「あはははは……ごめんね、こっちも敵が出て……」

加東は少し申し訳なさそうな顔をする、加東達も戦場へ向かっていたら、途中でネウロイと遭遇し、戦闘していたのだ。

「それにしてもあっさりと……ハンナとイチローだけで、アフリカは大丈夫なんじゃ……」

ライーサは、虚ろな目でつぶやく。どうやら少し、自信を無くしたようだ。

「そんなの気にしないでいいわよ。啓一郎は“例外”だから」

「……はあ」

加東の容赦ない言葉に、上坂は何も言えず、盛大なため息をついた。

扶桑陸軍がアフリカで挙げた初戦果――

扶桑皇国でそれが知られると、扶桑陸軍上層部は大パニックに陥ったという……

第五話

「何だ、これは！」

アフリカから遠く離れた、扶桑皇国、東京三宅坂――

上坂曰く、陰謀、策謀、謀略の3つを担当している“参謀”の本拠地、扶桑皇国陸軍参謀本部から、怒号が響き渡る。

怒号の主は、カミソリのような鋭い風貌を浮かべた細身の中年男性、肩に中将の階級章をつけ、殺風景な執務室の奥にある、重厚な椅子に座っている。

「これは、といわれますと……」

机に挟まれた反対側で、参謀肩章と大佐の階級章をつけた男性が、青い顔で尋ねる。

「このことだ！　なんで我が輩にこの話が入ってこないんだ！」

中将が、手に持っていた新聞を、大佐に付きつける。そこには、ブリタニア語で『統合戦闘飛行隊アフリカ、トブルクにて大戦果、扶桑陸軍の精鋭、アフリカの星マルセイユとの抱擁』と書かれ、紅白の衣装を着た少女が、黒い服を着た少女と抱き合っている写真が、大きく載っていた。

「そ、それは……たぶん六課か七課あたりが……」

「六課か七課あたり、だと。ふざけるな！　なんでこんな国民の士気と陸軍の名声を高めるような戦果が外電で入ってこなければならんだ！」

中将の顔が、徐々に赤くなる。それに対し、大佐の顔は、どんどん青くなっていった。

「さつさと事実関係を調べろ！ 誰がこの航空隊を作り上げたのか、そしてこのウィッチが誰なのかを！」

「はっ、了解しました」

慌てて部屋から飛び出していく大佐。

「……ふんっ」

中将は、誰もいなくなった部屋で、一人怒りを鎮めていた。

「うーん……」

朝、加東はベットの上で伸びをする。加東に割り振られたテントは、10人程度のベットが置けるほど広く、そこを一人で使っている。

加東は起き上がると、扶桑陸軍の制服に着替え、二重になっている入り口から外に出た。

「あ、おはようございます、ケイさん」

「おはよう、今日も早いわね」

外に出ると、きつちりと制服を着こんだ稲垣が立っている。昨日、トブルクで買ったスカーフを首元に巻いて、頭には防塵ゴーグルを乗せていた。

「うーん……そのスカーフの巻き方じゃあだめよ」

加東はそういうと、スカーフをきつちりと巻き直す。砂漠では、ちよつとした風でも砂塵が舞い上がり、あちこちに砂が入り込む。それを防ぐためには、しっかりと巻かないといけないのだ。

「あ、ありがとうございます……あ、それよりも！」

稲垣は、用事を思い出す。

「食料庫ってどこですか？ 上坂さんに、野菜を持ってくるように言われたので……」

「へえ、啓一郎が料理するんだ」

加東は、上坂の料理に内心喜ぶ。扶桑海事変の頃、あまり食欲がなかったのにもかかわらず、上坂の料理だけは、おいしく、お腹いっぱいになることが出来たからだ。

今思えば、あの戦争を戦い抜けたのも、上坂の料理と、加藤が作った得体のしれないジュースのおかげだと思っていた。

「わかったわ、さつさと行きましょう」

内心焦る気持ちを抑え、加東は稲垣を案内した。

基地から少し離れたところに岩山があり、食料庫はそこをくり抜いて作られていた。

加東達は、歩哨に鍵を開けてもらい、中に入る。途端に、周りを、冷たい空気が身を包んだ。

食料庫の中は暗く、目が慣れるまで少し時間がかかる。ようやく目が慣れてくると、酒瓶や、食料が入った箱が大きに棚に陳列していた。

「ええと、じゃがいもとにんじんは……あ、あった」

稲垣は、上坂から言われた物を、貰っていくと、加東に一言告げて、食料庫を出て行った。

加東は、初めて入る食料庫を、ここぞとばかりに見回る。各国から送られた、様々な物資が、綺麗にまとめられて置かれていた。

「ワインにリキュール、ブランデーにジン、ビールに……あら、ストレガまで」

加東は、世界中から集められたとは思えないほどの、色々な種類の酒が並んでいるのを見て、小躍りする。加東だけでなく、上坂やマルセイユも酒は好きなので、士気を上げるのには非常に楽だ。しかし、と同時に思う。ここにある食料（特に酒）は、渡されたリストよりも明らかに多く、種類も豊富なのだ。

加東は食料庫を出て、歩哨にその疑問を尋ねる。

「ああ、それはマルセイユ中尉のおかげですよ」

何でも、マルセイユの名声は、世界中に広がっており、マルセイユが戦果を挙げるたびに、あちこちからプレゼントが届くのだそうだ。

それに加え、他の軍が撤退した際に放棄された物資を回収するらしい。

「そうなんだ、でも命は大切にね」

「了解です」

加東は、歩哨に告げると、基地に戻っていった。

加東が基地に戻ると、とある一角に、たくさんの兵士が集まっていた。

なんだと思って近づいてみると、滑走路に長テーブルが置かれ、カールスラント製の野戦炊事車に、長い行列が出来ていた。

「おお、先に食べているぞ」

長テーブルの一つに腰かけていたマルセイユが声を掛ける。テーブルの上には白いご飯と豚汁が乗っていた。

「へえ、豚汁か」

「ええ、本当は味噌汁を作りたいんですけど、味噌がなかったの
で……」

「でも、上坂さんの豚汁はおいしいですよ」

野戦炊事車で、兵士達に豚汁をよそっていた上坂と稲垣が声を掛ける。加東は、久しぶりに嗅ぐ、上坂の料理のにおいで一気に空腹感がこみあげてきた。

加東も兵士達と共に列に並び、ご飯をよそってもらうと、空いていたマルセイユの隣に座る。周りを見回すと、上坂が作ったということに、少し複雑そうな顔をしながらも（マルセイユをコテンパンにやつつけるため）、大半の整備兵達は、おいしそうに豚汁を食べていた。

「あら、あなた箸を使えるのね」

加東は、マルセイユが上手に箸を使い、白いご飯と豚汁をすすっている姿を見て、軽く驚く。

「ああ、昔、国で扶桑のウィッチと知り合って、それで覚えた」

「へえ、そんなことがあったんだ。そのウィッチって陸軍？ 海軍？」

「たしか、海軍って言うていたなあ」

「へえ、そうなんだ」

そういったやり取りをしながら、加東は久しぶりの扶桑料理を堪能する。扶桑から送られてきたお米は、新米のためか、白く光り輝いていて、口の中で、噛めば噛むほど甘みが出てくる。そして、おわんによそられたご飯の中には、釜で炊かれたと分かる、オコゲ

が入っていて、その絶妙な硬さに、加東は自然と頬が緩んだ。

「ああ……久しぶりのお米……」

「本当においしそうに食べますよね、ヒガシさんは……あ、そうだ」

上坂は、全員のご飯をよそい終え、加東の前に座り、幸せそうな顔をする彼女に苦笑すると、ふと思い出したかのように、マルセイユに向き直った。

「マルセイユ、ぜひ牛乳を分けてくれ」

「嫌だ」

「なぜ!？」

マルセイユの即答に、上坂は思わず声を上げる。マルセイユは、非常に牛乳が好きで、後方の基地に、わざわざ乳牛を飼っているほどだと、上坂はわざわざ調べたのだ。

「私の牛乳だぞ。イチローにあげる義理などないだろう」

マルセイユは、日ごろの模擬戦で負けているので、その腹いせで、意地悪を言っていた。そこで上坂は、伝家の宝刀を抜く。

「……非常に残念だ。牛乳があれば、シュークリームやケーキ、それにアイスクリームまで作れるのだが……」

上坂がぼそりと言った言葉に、加東達はピクリと反応する。いくら彼女達が軍人とはいえ、やはり年頃の少女（一部疑問があるが…

…）なのだ。

「マルセイユさん！　ぜひ牛乳を分けてください！」

「ハンナ！　私からもお願い！」

「マルセイユ中尉、ただちに牛乳を渡しなさい」

稲垣やライーサはおろか、加東までもが、上坂の味方にまわる。

「お前ら！　私と上坂、どっちが大事なんだ！」

「上坂さんです！」

「イチローさんです！」

「啓一郎に決まっているじゃない！」

「お前らな……」

即答する三人。いくらアフリカの星でも、やはり胃袋には勝てなかった。

その後、マルセイユからの定期的な牛乳の提供により、ウィッチ達は、砂漠の中でも、上坂お手製のおいしいお菓子を食することが出来たという。

それを知ったロンメル中将が、事あるごとに、基地に“視察”に来るようになったというが、そのことは歴史の闇に消えて行った……

第五話（後書き）

明日からいろいろと忙しくなるので、毎日投稿はできません。ご容赦を……

第六話（前書き）

台風で休校になったため、更新します……

第六話

扶桑皇国、東京三宅坂、陸軍参謀本部――

中将の前で、参謀大佐は緊張した面持ちで直立不動していた。

「確認いたしました。統合戦闘飛行隊設立に関する協力要請は出ておりません」

「出ていない、だと？」

その報告を聞いて、眉をしかめる中将。

「はい、公式に我が国から参加した部隊は存在していません。ただ……」

「ただ、何だ？」

「過去に欧州連合軍から援軍要請があり、それに従ってウィッチ一名とそれを支援する部隊、並びに北欧戦線と、現役復帰要請中のウィッチ各一名の派遣が、第六課から上がっております。現在、アフリカにいる我が陸軍部隊はこれ一つであります」

「その部隊と、統合戦闘飛行隊との関係は？」

「はっ、それに関して気になる情報が……」

参謀大佐は、中将に一枚の紙を差し出す。

「何だ、それは？」

中將は、渡された紙を読み始める。読み進めるに従って、赤ら顔だった中將の顔が、青くなっていた。

「……これは本当なのか？」

「現在調査中です」

「調査中だと？ 派遣された人間はわかっているのだろうか？」

「それが、この電文自体が無かったことにされておりまして……」

「……やはりか」

椅子に深く腰掛ける中將。一瞬目をつぶると、机の引き出しから書類の束を取り出すと、机の上に投げ出した。

「ここに一つの報告書が来ている。読め」

参謀大佐は、その書類を受け取ると、読み始める。その読んでいる大佐の表情を、中將はじっと見つめていた。

「じつ、これは……」

「そのアフリカから送られてきたものだよ。差出人は『カミソリの懐刀』だ」

「じつ、しかしなぜ閣下に……」

参謀大佐は、信じられないという表情でつぶやく。

「それはわからんな。しかし、これは逆に好都合ともいえる。なにせ、二部の奴らの弱みを握ったんだからな」

中將は、手に入れた強力な手札に喜んでいるのか、凶悪な笑みを浮かべる。

「ともあれ、儂は『あの御方』と会ってくる。貴様はただちにアフリカの部隊と連絡を取れ。そして、事実関係が確認され次第、叙勲の用意と、逃げた奴らの処分を」

「はっ、了解しました！」

参謀大佐は、一礼すると部屋を出て行った。
後に残された、中將。

「……くそ、いったい何をしようとしているのだ、石原め……」

中將の問いに、誰も答えるものはいなかった。

アフリカ――

まだ外は薄暗く、東の空に断続的な光が見え始めたころ、突如基地の警報が鳴った。

「くそつ、こんな時間に襲撃か！ エンジン始動！」

テントから飛び出したマルセイユの怒号が響く。彼女はネグリジエのまま、ストライカーユニットに駆け出していた。

加東もテントから駆け出し、自らのストライカーユニットに足を滑り込ませる。

「大尉殿！ これを！」

整備兵が差し出した銃は、いつも使っているMG34ではなく、それを二つくつつけた、一式連装機関銃だった。その銃には、250発弾倉が取り付けられていて、重量は30？は越えている。

「いつものは無いの！」

「現在分解整備中なんです！」

整備兵の言葉に、加東は僅かに不安を覚える。彼女の魔法力は衰えていて、無事に飛び上がれるか、心配だったからだ。

しかし、そんな悠長なことを言ってもいられず、整備兵から銃をひったくる。

「すみません！ 遅れました！」

「先に行っているわ！ 急いで！」

遅れてやってきた稲垣に声を掛けると、マルセイユが空に上がったのを見て、加東も一気に加速する。

いつもより少し長い距離を走って、加東は大空へ上がる。そのままマルセイユの横に付いた。

「二番機的位置に着くわ」

「加東か、ライーサが来たら替われよ。シールドは役立たずなんだからな」

「わかったわ……それにしても、啓一郎がいない時に……」

上坂は、アフリカ司令部に呼ばれ、現在はトブルクにいた。また、ストライカーユニットは持っていかなかったので、基地に戻ってこないと出撃が出来ない。

「そんな顔をするな、私がいるだろう」

マルセイユは、少しふてくされた顔を見ると、さっさと前を向いた。加東はその姿を見て、笑いがこみあげてくる。

加東は、持っていた銃を背負うと、腰の雑囊からライカを取り出し、ネグリジエ姿のマルセイユを撮った。

「な、何撮っているんだ！」

「別にいいじゃない。これも広報の一環よ」

マルセイユは顔を赤くして抗議する。しかし、加東は彼女がまるで神話に出てきた女神のように見え、しばらくこっそりと撮影をしていた。

「いたぞ、ネウロイだ」

しばらく巡航速度で飛んでいた加東は、マルセイユの言葉につられ、目を細める。

はるか遠くに、うつすらと巨大な影が、こちらに向かって来ているのが見えた。

「なに……アレ……」

「私も見たことが無いな」

加東のつぶやきに、マルセイユが答える。前方に見えるのは、これまで出てきた敵よりもはるかに大きく、全長は優に300mを超していた。

稲垣達はまだ現場には到着しておらず、現在この空域にいるのは加東とマルセイユだけだ。

「まあいい、とにかく突っ込むぞ」

「了解」

マルセイユを先頭に、ネウロイに対して突撃を掛ける。敵も気付いたのか、マルセイユにビームの雨を浴びせかける。しかし彼女はその攻撃を紙一重でかわし、加東もマルセイユの動きをまねて、かわしていく。

その間にも、二人はネウロイに7・92mm弾を浴びせかけるが、表面装甲が固いのか、コアを露出させるまでには至っていない。

「くそ！ 敵が固すぎる！ 大きな銃が欲しい！」

「ここにはないわよ！ アハトアハトならあるけど！」

「そんなの持てる奴いるわけないだろう！」

加東の冗談に、マルセイユはあきれ半分に怒鳴る。しかし加東は、基地の方角を見てつぶやいた。

「……そうでもないみたいよ」

『すみません！ 遅れました！』

『曹長がこれを持って行けと言っていたので……』

無線越しに、ライーサと稲垣の声が入る。遠くの方から、稲垣がFlak18 8.8？高射砲を担いでこちらに向かって来ている。稲垣の隣では、ライーサが全周を警戒していた。

「……どれだけ力持ちなんだ、あの子は？」

「さあ、でも今回は非常にありがたいわね」

「まあいい……マミ！ そいつを敵のど真ん中にぶち込んでくれ！ 私が囹になる！」

『わかりました！』

「ケイ！お前は引け！」

マルセイユは加東に怒鳴る。彼女のシールドでは囹に慣れないと

判断したからだ。

加東がうなずく前に、マルセイユは突撃して行く。今までとは違い、想像もできないようなトリッキーな動きになった彼女を、ネウロイは執拗に攻撃していく。

『撃ちます！』

その隙に、実に10mという至近距離まで近付いた稲垣は、ネウロイの中心に、88mm砲弾をたたき込んだ。

さすがのネウロイも、至近距離の攻撃には耐えられず、コアを露出させる。そこに、固有魔法“未来予知”で正確に銃弾をたたき込むマルセイユ。コアを破壊されたネウロイは、先ほどの頑丈さはどこに行っただのやら、あっさりと雪のような、白い破片と化した。

「……全く、俺の留守中を狙ってくるとは……」

基地の一角に作られたバーで、今回の戦闘に参加できなかった上坂がつぶやく。彼の手にはビールジョッキがあり、なみなみとビールが注がれていた。

「ま、今回はマルセイユのおかげで助かったわ。……それに、結構いい写真も撮れたし」

加東は、そんな上坂を宥めながらも、極上の笑みを浮かべている。戦闘終了直後に撮ったマルセイユの写真が思いのほかよく撮れていて、各国の新聞社がこぞってその写真を買収求めたからだ。

「……まあ、ようやく扶桑からも物資が届くようになったし、しばらくは大丈夫だな」

ようやく扶桑本国と連絡が取れ、正式に統合戦闘飛行隊に参加するよう言われ、これによって、扶桑から食料などが送られてくるようになった。

「そうね。それに……」

加東は、隣で酔い潰れて寝ているマルセイユを見る。

「私達には、“アフリカの星”がいるもの」

「……そうだな」

マルセイユのだらしない寝顔を見て、二人は微笑を浮かべた。

第七話

「そうだ！ 部隊マークを作ろう！」

どこかのキャッチコピーみたいなことを、突然マルセイユは言った。

アフリカは5月になり、さらに気温が高くなり、比較的涼しい日陰で休んでいた時のことである。

「……どうしたの、いきなり」

加東は、相変わらずの突拍子もない思い付きに半分呆れながらも、寝ていた身体を起こす。

「ようやく統合戦闘飛行隊が正式に発足されただろう？ だから、新しい部隊マークを作ろうじゃないか！」

目をキラキラ輝かせるマルセイユ。その姿を見て子供っぽいと思う加東だが、彼女の言うことに逆らうことはできない。唯一出来るとしたら上坂だが、現在は新しい武器を取りに、トブルクまで飛んで行っている。そのため、現在加東が、代理として隊長をやっていた。

「部隊マークならいいのがあるじゃない」

加東はそう言うと、滑走路わきで整備中のマルセイユの愛機、Bf109-F砂漠仕様を指さす。ユニットの側面には、狩人とライオンのマークがあった。

「あれは第一中隊のマークだ。あれではなくて、もっと格好いい、私に相応しいマークを作ってくれ」

「……はあ」

マルセイユの命令（加東の方が上官だが……）に、加東はただあきらめるだけだった。

「全くもつつ、マルセイユったら」

加東は、ブツブツと文句を言いながら、それでも部隊マークのデザインを考えていると、滑走路に上坂が降りてきた。その手には、MG34とは違う、大きな銃が握られている。

「あらっ、啓一郎、もう戻ってきたの？」

「ええ、こいつを取りにね」

上坂が見せた銃は、カールスラント製MG15/20。カールスラントの航空機に搭載される、大型の機関“砲”だ。口径が20mmと非常に大きく、破壊力は7.92mm弾とは比べ物にならない。

「……いくら啓一郎でも重くない？」

加東は少し顔を引き攣らせながら尋ねる。銃の長さは171？もあり、一般的な扶桑人に比べて背が高い上坂でも、そのアンバランス

スさはよくわかる。また、重量が40?以上あり、普通のウィッチでは持つことすらできない。

「そうでもないですよ。欧州撤退戦の時にはこれを使っていました……」

そういうと、上坂は少し顔を曇らせた。

「……どうかしたの？」

不思議に思った加東が尋ねると、上坂は気を取り直したかのように、元の無表情に戻った。

「いいえ、……それよりも、少し話があるのですが」

「話？」

上坂の後に付いてやってきたのは、一つの格納テントだった。

その中に入ると、この前の戦いで稲垣が使っていたFlak 18

8・8?高射砲が、砲座から外されて鎮座している。

「……この前の戦いでは、欧州方面にもいた大型ネウロイが現れた
それで」

「ええ、それを真美がこれを持って、やっつけたわ」

「しかし、これはあまりにも重いでしょう。実際稲垣に聞いてみたら、思うような機動が出来なかったと言っていましたし」

「まあそうね……」

加東は考え込む。確かにこの前はそれで何とかだったが、本当ならもっと軽い大砲が欲しいと思っている。

「でも、啓一郎の20mmじゃあ駄目なの？ あれも結構威力はいけど……それに啓一郎には刀があるし」

「出来ることなら、37mmクラスの大砲が欲しいと思っています。稲垣の積載限界は非常に大きいですし、俺とマルセイユ、ライーサは、空戦型ですしね。……あと刀だと、遠距離攻撃はできませんよ」

「つまり、真美を地上打撃ウィッチにするってこと？」

「まあそういうことになりますね」

上坂がそう言った時、テントに整備曹長の氷野が入ってきた。

「ただ今参りました」

「ああ、どうも……それで、どうですか？」

上坂は、入ってきてそうそうの氷野に尋ねる。どうやら以前に何かお願いしていたようだ。

「ええ、こいつの軽量化は進めています、本当であれば他の方が欲しいぐらいです。カールスラントの37mm砲が手に入らないか

聞いてみたのですが、全て東部戦線の方に持って行かれたそうで……」

「そうか……」

上坂はため息をつく。東部戦線がどれだけ激戦かは、彼が一番よく知っており、あまり無茶を言うことはできない。

「ねえ、だったらウチの九〇式7.5cm野戦高射砲でも送ってきてもらえば？」

難しい顔をして考え込む上坂に、加東は提案する。しかし、上坂はそれを却下した。

「あれは相当壊れやすくなっているし、そもそも威力が低いので、そんなのを使うなら九七式自動砲を使った方がいいですよ」

「あー、あれね……」

加東は、上坂の提案に苦笑いする。加東が依然使っていた“砲”で、口径は20mm、威力も長砲身のため申し分もないのだが、重量が50kgもあり、威力に対してあまりにも重すぎた。

二人のやり取りで思い出したのか、氷野がつぶやく。

「……そういえば、ブリタニアの基地に、ボヨヨールド40mm砲があるって聞いたような……」

「それを先に言え！」

二人が思わずツッコむ。バルトランドにあるカールスコーガ社の

40mm機関砲は少し重いものの、初速が早く、命中精度が高いので、各国で使われている高性能機関砲である。

「よし、なら俺が話しをつけるから、曹長は砲が到着次第、ただちに改造に取り掛かれ」

「了解しました！」

このとき、氷野は今までしたこともない、見事な敬礼をしたという……

上坂がブリタニア軍に電話をかけた後、二人は民間使用のトラックで、第七師団の基地を目指していた。上坂達が使っている基地から直線距離で10kmほど離れているこの基地は、トブルクの海岸線沿いに位置していた。

二人が基地の入り口に着くと、見知った顔の男性が、下に大きな木箱を置いたまま立っていた。

「あら、久しぶりね、ウェルナー」

「ああ、意外と早かったな。もう少し時間がかかると思ったんだが……」

「うちの隊長が電話を掛けてすぐに出発したからね。……それより例の物は？」

ウェルナーは、下に置いてある木箱を指さす。加東がその箱を開けると、大きな大砲が、ワイン瓶のような弾薬と共に、入ってた。

「ご所望の、うちの第十五軽砲連隊用の40mmだ。弾が減る分だけ防空は頼むよ」

「ご心配なく。完璧な制空権^{エアカバー}を提供しよう」

上坂の言葉に、ウェルナーは苦笑する。以前のような苦手意識はなくなったようだ。

「ホントに頼むよ。うちのオヤジがうるさいんだ」

「何かあったの？」

加東が尋ねる。

「ああ、大きな声で言えないが、新たにリベリオンの部隊が来るそうなんだ」

「ああ、パットン中将の部隊ですね」

「ああ、どうやら本格攻勢を仕掛けるための部隊らしい。だからいろいろ焦っているんだ」

「なるほどね……それにしても、別にライバル意識を持たなくても一緒に戦う仲間なのに……」

加東は膨れっ面になる。ネウロイという人類共通の敵がいるんだから、こんなときぐらい協力し合えないのは変だと思わなく。

「まあ、そうも言っていられないでしょう。なにせ、うちも陸軍と海軍の仲の悪さは有名ですしね」

まあ最近はどうでもなくなりましたけど、とつぶやく上坂の表情が、暗くなっているのを、加東は見逃さなかった。

「どうしたの？　なんか今日の啓一郎ちょっと変よ」

「……いえ、少し考え事をしているだけです」

元の表情になった上坂だが、加東は心の中で何か忘れていたような気がしていた。

（うーん、何だろう……特に何もなかったようなんだけどな）

結局、加東は帰りの車の中でも考えていたが、何も思いつかなかった。

第八話

上坂達が基地に戻ると、氷野は早速40mm砲を改造しようと部下を連れてさっさと行ってしまう。上坂も、書類を書かなければいけないと言って、自分のテントに戻った。

残された加東は、とりあえず自分のテントに戻ろうと歩き始めた。ばったりとライーサに出会った。

「あら、ライーサ。哨戒飛行は終わったの？」

「ええ、マミと一緒に飛んでいました」

「どう？ 真美の様子は」

加東の問いに、ライーサは笑顔で答える。

「そうですね、新人とは思えないほど機動がきれいですし、射撃もなかなかよくなりましたよ」

最初は加東が稲垣を教えていたが、実際の戦闘の経験を積ませるために、ライーサと組ませたいと上坂に進言していた。加東のシールドでは、実戦に参加できないからだ。

上坂は、マルセイユやライーサにそのことを言うと、快くそれを引き受けてくれた。そのため、今稲垣に戦闘機動を教えているのはライーサとなっている。

「ありがとね、私はもう上がっているし、啓一郎だと……あいつまでもな機動じゃあないから」

「ははは……あまり上坂さんの前で言わない方がいいですよ。あの
人結構傷つきやすいですし」

「大丈夫よ、すぐに立ち直るから」

「……それにしても、上坂さんってすごいですよね。ハンナ相手に
いまだ負けなしって」

ライーサが言うのは、訓練と称してマルセイユが上坂に決闘を申し込んで、そのたびにペイントまみれに帰ってくることだ。上坂はハンデとして、固有魔法を使わなかったり、あえて劣位（相手が最初から後ろにいること）から始めたりするのだが、マルセイユはいまだに上坂に一発も当てていない。

「ああ、あれね。昔から啓一郎はやたら強くてね……私の知り合いなんか、刀での決闘を挑んだんだけど、結局一度も勝てなかったって嘆いていたわ」

「わあ……」

ライーサはその光景を想像したのか、目が虚ろになる。

「……でも、昔は結構のんびり屋さんでね……今みたいにシツカリ、
というよりはのほほん、って感じだったわ」

「へえ、意外ですね」

「ええ、啓一郎って戦うことに向いていないって思っていたから、
それである實力を持っているってわかると嫉妬したこともあったわ
ね」

加東は、昔のことを思い出し、少し感傷的になる。かつての上坂の面影は殆どなく、戦争というものが彼を変えてしまったんだと思った。

そうやって話をしていたら、稲垣が鯉のぼりを持ってやってきた。

「ケイさん、これどこに飾り付けますか？」

「これ……ってこの魚みたいな旗のこと？」

ライーサは話がよくわからず、稲垣に尋ねる。加東は扶桑の伝統的な行事に付いて説明した。

「これは端午の節句っていう行事で、主に男の子や、子供たちの成長を祝う物なのよ」

「はい、毎年5月5日には柏餅を食べたり、戦国武将の兜を飾ったりするんです。この鯉のぼりもそのうちの一つなんですよ」

「えっ……5月5日？」

「どうかしましたか？」

稲垣の心配をよそに、加東は考え込む。そして、今までの疑問が一気に氷解した。

「あ……あ———！」

次の日の夜――

上坂は一人、基地から少し離れた場所で、月明りに照らされながら酒を飲んでいた。

砂漠の夜は一気に冷え込んで、長そででも寒いと感ずることがあるが、今の上坂にとって、この寒さが逆に気持ちよかった。

今日は1943年5月5日――

上坂の20回目の誕生日だった。

（……すごく長く生きたと思っていたが、まだ20年しか経っていなかったんだな……）

上坂は、コップの酒をあおりながら、これまでの人生を振り返る。

すべてを失った扶桑海事変――

生きる希望もなく、ただ戦い続けた欧州撤退戦――

毎日のように戦友が居なくなっていた東部戦線――

彼はたった20年しか生きていなかったが、これだけの激戦を生きて抜いてきた。そして、これからもまだ戦い続ける。

一般的なウィッチは、20歳になるか、純潔を失うと魔法力が殆どなくなってしまうが、上坂の家は戦国時代、織田信長に仕えた忍びの一族であり、一生魔法力を持つ家系だったので、その血を引く上坂は、20歳になっても魔法力の衰えは確認できなかった。

(……皮肉だな。空を憎んだ俺は飛べて、空を愛したヒガシさんは飛べないとは……)

上坂は自嘲めいた笑みを浮かべる。彼は自分の誕生日を祝う気にもなれなかった。

彼の隣に置かれたもう一つのコップ――

それは、かつての戦友達に捧げた物――

彼らは、彼女達は何も知らず、自分達の夢を果たせぬままこの世を去った。

(……俺も近いうちに会いに行くんだろうな……いや、それはないか)

自分は地獄へと落ちる者――

そこが、自分に相応しい場所だと思っている。

既に瓶の半分は飲んでいるが、上坂は全くと言っていいほど酔っていない。軽くて目息をつきながら、空になったコップに酒を注いでいると――

「啓一郎」

上坂が後ろを振り返る。すると、そこには加東が立っていた。

「ヒガシさん、どうしましたか？」

「ちょっと来てほしいんだけど、いいかしら？」

上坂は、何も言わない加東にただついていく。

加東はそのまま、一つのテントの前で止まった。そのテントは居住用の物とは違い、非常に大きく、主に倉庫やブリーディング室として使っているものだ。

「……ここですか？」

「ええ、どうぞ、先に入って」

にこやかな笑みを浮かべる加東を怪しく思いながらも、彼女の勧めによってテントの中に入った。と――

パ――ン

「お誕生日おめでとう！ 上坂大尉！」

テントには、マルセイユを始めとするウィッチ達や、整備兵達などがクラッカー片手に一斉に声を掛ける。見れば天井には横断幕がかかっていて、色彩豊かに「Happy Birthday Ke-iti-ro」と書かれていた。

「……これは」

「お前ら！ 今日是我らが隊長、上坂啓一郎大尉の誕生日だ！ と

「いうわけで飲みまくるぞー！」

マルセイユの音頭に、歓声が上がる。そのまま主役であるはずの上坂をほっというて、基地隊員達は勝手に料理に手を出し始めた。

「上坂さん！ お誕生日おめでとうございます！」

「イチロー！ お誕生日おめでとう！」

「梟ふくろうの使いよ、今宵はめでたいな」

稲垣やライサ、マティルダまでもがお祝いの言葉を告げる。この光景に、上坂はただ茫然と立っていた。

「おめでとう、啓一郎」

「……なんだ、これは……」

上坂は、後ろを振り返って、加東に尋ねる。

「なんだ、これはって……今日はあなたの20歳の誕生日でしょう？ 昨日気付いているいと焦ったわ」

「……………」

何も言わない上坂に、加東は話を続ける。

「啓一郎は興味ないとか言って、誕生日のことなんて言わないって思っていたから、勝手にやろって話になったの。そしたら基地の皆が参加することになったのよね」

「……よくわかったな」

ようやく上坂から出た言葉に、加東は軽く肩をすくめた。

「当たり前よ。何年の付き合いだと思っているのよ」

「……そうだな」

上坂の顔には、僅かにだが笑みがこぼれる。

久しぶりに、……本当に久しぶりに心から笑うことが出来た。

「さあさあ、盛り上がってきた所で、我が統合戦闘飛行隊「アフリカ」の部隊マークをお披露目したいと思う！」

「ウオー！」

マルセイユの言葉に、場の雰囲気が高潮になる。

「……いつの間にそんなこと決めていたんだ？」

「昨日ライーサがデザインしてくれたのよ。結構いい出来だわ」

「さあ、これが我々の部隊マークだ！」

マルセイユが奥の壁にかかっていた白い幕を下ろす。すると、あちこちからどよめきと拍手が起こった。

アフリカ軍団の盾をベースとして、扶桑の国旗でもある日月旗を中央に配置、その上にオオワシと星を置き、上部には金色の文字でアフリカと書かれていた旗が、誇らしげに壁に掛けられていた。

「へえ、なかなかいいデザインね」

「す、すごいです！ ライーサさん！」

「あ、ありがとう……」

加東と稲垣が、デザインを担当したライーサを手放して褒める。ライーサは最初は顔を赤くしながら照れていたが、稲垣が興奮して詰め寄り、そのまま逃げ出して追いかけることとなり、爆笑の渦が起きる。上坂はその様子を部屋の端っこでワイングラス片手に、微笑ましく眺めていた。

「あなたはあの中に入らないのか？」

料理を運んでいたマティルダが声を掛けてきた。

「……俺には性に合わないからな。影は影らしく見守っているよ」

「……なるほど。影は影らしく、か……」

マティルダは、奥の壁にかかるマークを見ながらつぶやく。

「鷲の使いは太陽、梟ふくろうの使いは月。どちらも我々になくなくてはならないもの。アフリカという部隊は、鷲と梟ふくろうという二つの存在があってこそ、力を発揮する」

「……その梟ふくろうが俺おれってわけか……」

「そうだ。太陽は人々に希望を与え、月は人々に安らぎを与える。」

「安らぎか……俺はそんな存在になれるのか？」

「それはわからない。だが、少なくともケイ達はどうなってほしいと願っている」

「……そうか」

上坂は中心で騒いでいる部下達を眺める。

加東、稲垣、ライーサ、そしてマルセイユ――

「……マティルダ。俺はなってやるよ。あいつらの未来のためにな」

そう言った上坂の顔には、決意の表情があった。

第九話（前書き）

このお話は同人誌「ストライクウィッチーズ 砂漠の虎」ほとんどそのまんまです。ですのでもっと詳しく知りたい人は、そちらをお読みください。

第九話

——かつて、魔女に愛の言葉をつぶやいた事がある——

——もちろん軍紀違反だ。しかし、最前線で戦う魔女に……オレに、他に何が出来たろう——

——やはり俺は、“下衆野郎”に違いない——

「すごく大きい陸戦ユニットですね」

ブリタニア陸軍第4戦車旅団C中隊隊長、セシリア・G・マイルズ少佐の部隊は、小高い丘から遠くにあるカールスラントの基地を眺めている。

彼女達の視線の先には、彼女達が履いているものよりも大きな陸戦ユニットがあった。

——いや、陸戦ユニットというほど生易しいものではない——
戦車のように重厚な足回り——

それを操るウィッチを守るために付けられた大きな後盾——
右側から突き出たカールスラント自慢の88mm砲——

「すばらしい、これぞ戦車だ！」

リベリオン陸軍ジョージ・S・パットン中將にそう言わしめたそ

のユニットの名前は？号陸戦ユニット「ティーガー」。カールスラントが総力を挙げて作り上げた、陸戦の切り札である。

陸戦ユニットは、主に二つに分けられていて、一つは一般的に使われている軽陸戦ユニット。

軽陸戦ユニットの特徴は汎用性であるということ、要するにどのような場面でもコンスタントに運用することが出来、整備も楽なので各国の主力として使われている。

そしてもう一つが重陸戦ユニット。

高いシールド防御に、高火力を備えたそれは、防御戦闘において真価を発揮する。しかし反面機動性が悪く、侵攻作戦には向いていないだけでなく、整備性も劣悪で、大陸国家ならまだしも、扶桑やブリタニアのような島国国家では研究レベルにとどまっている。

しかし凝り性のカールスラントは、最強の陸戦ユニットを作るという意気込みでこの開発をスタートさせ、その成果がようやくアフリカの地に降り立ったのだった。

「こいつがリベリオンに一個大隊あればネウロイなどイチコロだな
！」

パットンはそう言いながら、ティーガーの足を叩く。火力主義の彼にとってみれば、この戦車はまさに彼の理想を具現化したものだろう。

「光荣ですわ、パットン閣下」

その隣で、このティーガーの開発責任者が笑顔でそれに応える。

フレデリカ・ポルシェ技術少佐。まだ20歳前半ぐらいの彼女の顔には縦に大きな傷があるが、どこか愛嬌がある。

「……ところでポルシェ少佐、コイツの魔道エンジンが動く所を見たいのだが……」

「わかりました。……シャーロット、エンジン始動。……シャーロット！」

フレデリカはティーガーに搭乗している少女に声を掛けるが、返事が無いので声を荒げ、彼女を見る。

そこには汗だくになり、暑そうにしている少女の姿があった。

「……だるい……」

「な……シャーロット！ 貴女また……！」

シャーロットの様子を見て、声を荒げるフレデリカ。その時、シャーロットの頭上に日傘が差された。

傘を差したのはカールスラント陸軍ミハイル・シュミット技術大尉。このティーガーの専属整備士だ。

彼は機転を利かせて、パットンに告げる。

「申し訳ありません閣下！ 何分砂漠の熱対策の検討中で、魔道エンジンの調子中であります！」

彼の人懐っこい笑顔のためか、シャーロットの体調の悪さを推測したのか、パットンは軽く肩をすくめる。

「……そうか、それは残念だ。……まあ仕方がない、今度は動いて

いる所を見せてくれ、楽しみにしているぞ！」

そう言うとパットンはジープに乗り込み、その場を後にした。

「……シュミット大尉！ こっちへ来なさい！」

フレデリカは引き攣った笑顔でパットンを見送ると、額に青筋を浮かべながらティーガーの上にいるミハイルに向き直る。

「……ヤレヤレ、女王様がおかんむりだ」

ミハイルはそうつぶやくと、日傘をシャーロットに渡し、ティーガーから降りた。

フレデリカは全員に休憩するように言うと、ミハイルを連れて自分のテントに戻る。そのまま彼女は自分のベットに座り込み、彼を睨めつけた。

「……どういふつもりなの、ミハイル。私達の状況をわかっているでしょう？」

「状況は理解しています。しかしポルシェ技術少佐……」

「フレデリカ！」

フレデリカは彼の話さをえざる。

ミハイルはため息をつく、軍人口調から子供をあやすような口調に変えた。

「フレデリカ……わかっているさ、カールスラントは金が無い。リベリオンのパットン親父をたらしこんで開発費を巻き上げて……」

ミハイルの言う通り、国土を奪われたカールスラントは南リベリオン大陸に避難はしているが、いかせん予算不足に陥っており、このティーガー開発計画も大半はリベリオン合衆国からの資金援助でどうにかここまで漕ぎ着けた。

「……そこまではいい。だが……なぜあの子、シャーロットを？
いくら魔女適性があるとはいえ、まだ14歳だ。試作陸戦ユニットのウィッチにするのは……」

「あら、私が地上打撃魔女として飛んだのは13歳よ？ あなたと会ったのは17歳、今じゃ“アガリ”で“元魔女”エクスウィッチですけどね」

フレデリカはベッドに倒れ込む。その光景を見ながら、ミハイルは大きなため息をついた。それと同時に過去の記憶がよみがえる。
当時戦車乗りだったミハイルは、カールスラント陸軍自慢の機甲師団に所属していたがネウロイの攻勢にはほとんど無力で、全く歯が立たないでいた。

そんな彼をいつも救ってくれたのが、当時まだウィッチだったフレデリカだったのだ。

「あなたは私に叫んでくれた。“美しい”、“俺の魔女”と」

フレデリカは少し頬を赤く染めながらミハイルを見る。しかしミハイルはよくわからないというような顔をしているのを見て、軽く

舌打ちをした。

「……とにかく、シャーロットの才能は私以上！ 使えるようにしなさい。それがアンタの任務よ、ミハイル・シュミット大尉！」

そう言つと、フレデリカはさつさとミハイルを追い出した。

「……ヤレヤレ、一人で履帯交換の方がよっぽど楽だな……」

砂漠の炎天下の中、ミハイルは肩を落としながらとぼとぼと歩く。

「……しかし相変わらず大きなおっぱい」

彼がつぶやいた言葉は、フレデリカの耳にも聞こえる。

「……馬鹿」

一人ベットに横になってつぶやいた。

夜――

シャーロットは起き上がる。そして自分にコートがかかっていたことに気付いた。砂漠は日中ほとんどもないほど暑くなるが、日が落ちると一気に冷え込み、半袖では過ごせなくなるのだ。誰がかけたのかはわからなかったが、そのおかげであまり寒くは感じなかった。

彼女はコートを脱ぎ、壁にかかっていた自分の上着を着てテント

から出る。少し離れたところでミハイルが胡坐をかいて、地面に座っていた。

「こんばんはシャーロット。コーヒー飲むかい？」

彼の目の前には小さなコンロがあり、湯気が立ち上っている。

シャーロットは近づいて、ミハイルの前に座り込む。ミハイルがコーヒーを差し出すと、黙ってそれを受け取った。

「夜になると冷えるだろう？ 砂漠はいつもこんなだね」

「……」

「俺のコートをかけといたけど寒く無かったかな？」

「……」

ミハイルが話しかけるが、シャーロットは黙ったまま熱いコーヒーを啜っていた。

（会話が续かねー！）

ミハイルが心の叫びをあげている時だった。

「大…尉…は……」

シャーロットがぼそりとつぶやく。

「何の…為に…怖い思いをして戦うの？」

「えっ……」

ミハイルはかつての記憶を思い出す――

「誰に聞いても答えてくれない……」

彼女の眼は――

「みんな笑つか、怒るばかり……」

青い湖のように底が見えず――

「私は……只の……女の子なのに……」

ミハイルの目には涙をこぼすシャーロットと、かつて怪我を負った時のフレデリカとの姿が重なった。

「何で……私が戦わなくちゃいけないの？」

そうだ――

「死ぬのは……怖いよぉ……」

それは本来男の役目、軍人の役目――

ミハイルは自分の無力感に打ちのめされる。

自らが地獄に行くのはいい。だが、自分は戦うことが出来ない。

ミハイルはそっとシャーロットの頭をなでる。今の彼にはこのくらいのことしかできなかった。

「警報！ ネウロイ！」

突如警報が鳴り響く。

ミハイルは慌てて小高い丘に駆け上がる。そこから見たものは、遠くの方で赤く光る、ネウロイの大群だった。

「なんてこった……ここは味方戦線の中だぞ！」

「大尉……怖い……」

シャーロットはミハイルに縋りつく。その目には怯えがあった。

「何しているの、ミハイル！」

二人の後ろで声がする。後ろを振り返るとフレデリカが両手にMG34を持って立っていた。

「一般兵の撤退を指揮して！ シャーロットはティガーを退避！ 急いで！」

「フ、フレデリカ！ なんて恰好をしているんだ！」

ミハイルはシャーロットをティガーに登らせながら叫ぶ。

「お前はもう——ウィッチじゃないんだぞ！」

「他に誰かいて？」

フレデリカは悲しそうな笑みを浮かべる。その顔を見て、ミハイルは何も言えなくなった。

その時、彼女の後ろから地上型ネウロイが躍りかかってくる。フレデリカはMG34を乱射して、それを破壊した。

「ここは私が守る！ ミハイルはティーガーに登ってて！」

ネウロイがどんどん集まってくる中、フレデリカは両手のMG34でもって必死にせき止める。

フレデリカは鬼気迫る表情をしながら、それでも戦い続けた。

「通さない……ここは一步も通さないんだからあ！」

ミハイルはティーガーによじ登ると、予備のディーゼルエンジンを起動させ、後進させる。

「瘴氣が来る！ お願い！ ティーガーだけは持ち帰って！」

フレデリカが作り上げた人類の希望、そして、愛するミハイルのために、彼女は必死に戦う。

「な、なんで…あそこまでして……」

シャーロットはわからなかった。なぜフレデリカが恐れず、あそこまで戦えるのか。

「私と…全然違う……」

「——いいや……同じだ……！」

ガチガチと震えるシャーロットを、ミハイルは抱きしめる。

「フレデリカも、かつては怖さに怯えていた女の子だった」

シャーロットの震えが止まる。

「アイツが震えてい泣いていた時、俺は言わずにはいらなかった。全身全霊をかけた、ただ一言」

「俺の——“俺の魔女だ”……と」

シャーロットが驚き、ミハイルを見る。彼の眼には涙が浮かんでいた。

「あいつを……あそこまで戦わせているのは……俺だ……！」

ミハイルは両手で顔を覆う。かつて言った言葉——それが彼女の重しになっている。そのことを後悔していた。

「俺は……あいつにただ生きてほしいのに……あいつは戦えぬ俺の代わりに……どこまでも戦ってくれているんだ！」

遠くで戦っているフレデリカが、敵のビームを受けて吹き飛ばされる。シャーロットはその光景を見て、それでも口を噛みしめた。

「……大尉は何もわかっていない」

周りの空気が変わる——いや、変わったのはティガーか。

「大尉……あなたって人は……本当に……ひどい男」

シャーロットに応えるかのように、今まで音さえあげなかったテ

イーガーのマイバツハHL230P45水冷ストローク？型12気筒魔道エンジンが、その名の如く唸り声をあげ始める。

「でも……だからこそ——」

700馬力のエンジンの振動がミハイルを揺らす。

「みんなで生き残らなきゃ——意味がないでしょう!？」

シャーロットの叫びと共に、ティーガーは力強い咆哮をあげた。まるで意志を持つかのごとく——

「動いた……ティーガーの魔道エンジンが……!」

「大尉……フレデリカさん……助けたいですか?」

シャーロットの問いに、ミハイルは即答する。

「当たり前だ! 俺の魔女だぞ!」

「……本当、ひどい男^{ひと}」

シャーロットは涙を浮かべながらも、大人の笑みを浮かべる。まるで一気に成長したかのごとく——

「弾種、榴弾……装填!」

彼女の操作で88mm砲に榴弾が込められる。そして全周波数で通信を入れた。

「発、緊急で付近の全部隊に告ぐ！ 我レネウロイの攻撃を受けつつ有り！ 状況“全打撃魔女への支援要請”！ 我レ、カールスラント陸軍所属試作戦車、？号戦車ティーガーシャーロット軍曹！この場にとどまりフレデリカ少佐の援護にまわる！」

彼女に近づくネウロイに照準を合わせる。

「
テエー！」

ティーガーの88mm方が咆哮する。
反撃の時は来た――

第十話（前書き）

とある飛空士への夜想曲を全巻買いました。ぜひ参考に使いたいですね。……パクリではないですよ。

第十話

カールスラントの黒い森——
シュバルツバルト

そこがシャーロットの故郷だった——
さと

両親は既になく、森の中の一軒家で古の魔女の末裔であつた祖母
いにしえと二人きりで過ごしていたという——

古き魔女の血筋——それを引く最後の娘——

その祖母が身罷ると、彼女は这个世界でたった一人になった。だから彼女にとって世界の危機やネウロイの戦いなどどうでもよかったのかもしれない——

なのに——

「戦車——前進！」
パンツァー フォー

シャーロットはミハイルのため、フレデリカのために戦っていた。

「駄目よ、シャーロット！ 来ちゃダメ！」

傷だらけになりながらも、フレデリカは叫ぶ。その後ろから一体のネウロイが近づいて来ていた。

「フレデリカ！」

「任せて！」

シャーロットは88mm砲に徹甲弾を装填、近づいてくるネウロイに照準を合わせ、発砲。音の約2倍の速さで放たれたそれはネウロイの正面装甲に命中、そのまま粉碎させた。

「す…すごい……」

自ら設計したはずのフレデリカすら、その威力に驚いている。軽陸戦ユニットでは見ることでできない破壊力——重陸戦ユニットの面目躍如といったところだろう。

「フレデリカ！ 大丈夫か！」

ミハイルはティーガーから飛び降りて、フレデリカに肩を貸してティーガーに戻る。

「逃げろって言ったのに、何で戻ってきたのよ！」

「そんなの決まっている、お前が俺の……」

「大尉！」

ミハイルが言いきる前に、シャーロットが叫ぶ。見ればいつの間にか、多数のネウロイによって囲まれていた。

「くそ！ この数ではさすがのティーガーでも……」

誰もが諦めかけた時だった。

『諦めるな！』

「えっ……！」

今まで沈黙していた通信機から突如男性の声がする。

『君は一人じゃない！ シャーロット！』

「だ、誰……？」

シャーロットは少し顔を赤くしながら問う。

『君のフアン一号だ！　すでに増援を向かわせた！　これから君のサインをもらいに行くからそれまで持ちこたえてくれ！』

そついうと通信が途切れた。

「ジョージ！」

シャーロット達がいる場所から少し離れた場所——リベリオン陸軍駐屯地——

副司令官のブラッドレーは司令官であるパットンに捲し立てていた。

「これは重大な命令違反だ！　モンティ（モントゴメリー）に何て説明すればいい？　いや、それどころかアイク（ドワイト・アイゼンハワー）だって……！」

「モンティ？ あのブリタニア人のネズミ野郎などクソ喰らえだ！」

パットンは持っていた通信機を近くにいたウィッチに渡し、怒鳴り声を上げる。

「ティーガーを見殺しにせよ？ 作戦の捨て石？ ハッ、恐れ入るぜ！ 女の子が戦っているんだぞ！」

「兵隊だ、戦っているのは。そして、その命を捨てさせるのがジョージ、リベリオンアフリカ派遣軍第二軍団長たる君の仕事だ。私の知る君は、それが大好きなはずだが？」

パットンの戦闘スタイルは突撃、いわば見敵必殺と言っても過言ではない。そのため自ら最前線に立つなどして将兵からの信頼は厚いが、弱音を吐く兵士を殴るなど数々の問題行動を起こしてきた。

「……ブラッドレー。反論はせんよ。確かに僕は兵隊のケツを蹴り上げてきた」

パットンは指揮車に乗り込み、進軍合図を出すと、後続で待機していた陸戦ウィッチや戦車、その他各種先頭車両群が進撃を始めた。

「だがな、今回は違う」

パットンは顔だけブラッドレーに向き直る。

「この戦は軍人の戦いではない、人類の戦いだ。——ではその“勝利”とは何か？」

パットンは前を——いや、その先にある何かを見つめる。

「僕はな、ブラッドレー。その答えをあのティーガーの少女が知っている、そんな気がしてなんのだ……」

「ジョージ……」

ブラッドレーはいつもと違うパットンに、ただ見送ることしかできなかった。

「くっ……」

シャーロット達の戦いはまだ続いていて、既に数えきれないほどのネウロイを倒している。しかしまだ試作機のためか、シールドで敵の攻撃を防ぐたびに魔道エンジンの出力が落ちてきた。

「大丈夫か！ シャーロット！」

ミハイルはシャーロットに声を掛ける。既に彼女の息は上がっており、相当の疲労がうかがえた。

そうしている間に、何体かのネウロイが後ろに回り込む。

「しまった！ 後ろから……！」

敵の攻撃を受ける——そう覚悟した時だった。

突如後ろのネウロイが爆発、盛大な炎を上げる。そしてティーガーの横に頼もしい援軍がやってきた。

「ブリタニア陸軍第4戦車旅団C中隊隊長、マイルズ少佐！ お待たせしました！ 一番乗りですね！」

ブリタニアの陸戦隊が到着、隊長のマイルズが愛嬌ある笑顔で敬礼する。

「援軍か！ 助かった！」

ティーガーに乗っていた三人に笑顔が戻る。

「中隊、円周防御隊形！ 円陣を組んでティーガーを援護！」

「了解！」

彼女達はティーガーを守るように円陣を組むと、見事な連携でもってネウロイを破壊していく。

「た、隊長！」

副隊長が声を上げ、空を指す。その方角には無数の光——陸戦隊の天敵、飛行型ネウロイが現れた。

陸戦隊は地上において最もその能力を発揮するが、航空機よりはるかに低速で、簡単に捕捉されてしまう。

しかし彼女達に、再び心強い援軍が到着した。五人のウィッチかなる、統合戦闘飛行隊「アフリカ」である。

先頭にいたマルセイユが上空のネウロイに襲い掛かり、次々と撃墜していく。

「アフリカの星、マルセイユ中尉！」

『遅れてすまん』

マイルズ達に通信が入るや否や、彼女達の前方にいた地上型ネウロイが吹き飛ばされる。彼女達の横を、上坂が両脇にカールスコーガ40mm砲を抱えたまま低空を通過した。

と、加東に吊り上げられていたマティルダが降ろされ、上空から落ちる勢いで一体のネウロイに槍を投げつける。

ネウロイは耐えきれず、槍を中心として装甲が陥没し、そのまま動かなくなった。

「凄い…みんな凄い！」

ティーガーの周りで、国籍も人種もバラバラなウィッチ達が見事な連携でネウロイを倒していく。

すると、シャーロットの前に、ストライカーユニットを持った稲垣が降りてきた。

「フレデリカ・ポルシェ少佐ですか？　これ、マルセイユ中尉からです！」

「ユニット……？」

フレデリカはよるめきながらもそれを受け取る。その間、シャーロットは小柄な稲垣をずっと見ていた。

稲垣はそれに気づき、シャーロットに笑いかける。するとシャーロットは顔を真っ赤にした。

「私達は地上部隊の援護をさせていただきます！」

『稲垣、さっさとこいつを持ってくれ！　いくらなんでも重すぎる
』！』

上坂から通信が入り、稲垣は上坂の所まで戻ると片方の40mm
砲を受け取った。どうやら稲垣がストライカーユニットを持っている
間、上坂が代わりに武器を持っていたようだ。

「ヒガシさん、全体の指揮をお願いします！」

「わかったわ！　真美は啓一郎と地上部隊の掩護！　地上のブリタ
ニア軍へ、二時方向から敵第三波！　マルセイユ！　深追いしない
様に！」

加東は的確な指示を行う。その時、加東は背筋が寒くなる感覚に
襲われ、地平線の向こうを双眼鏡で覗き見る。

「どうした、ケイ？」

「……あれは……！」

彼女の視線の先には、船をひっくり返して、本来甲板があつた所
に無数の足を生やした物体が、こちらに向かって来ているのが見え
た。

船体の上や横には、無造作につけられた大型の砲塔がある。

「大…超大型ネウロイ！　戦艦の船体を利用している！　手強いわ
よ！」

ウィッチ達は全火力を持って大型のネウロイを攻撃するが、いくら魔法力を込めているとはいっても所詮は小口径砲。戦艦の装甲を貫けるはずがない。

やがて弾薬が欠乏し始める者が出始めた。

「中隊残弾確認！」

「弾無し！ 再配分お願いします！」

「こちらあと2発！」

「こっちもあと弾倉一つ分だ」

マイルズ隊はおろか、ティーガー、さらにはマルセイユの弾薬すら尽きかけている。

「全弾打ち切った。あとは刀で戦うしかないな」

「私はまだまだ戦えるぞ！」

上坂は刀を抜き、マティルダはそもそも投石器で戦っているため、戦うことは出来る。しかしそれでもわずか二人——弾が無くなれば銃などただの鉄の塊にしかない。

『そうか。どうせなら儂の“金玉”^{ボール}でも使つかね？ お嬢ちゃん』

突如入る通信——

『待たせたな諸君——』

「OK パットンガールズ！ ロックンロール！」

男性の叫び声と共に、リベリオン陸軍のウィッチ達、それに指揮官搭乗を表す旗をつけたトラックが躍り出る。そのままティーガーの横で止まった。

「とーちゃく騎兵隊到着つす！」

「イーハア！」

陽気な掛け声と共に、リベリオンの虎の子“パットンガールズ”が次々とネウロイを倒していく。

「砲撃支援要請——発射！ 弾着まであと3、2——、1——」

空中を切り裂く音が聞こえたと思ったら、先ほどまで大量にいたネウロイの所で凄まじい爆発が起こる。リベリオンお得意の物量作戦——これによって一気にネウロイが消し炭に替わった。

「うわーゼータクー」

あまりの弾薬の無駄使いに、マルセイユも茫然とする。カールスラントでは絶対見れない光景だ。いや、リベリオン意以外と言った方が正しいのかもしれない。

「このウィッチ共の指揮官は誰だ？」

「はっ、統合戦闘飛行隊「アフリカ」の上坂大尉です」

上坂はトラックに近づき、指揮官に敬礼をする。

「おう、儂がリベリオン第二軍団長、ジョージ・S・パットン將軍である！ 先日は不在にて失礼した！ モンティの不味い紅茶に付き合わされてなあ——」

パットンは葉巻をくわえたまま答礼をする。

「そうでしたか。それなら今度扶桑茶でもご馳走します」

「ハハハ、それはいいアイディアだ」

上坂の冗談に笑顔で答えると、今度はティーガーに乗っていたシャーロットに向き直る。

「やあシャーロットお嬢さん」

明らかに上機嫌なパットンに、皆が啞然とする。

「覚えているかい儂を！ ジョージと呼んでくれ！」

「……………」

そんなやり取りが続いている間、後続の部隊が続々と到着し、補給車両が彼女達の近くで止まった。

「弾が無いって？ 売るほどあるぞ！」

マルセイユはリベリオン兵士から弾薬を受け取ると、腰を回転させてベルトに繋がれた弾倉を取り、銃に装着した。

マルセイユの十八番——いわゆる“おしりロード”の炸裂により、

兵士達から歓声が上がる。

「賑やかだなあ、リベリオン人は？」

「……………」

加東のあっけらかんとした顔に、マルセイユは何も答えなかった。

リベリオン軍の登場により、ほとんどの敵を倒した連合軍は、大型ネウロイに火力を集中させる。しかし30？以上の砲弾に耐えられるように造られた船体は容易に貫けない。

ミハイルは覚悟を決め、フレデリカを衛生兵に預ける。

「シュミット……私は……………」

「フレデリカ、ここにいてくれ。僕に策がある」

ミハイルはフレデリカに笑いかける。その笑顔は、フレデリカを不安にさせるものだった。

「シュミット？ 何を……………」

「愛しているよ、フレデリカ」

「シュ、シュミット！」

フレデリカが止める間もなく、ミハイルはティーガーによじ登ると、そのままネウロイに突っ込ませる。

「全部隊、攻撃を一点に集中！ シャーロット、突っ込め！」

鉄の雨が降り注ぐ中、ティーガーはネウロイに近づいていく。ネウロイの装甲の一部が集中攻撃によって剥がされ、赤く光るコアがそこから見えていた。

「あれを88mm砲で打ち抜けば……」

「いや、88じゃ無理だ」

「えっ？」

ミハイルはシャーロットを引っかくと、後ろに放り投げる。それを近くにいた稲垣がキャッチした。

「ちょっと！ 危ないじゃないですか……」

「もっと危なくなる。すまん、ここからは男の仕事だ！」

そう言うと、ミハイルはティーガーの魔道エンジンをオーバーロードさせる。その爆発力によってネウロイを倒そうというのだ。

「総員退避！」

ネウロイの近くにいたウィッチ達慌てて離れる。ティーガーの周りが白く光り始めたからだ。

「大尉：シュミット大尉！」

稲垣に抱えられたまま、シャーロットは必死に手を伸ばす。しかし、ミハイルは彼女に笑いかけ、言った。

「俺が何の為に戦うのか教えてあげよう！」

「……！」

「俺は——俺の魔女の為なら命をかける。俺の愛する魔女の为なら——この命、惜しくない！」

光に包まれる中、ミハイルはただ笑う。ただフレデリカの幸せを祈って——

「シュミット——！」

ミハイルは愛する魔女の声を聞き、後ろを振り返る。マルセイユにシールドを張ってもらい、フレデリカが両手を広げてこちらに向かって来ていた。

「フ、フレデリカ！？」

そのままティーガーは爆発し、ネウロイもそれに耐えきれず四散した。

「イヤ——！」

砂漠にシャーロットの叫びが響き渡る。爆心地は白く光り、何も見えない。

「そんな……私と一緒にいてくれた人が……大切な人が……またいなくなっちゃった……」

大粒の涙を流すシャーロット。それを稲垣は黙って見ているしかなかった。

その時――

光の中心に、二つの影が見える。一つはマルセイユ。そして、もう一つはミハイルとフレデリカ――

その姿を見た途端、シャーロットの顔が明るくなる。大切な人が生きていた――それをただ喜ぶ。

「昔――カールスラントの地上攻撃魔女が、男を追っかけて地上に降りたって話を聞いたよ」

ミハイルとフレデリカのそばで、マルセイユがひとりつぶやく。

「ロマンチックな話なんで、全ウィッチが憧れていたんだよ……！？」

二人がキスをすると、マルセイユは思わず顔を赤くする。他の兵士達も、二人を祝福し、歓声と口笛を上げた。

「素敵……」

稲垣はシャーロットを地上に下ろしながらつぶやく。

「ああいう恋、私達にも出来るかな……」

「——出来るよ！」

シャーロットは一步前に出て、稲垣に振り返る。

「私達は——そのために戦うんだから！」

その様子を遠くから眺めていたパットンは葉巻をくわえ直し、
人つぶやく

「モンティにも教えてやらなきゃな。これこそが“人間の戦い”だ
ってことを！」

アフリカの地平線から、朝日が昇り始めていた。

第十話（後書き）

作「さあやってきたぜ！ 第十話だ！」

イ「……これってまんま同人よね……？」

マ「……というか上坂大尉が全くと言っていいほど出て来ていない……」

作「ああ、それはそうさ。今回はフレデリカさんとミハイルさん、それにシャーロットが主役なんだから」

イ「どうしてよ？」

作「だって主人公は確かに強いけど、一人でできることはたかが知れてるし、それで歴史を改変できるとしたらせいぜい細かい所だけだよ。大まかな歴史を変えるなんてできないからね」

マ「まあそうですけど……」

イ「なんか納得いかないような……」

作「まあそんなことよりも！ 次話はずいぶん上坂の過去を明かすぞ！ これまで前作などで仄めかしていたが、ようやく真実が明らかになる！」

イ「おお！ いいよね！」

マ「上坂大尉の過去……いったい何があったんでしょうかね？」

作「まあそれは次のお楽しみ！」

第十一話

「上坂さん、いますか？」

稲垣は上坂のテントの外から声を掛ける。

「おう、入ってきていいぞ」

中から上坂の返事が聞こえ、言われたとおりに中に入る。テントの中には簡素な机とベットしかなく、上坂は絨毯が敷かれた真ん中に座っていた。

「何やっているんですか？」

稲垣は上坂に近づきながら尋ねる。覗いてみると、上坂の前には黒い刀があった。

「ああ、コイツの手入れをしているんだよ」

「これって……“黒耀”ですね？」

黒耀——上坂の愛刀で、普通の刀とは違い、刀身が黒く、魔法を込めると履かく光る特徴がある。稲垣は何度もこれで敵を切り裂いているのを見ていた。

「ああ、さすがに手入れしておかないとな……いざというとき機嫌を損なわれるといけないし……」

「機嫌……ですか？」

まるで意志があるかのような言い方に、稲垣が疑問に思う。

「ああ、意外とそういうものなんだよ。刀っていうのは……というより、この刀は少し特別なんだ」

「どついうふうにですか？」

「鎌倉時代、ネウロイ——当時の怪異が扶桑を襲ったのを知っているよな？」

「はい、“元寇”ですね」

当時荒野だったアジア大陸から、多数の怪異が扶桑に上陸し、九州で猛威を振るった事件のことである。

その時たまたま夏場だったこともあり、台風のおかげで難を逃れたのだった。

「ああ、この刀はその後には作られたんだ……ネウロイの破片からな」

「……！」

稲垣は驚愕する。

「ネウロイって……大丈夫なんですか!？」

「さあな。少なくとも今までなんかあったとは聞いてはいないが……」

上坂は手入れが終わった刀を見る。

黒い刀身は、普通の刀よりも綺麗で、黒曜石の様に光り輝いていた。

「……扶桑海事変後に家の蔵を漁っていたら、奥の方で埃被っているのを見つけてな……それ以来こいつをずっと使っているんだ」

「扶桑海事変？ 上坂さんも参加していたんですか？」

稲垣は疑問に思う。彼女は当時の記録を出来る限り調べたのだが、そんな記録は出て来ていない。

「……いや、冗談だ。気にしないでくれ」

上坂は少しバツが悪そうな顔を見ると、それっきり黙り込んだ。

「……次に私がその臉を開いたのは、純白の絹の褥おとこの上であつた。死神の顎あぎから逃れ、身を紗しずめに包まれて。数多の勲しと栄光に満ちた戦いは、ここに幕を閉じた」

稲垣の声が夜の闇に消えていく。

周囲は静寂に包まれていたが、一瞬後、猛烈な拍手が稲垣に向かって送られる。

読み終えて閉じた本を胸にあてて、うつとりとした顔で目を閉じていた稲垣が拍手にハツとして深々と一礼した。

「なかなかいい話じゃないか」

マルセイユは拍手をしたあと、酒の追加を求めるようにグラスを上げる。

無然とした表情をした加東は渋々とウィスキーを注ぐ。どうせなら牛乳も注いでやろうかしらと思ったが、ウィスキーパンチになるだけなので諦めた。

今稲垣が朗読したのは、加東が扶桑海事変後負傷し、入院生活していた時に、自分の撮った写真と共に、今まで起きたことをつづった本「来た、飛んだ、落っこちた」だ。

なぜこんな本が辺境の地であるアフリカにあったかというところ、半月前に扶桑本国から派遣されてきた主計中尉の私物にこの本があったことがきっかけだ。

それを見つけたマルセイユが、稲垣に翻訳させ、今日やっとそのお披露目が行われたというわけだ。

ともあれ、別に加東としては自分が頭を抱えていれば、兵士達の良い娯楽のネタになると思って黙認してはいた。しかし……

「なんで、あんたらまでいるんだ！」

同じテーブルに座っているお偉い方を怒鳴りつける。ウエルナー達第七機甲師団の『高級将校達に、カールスラントアフリカ軍団のトップ、ロンメル將軍まで。』

もっともロンメルの前にあるのはトブルクのバザールで買った扶桑の湯飲みで、中身は緑茶であるが……

「まあ、細かいことは気にしないでくれたまえ」

湯飲みで緑茶をちびちび啜っているロンメルが、ニコニコ笑いながら答える。

「我々も扶桑海事変の詳細を知らないので、参考になるかと思つてさ。何せ、世界最初のストライカーを使用した戦闘だろ、重要だろ」

將軍の台詞で勢い付いたウエルナーが、へらへら笑いながら台詞を続け、それに頷く他の将校達。

加東は思わずこめかみを押さえる。

「そんなの、幾らでも資料があるでしょ」

「そうでもない。それに、実体験をした人間から話を聞くのが一番だ」

真顔になつたロンメルが口をはさむ。

「それなら直接、私から聞き取りすればいいじゃない」

「ははは、誰もあの扶桑海事変のスーパーエースだなんて教えてくれなかったからね。知っていたらサインを……お、そうそう、今からでもいいからサインしてくれ」

そう言いつつ、ロンメルは手帳から一枚の写真を取り出す。

「ぎゃ——す！」

加東の絶叫が響き渡る。

「なんでこんな写真があるのよっ！」

「ん、どれどれ……」

全員が写真を覗きこむ。そこには扶桑陸軍のウィッチが三人写っていて、右側の少女は若いころの加東だった。

「ふっふっふ、上坂大尉に頼んでわざわざ扶桑から取り寄せたのだよ」

「ちょっと、啓一郎！」

加東は將軍達に混ざって扶桑酒を飲んでいる上坂を睨みつける。しかし上坂は悪びれた様子もなく、淡々と告げた。

「ヒガシさん。一介の大尉が、まさか中将閣下の“頼みごと”を断れるとでも？」

「そう言う問題じゃないでしょう！」

「まあまあ、それよりサインを頼むよ。あとここにロンメル中将へ、と書いてくれ」

そういうとロンメルは、写真と万年筆を差し出してくる。加東は惘然とした表情でそれを受け取ると、サインをした。もつとも扶桑語で書いたので、ロンメルには読めないのだが……

「全く、……でも本当は私、スーパーエースなんかじゃないわよ」

「どついうことだ？」

マルセイユが尋ねる。他の人達も不思議そうな顔をして、加東の方を見る。

「たしか、加東大尉は23機撃墜だろう？　それ以上撃墜したウィッチなんて資料にはなかったはずだが……」

「確かに公式ではね」

加東は含みのある発言で、周囲をさらに混乱させる。加東はその反応に気を良くして、本当のスーパーエースに話しかけた。

「——そうよね。76機撃墜の上坂啓一郎大尉——」

「な……！」

加東の爆弾発言に、その場にいた全員が上坂を見る。しかし、上坂はそれを気にした様子もなく、酒をあおった。

「……それは軍機だったはずだが？」

「別にいいでしょう？　私もなんでそうだったのか知りたいし」

「ど、どういうことだ！」

マルセイユは捲し立てる。

「別に……ヒガシさんの言う通りですよ。俺も扶桑海事変に参加していました……」

上坂は右頬の傷をそつとなでる。

「……そういえば、今日は8月15日だったな」

「えっ？」

上坂は空になったコップに手酌すると、懐かしそうな顔をする。

「……少しばかり、昔話に付き合っただけですか？」

「……もちろんだ、上坂大尉」

皆を代表して、ロンメルが答える。

「ありがとうございます。それでは……」

上坂は一拍おくと、自分の過去を語り始めた……

第十二話

1937年、ウラル、名もなき前線基地――

「全く、……こちらから仕掛けておいて負けるなんて……」

扶桑皇国陸軍飛行第一戦隊隊長江藤敏子中佐はご立腹だった。と
いうのも陸海軍合同訓練をこちらから仕掛けておいて、部下達が飛
行時間僅か10時間の新米海軍ウィッチ達に敗北してしまったから
だ。

「そう言われてもなあ……というより今回は油断が大きかっただろ」

今回の訓練に参加しなかった黒江綾香少尉がつぶやく。今回の訓
練は、3対3に別れての対抗戦で、指揮官機の撃墜が勝利条件だっ
たが、指揮官だった加藤武子少尉が、新人の坂本美緒軍曹に“ツバ
メ返し”……海軍名“捻り込み”を決められ、見事撃墜判定を貰っ
てしまったのだった。

「それはそうなんだけど……あら？」

江藤はため息をつきながら机の上にあった書類を見てみると、ふ
と一枚の紙で目が留まる。

「……どうしました、江藤隊長？」

「……これは面白くなりそうね……」

その紙を最後まで読むと、江藤は不敵な笑みを浮かべた。

「……それにしても敏子、また合同訓練をやりたいたって言うのは……いや、別にウチ（海軍）は構わないのだが……」

数日後――

滑走路の脇で、扶桑皇国海軍第十二航空隊隊長北郷章香少佐は、隣にいる江藤に話しかける。

「ごめんなさいね、ウチ（陸軍）に増援が来たからその子の手ならしにと思って……」

一応謝っているが、江藤の表情は何かを企んでいる様子でニコニコしている。二人から少し離れた場所には、穴吹智子、加藤武子、加東圭子、黒江綾香少尉が興味深そうにその様子を眺めていた。

「……それで、その子って言うのがあれか……どうやら君の部下達にも教えていないようだが？」

北郷の視線の先には、滑走路上に陸軍の新型ストライカーユニット、キ27九七式戦闘脚を履き、右手にだけではなく背中にも八九式機関銃を二丁背負った人影が立っている。しかし、全身はコートで覆われ、顔にはゴーグルにマスクまでつけており、表情は全く伺えない。

「ええ、色々わけあってね。でも大丈夫よ、あの子なら実弾を使

おうが殴りかかろうが全然平気だから。なんなら後で斬りかかってもいいわよ」

「……………」

北郷が顔を引きつらせていると、コートを着たウィッチと北郷の部下達三人は、滑走路上で滑り出すと、大空へと飛んで行った。

「全く……………3対1とは舐められたもんだな……………」

扶桑皇国海軍第十二航空隊所属若本徹子一飛曹は、今回の訓練に對して愚痴をこぼす。

前回は確かに北郷のおかげもあって、陸軍に勝てたとはいえ、自分達の力はまだまだだとは思っていた。しかし、今回は正体不明の陸軍ウィッチ一人に對し、新人達三人での変則的訓練だと聞いたとき、幾らなんでも自分達を侮辱していると思った。

あまつさえ、そのことを指摘すると江藤から「三人で丁度互角」と言われ、若本の頭に血が上った。

「……………まあ要するに、私達であいつを倒せばいいか」

「徹子、あまり先行するなよ！ どう見ても怪しすぎるからな！」

「そつだよ、皆で戦わないと……………」

若本の後ろで、坂本美緒一飛曹と竹井醇子一飛曹がそれぞれ叫ぶ。

「心配するなつて！ 様は一人が追い回して、他の二人がその隙に攻撃すればいいんだろ？」

「それはそうだが……」

坂本は、江藤の含みある笑みを見て、今回の相手は何かとんでもないことを隠していると感じていた。

「よし！ それじゃああたしが突っ込むから、美緒と諄子はあいつを倒してくれ！」

若本は、そのまま下方にいるウィッチに向かって急降下を仕掛けた。

それに気付いたのか、そのウィッチは同じく急降下し、若本を引き離そうとする。

「……へえ、陸軍のストライカーも中々速いな……」

前回の対戦では陸軍は一世代前のストライカーユニット、九五式戦闘脚を使用していたが、今回使用するのには、海軍の新鋭ストライカーユニット、九六式艦上戦闘脚と同じく、宮藤理論を採用した非常にもスマートなユニットだ。話を聞いた限りではエンジンは同じものを使用しているらしいのだが、若本をどんどん引き離しているのを見る限り、どうやらキ27の方が速いようだ。

「だが、もう急降下は出来ないぞ！」

あまり高度を取っていなかったこともあり、ゴースルのウィッチは地面すれすれまで降りると、そのままジグザグ機動に移る。若本

達はその上から被さるように銃撃を加えて行つた。

「全然当たらないよう！」

「くっ、動きが読めない！」

「チクシヨー！ ちょこまか動きやがって！」

若本達が機関銃を乱射する中、陸軍ウィッチは華麗にペイント弾の雨を避けていく。しかし、逃げるのに邪魔だと思つたのか、背中に背負つていた二丁の銃を放り捨てた。

「はっ！ 重いからようやく捨てたか！」

若本はその隙に、ゴーグルのウィッチの後ろに付き、照準を合わせる。若本の照準器いっぱいにウィッチの姿が映つた。

「これで終わりだ……」

若本が叫んだ瞬間――

若本の背中がまっ黄色に染まつた。

「……なっ！」

「えっ……きゃあっ！」

若本の後ろにいた竹井は上から降り注ぐペイント弾を、間一髪躲す。しかし、陸軍ウィッチは左捻り込みであつという間に回り込み、竹井に一連射――竹井の背中が黄色く染まつた。

「なっ………いつたいなにが………」

坂本は銃撃の嵐の中、必死に躲しながら、周囲を見る。そこには先ほど相手が捨てたはずの二丁の機関銃が浮かんでいて、坂本に対して正確に銃撃を加えていた。

「くっ………わっ！」

必死に躲し続けていた坂本だったが、多勢に無勢で、同時に三方向から撃たれ、セーラー服を黄色く染め上げられた。

「……………」

「いやー、結果が分かっていたとはいえ、こつもあつさと勝っちゃうとはね………」

茫然と地上に戻ってくる四人を見る北郷の隣で、江藤はニヤニヤ笑いながらつぶやく。

しかし北郷は、四人が滑走路上で止まると一目散にゴーグルのウィッチの所に駆け出して行った。

「き、君！　いつたあいあの機動は………いや、それよりもどうやってあの銃を操っているんだい？　そういつた戦闘方法は聞いたことないぞー！」

「そつだ！あんなの反則だぞ！」

北郷と、体中まっ黄色に染めた若本は、ゴーグルのウィッチに捲し立てる。北郷の場合はその戦闘方法を学ぶため、若本は自分の見た光景が信じられないため、二人は非常に真剣な顔だ。

しかしゴーグルのウィッチは二人を見ないで、江藤の方をずっと見ている。

「もういいわよ。喋っても」

「ふう、やっとですか……」

江藤が許可を出すと、ウィッチは非常に低い声で喋りながら付けていたゴーグルとマスクを外す。

「なっ……」

北郷と穴吹が息を飲む。下から現れた顔は、明らかに少年の物だったからだ。

「始めまして、今日から配属されました、扶桑皇国陸軍上坂啓一郎少尉であります。よろしくお願いします」

「なっ……男——！」

無表情の上坂に驚いた北郷を含む、海軍ウィッチ四人の叫びが、空に響き渡った——

「……三対一で勝ったというわけか……相変わらずだな……」

マルセイユは顔を引き攣らせる。他の将校達も、同じような顔をしながら、上坂を見ていた。

「そうか？ まあ確かにあの時の悪戯は勘弁してほしかったな……まあそんなことがあったんだが、ウラル方面にもネウロイ……当時は“怪異”と呼んでいたが……が現れるようになっていったんだ」

上坂が配属されてから数日後――

ようやく機種転換できた陸軍第一飛行隊は、穴吹、加藤、加東の三人が目覚ましい活躍をし始め、遠くは欧州からも取材が来るようになった。無論上坂や黒江も三人と同じか、それ以上に活躍していたのだが、黒江はともかくとして、上坂は男性であったこともあり、影が薄かった。最も上坂は気にしていなかったが……

「ん――！」

穴吹は戦闘が終わり、大きく伸びをする。新型機を与えられた彼女達にとって、現れる小型怪異のちのラロスは的ではなかった。

「あーあ、今回も私達だけで十分な内容の任務だったわね！」

「こらこら、不遜なことを言わない」

加藤が穴吹を注意する。今回の戦闘で、穴吹は二機を撃墜し、大満足だった。

「どうよ！　今回は私の方が多く撃墜したようね」

「……………」

穴吹は自分の同期でライバルだと（勝手に）決めている上坂に勝利宣言をするが、彼はそれを無視して、地上の部隊に手を振り続けている。その顔はいつもの無表情とは違い、僅かに頬が緩んでいる。

「……ははあん。啓一郎、もしかしてお姉さんでも見つけたの？」

「べ、別にいいじゃないですか！」

隣でその様子を見ていた加東がからかい口調で言う。上坂は顔を赤くして、慌てて前方を見た。

「相変わらずね……まあ別にいいけど」

加東は苦笑するが、その光景を微笑ましく見守るだけだ。

上坂には四歳年上の姉がおり、陸軍陸戦ウィッチとして戦場に立っている。上坂は姉を守りたいがために、わざわざ担当の士官の弱みを握ってまで戦場へと志願したのだった。

そのことを知っている三人は、最初上坂の戦う理由を聞いたとき、思わず苦笑したのだった。

「それにしても、啓一郎がシスコンだったとはねえ？」

「違います！」

穴吹のからかいに食いついた上坂を見て、三人は大笑いをした。

第十三話

「……まあ、最初の頃は非常に楽な戦闘だったんだ、ちょうどヒガシさんの本に書いてあった通り。……でも、秋が近づくとネウロイも新型機を出してきてな……」

1937年の秋頃になると、ネウロイは新たな小型機を繰り出してきた。今までの複葉機みたいな外見から大きく変わり、オラーシヤのI-16のような単葉機（のちのラロス改）が少数ながら出て来て、扶桑軍得意の格闘戦闘には乗らず、一撃離脱戦法を取り始めた。

扶桑陸海軍は様々な方法で撃墜しようと試みたが、どれも対して効果はなく、依然として猛威を振るっていた。

「でも、啓一郎は固有魔法のおかげで、その新型ネウロイすら軽くあしらっていたのよ」

「……なんというか……上坂君が化け物に見えてきたな……」

「……………」

加東の付け足しに、ロンメルはつぶやく。その発言で、上坂は少しだけ傷ついた。

「あれ、啓一郎は？」

戦闘続きだった毎日の中、久しぶりの休みとなった日、穴吹は訓練生時代からの恒例、上坂との一騎打ちをしようと彼を探していたのだが、どこを探しても上坂は見つからない。

「ああ、啓一郎ならさつき町に出かけて行っただぞ」

「えー、今日こそ啓一郎を倒そうと思ったのに……」

穴吹は黒江の言葉を聞いてむくれる。

「今日ぐらいはゆっくりと休んだ方がいいわよ、智子」

「でも、あいつだけなのよ、私が唯一勝てないのは」

「まあ啓一郎も、智子と試合するよりは、お姉さんとデートした方がいいでしょう？」

加東はからかい口調で言う。もしこの場に上坂が居たら、全力で否定していただろう。

「ま、啓一郎の唯一の家族だからね……無理もないわ」

加藤は熱くて苦いコーヒーを口に含んだ。

「姉さん！」

上坂は普段絶対見せないような笑顔で、待ち合わせた場所にいる女性の前まで走る。

「あら、ようやく来たのね」

扶桑皇国陸軍上坂良子中佐は、朗らかな顔で上坂を迎える。

「ごめん。少し遅れてしまつて……」

「別にいいわよ。久しぶりに顔を合わせられたから」

来年の8月15日で20歳を迎える良子は、黒髪を腰のあたりにまで伸ばし、大人びた雰囲気漂わせている。子供のように突っかってくる穴吹とは正反対だ。

「そう言えば聞いたわよ。陸軍で最初の20機撃墜を達成したんだって？」

「あ、知ってたんだ」

「ええ、敏子から聞いたわ。啓一郎は扶桑一の航空ウィッチだつて」

良子は同い年で同階級の江藤とは訓練生時代からの親友で、よく情報交換をする仲だ。

「なんだか、啓一郎がどんどん大きく感じるわ。お父さん達が交通事故で死んでしまった時まだ6歳だったのに……」

「そう言えばそんなに経つんだね……」

二人は近くのベンチに座り、これまでのことを思い出す。

両親が他界した後、良子は啓一郎のために、自分の夢だった教師の道を諦め、代々ウィッチの家系だったため陸軍に入隊、そこで自分の指揮能力が開花しここまでやってきた。啓一郎は将来的には軍人になろうと思っていたのだが、10歳の時に魔法力が確認され、姉を守りたいという一心で、ウィッチとして陸軍に入隊した。

「姉さんは20歳を過ぎたら軍を辞めるの？」

「うーん、一応そうしようかと思っているわ。ようやく金銭的に余裕が出来たし、本来の夢であった教師を目指すのも悪くは無いわね」

「そっか。その方がいいよ」

上坂は立ち上がり、良子の前に出る。

「俺は姉さんが退役するまで絶対守るから。姉さんは自分の夢を追ってよ！」

「……わかったわ、約束ね」

良子は静かに微笑んだ。

戦闘は次第に激化していき、航空ウィッチ達も多大な消耗戦を前に、次々と戦闘不能に陥っていった。

幸い第一飛行隊では脱落者は出なかったものの、他の部隊が甚大な被害が出たため、上坂達は小隊長となって他の部隊に配属、この春から入隊した新人ウィッチ達を五月雨式に投入し、何とか戦線は持ちこたえていた。

しかし、この方法ではやがてじり貧になる——そう考えた陸軍参謀本部は、乾坤一擲の大作戦を立案した。しかし……

「どういうことなんですか！」

江藤は机を叩き、司令官に詰め寄る。

「どういうこと……とはいったい何かな？」

「とばけないでください！」

あくまでシラをきる司令官に、江藤は憤りを覚えた。

今回の作戦は、戦線を上げるためにネウロイの支配地域に侵攻、そのまま奪回するという作戦で、それ自体は江藤も了承していた。しかし、この作戦は陸軍のみで行うというもので、ただでさえウィッチが足りないのに、何をやっているんだと司令室にやってきたのだ。

「まさか、陸軍だから、海軍だからという理由だけでこの作戦を立てたのではないですね！」

「わ、僕は知らん！ 本国の三宅坂から立案書が届いたただけだ！」

「くっ……あの馬鹿参謀ども……」

江藤は、前線を視察にすら来ない参謀達にただ怒りを感じる。現在の陸軍航空戦力は弱体化しており、ともに飛ぶことすら出来ない新人ウィッチが戦場に出ている。このような状態では勝つことすら出来ないと感じていた。

「征一号作戦——扶桑陸軍のみで行われた反攻作戦。俺は二人の新人ウィッチを指揮下に置いて、姉さんのいる樺太方面攻撃隊の上空援護をする事になったんだ。当初の偵察によると、その方面のネウロイの数は少なく、比較的楽な任務だと言っていた。実際最初の頃はまともに敵が出なかったからな。だが……」

運命の8月15日——

それは唐突に起こった——

上空援護中、雲の合間からラロス改が上坂達に襲い掛かり、咄嗟のことで対処できなかった部下の二人が真っ先に撃墜された。上坂はシールドで攻撃を凌ぎ、反撃に出ようとしたが、雲間からラロス

改が40機も現れ、波状攻撃を仕掛けた。

上坂は己の能力を総動員して迎撃する。眼下には味方地上部隊がいて、自分が制空権を確保しないとネウロイは上空から好き勝手に攻撃できるからだ。

キ27より確実に速いラロス改だったが、複数で囲んでいるのが仇となり上坂に対して有効な攻撃が出来ない。反対に上坂は固有魔法“ボルトガイスト物体操作”を駆使して、数での劣勢を補っていた。

しかし、次第に弾薬が枯渇し、上坂自身のシールドも使い物にならなくなると、数を減らしたラロス改は猛攻撃を浴びせ、次第に傷付いて行った。

それでも上坂は戦い続ける。眼下の仲間の為、姉のために――
ようやく39機を撃墜した時は既に満身創痍で、武装も折れた刀一本だったが、上坂は最後の力を振り絞って敵に挑んでいく。

最後の敵は、普通のラロス改とは少し違い、胴体部分に白い帯状の識別章がついている。恐らく小隊長機なのだろう。

実際ソレは素晴らしい技量で、幾ら上坂に火器が無く身創痍の状態だったとはいえ、時には上坂の後ろに回り込むことすらあった。

やがて二機は同高戦になり、お互いが交差した瞬間、上坂はラロス改の、ラロス改は上坂の刃を受け、落ちて行った。

「相打ち……つてところか……」

「ああ……本来だったらそれだけで済んだんだ。……だが、後でわかったことなんだが、樺太にはネウロイの巢があつてな……それからしばらくして、そこから大量の爆撃機がやってきて地上部隊に襲い掛かった――」

「……うん……？」

上坂は、空は暗いのに周囲が明るくなっていることに気づき、目を覚ました。

彼はラロス改との戦闘であちこち被弾しており、体中が痛むのを堪え、その場に立ち上がる。

「なんなんだこれは……？」

地上が燃えている——いや、よく見ると別の物が燃えていた。

大破して、ただの鉄の塊と化した戦車——

破壊され、まるで助けを求めるのかのように天を向いた大砲の砲身——

焼け焦げ、判別不能となったかつて人間だったもの——

周りの惨状に、上坂は左肩を押さえながら茫然としている。と——

「み……水……」

「……！」

いつの間にか上坂の周りには全身に火傷を負ったり、体中から血を流している兵士が6、数人寄ってきた。彼らは足を引きずったり、手が無かったりするが、救いを求めて上坂に近づく。

「くっ、来るな！」

軍人とはいえ、僅か15歳の少年にとってその光景はただの恐怖しか生まず、上坂は腰に差してあった拳銃を向ける。しかしそれを認識していないのか、彼らは意にも解さなかった。

「くっ、来るな！ 化け物！」

上坂は震える手で狙いを定めるが、一向に近づくのを止めようとしない彼らを見て後ずさる。そして――

パ——ン……！

乾いた音と共に、兵士の一人が倒れる。

「えっ？」

震える手で引き金が引かれ、狙いを定めていた兵士に命中し、斃れたのだ。

「あ……ああ！」

それが引き金となったのか、上坂は狂ったように引き金を引き、後ずさる。乾いた音がすると共に兵士はどんどん倒れ、誰もいなくなり、弾が尽きても上坂は引き金を引き続けた。

「わ、わわわ……！」

しばらく後ずさっていると何かにつまずき、上坂は倒れる。腰が引けたまま上坂は慌ててそれ（・・）から距離を取った。

「わわ……えっ？」

上坂は恐る恐るそれを見る。

帽子をかぶった黒く長い髪をした少女――

軍服の上からでもわかる、起伏のある上半身――

下半身はなく、上半身だけが血だまりの中に浮かんでいる。顔はあたりが暗く、全く見えないが、上坂が見間違えることはない――

「姉……さん……？」

（本来の夢であつた教師を目指すのも悪くは無いわね）

（啓一郎は扶桑一の航空ウィッチだって）

（わかつたわ、約束ね）

上坂の脳裏に、姉との最期の会話は響き渡る。

「あ……ああ……ああああああ！」

その瞬間――上坂啓一郎は頭を抱え、そして意識を失った。

「……その後、負傷して情緒不安定になった俺は、そのまま本国の

精神病院に送られたんだ。その時参謀本部の連中は、殆ど廃人状態だった俺に全責任をかぶせようとしたんだが、それを知った江藤さんが怒り狂ってそいつらをぶん殴り、それによって明るみになった今回のずさんな作戦計画を立てた参謀の多くが更迭されたんだ」

「……………」

上坂の話に、周りがシインと静かになる。彼の語る過去が、それほどまでに壮絶だったからだ。

「俺はこのときから戦う意味を失った——いや、生きる意味を失ったんだ。約束を守れなかったために」

上坂は悲しそうな顔をする。

「俺は一度敗北した人間だ……だからこそ戦争のむなしさも、悲しさもわかる……」

「……………」

「俺は若いウィッチにそんな思いをして欲しくない。……だからこそ戦い続けている。……命ある限りな」

周囲は静まり返り、話を聞いていた稲垣は目に涙を浮かべている。

「そんなことがあったのね……」

初めて聞く上坂の過去に、加東はそうつぶやくことしかできない。加東もまたあの戦いで多くの戦友を失った。それでもショックは非常に大きい。他の人にとって見ればその衝撃は計り知れない物だろ

う。

「それで……そこからどうやって立ち直れたんだ？」

マルセイユは真剣な表情で尋ねる。

「そうだな……きっかけは欧州派遣のとき……だろう」

扶桑海事変終了後、上層部はこの事件を忘れさせるために上坂に欧州視察を命じたが、その途中にネウロイが欧州を侵攻し、上坂はそのまま戦乱に巻き込まれていった。

「欧州でも多くの戦友が空に散っていった……正直言って気が狂ってもおかしくなかった……いや、気が狂っていたのかもしれないな」

上坂は懐かしそうにあの頃の戦いを思い出す。

「だが……ダイナモ作戦後の入院生活中に言われたあるウィッチの何気ない言葉で救われたんだ。“少なくとも私はお前に感謝している。……だからあまり一人で抱え込まないでくれ、それが仲間だろう？”と……」

「仲間……か」

加東がつぶやく。

「ええ、そして自分の生きる意味も見つけることが出来たんです」

「その生きる意味っていうのは？」

「ああ——“死んでいった奴らを二度と死なせないこと”だ」

「……！」

その発言に、皆が息を飲む。

「俺が死んでしまったらあいつらの最期を知っている人がいなくなる。あいつらは全員が俺の戦友であり英雄だからな。そいつらの分まで生きること——それが俺に出来る唯一の贖罪なんだ」

「……そうね」

加東は優しく微笑みかける。

「そうだな。私達はその英雄たちの分まで戦い、ネウロイを倒す。それが我々にできる最大の供養だ」

「ああ」

上坂は小さく頷くと、マルセイユが差し出したグラスにコップをぶつける。甲高い、それでいて優しさのある音色が響いた——

第十四話

どれだけ戦争をしようとも、人間にとって大切な行事はやってくる。

当然のように、どんなに優秀な兵士でも、そう言った行事はやりしたいというものが人情だ。

そのようなこともあり、大みそかを迎えたアフリカの地でも、各国の将兵達が新年に向けた準備を慌ただしく進めていた……

「で、……いつの間にこんな物作っていたのよ……」

加東は目の前にそびえたつ物体を見て、げんなりする。彼女の周りには、それを作った扶桑陸軍整備兵達が、その出来栄にほれぼれとしていた。

「なんですか、この赤い物体は？」

ライーサの視線の先には、木で作られた大きな門——扶桑の神社でおなじみの鳥居がそこにある。上坂はそれを聞いて、答えた。

「扶桑の神殿の前にある鳥居というものでな。ここから先は神様の領域だということを表しているんだ。要するに欧州で言う神殿の入り口だな」

この世界の宗教は、自然崇拜的なものが多く、一神教もないわけ

ではないのだが、ごく少数派となっている。というのも、ウィッチの魔法力は自然から与えられたものと認識しているからだ。

「神殿ですか……という奥にある小さな家が、神様の住処なんですね」

鳥居の奥には、小さいながらも立派な祠があり、祭壇には酒や果物といったお供え物が置いてある。

「ああ、……といっても、この祠には何も祀っていないけどな」

「……わざわざこんなものまで用意しなくても……」

呆れ果てていた加東が、ようやく口を開く。

「別にいいじゃないですか。何事にも形からということもありますし、それに、自分はしばらく本国に戻っていないので、こうやって扶桑風の建物があると落ち着きますよ」

開戦当初から欧州にいた上坂は、戦争が始まってから一度も祖国の土を踏んでいない。彼自身はあまり気にしない性格だが、やはり祖国から長いこと離れていると、扶桑の物が懐かしく感じてくる。

「……ま、明日新年を迎えるわけだしね。お参りするの悪くはないか……」

出来てしまったものは仕方がないと、加東は一息つくど、自分のテントに戻っていく。

「私も大みそかなんだから、自分の部屋ぐらいは片づけけないとね」

「ええ、心機一転って言うやつですよ」

他の人達も、自分の身の回りを整理しようと、それぞれ解散していった。

「驚の使いよ、部屋を掃除したいのだが……」

マルセイユの付き人であるマティルダは、彼女のテントを掃除しようとして中に入ったのだが、そこには昼間だというのにだらしなく寝ているマルセイユの姿があった。

「おー、マティルダか……私の所は掃除しなくてもいいぞ。どうせすぐ汚れるからな」

マルセイユは、二日酔いで痛む頭を押さえながら、寝返りをうつ。部屋の中は少々汚いが、彼女は全然気にしていない。

「梟の使いから、明日の新年の為に身の回りの掃除をするように言われた。私の所は終わったから、驚の使いの所も掃除したいのだ」

「パス。私は例外っていうことで」

マルセイユはマティルダに背を向けて、手だけをヒラヒラさせる。その態度に、さすがのマティルダも怒りが込み上げてくる。

「……梟の使いから、鷲の使いが掃除の邪魔をするようなら、排除してもいいと許可を貰っている……」

「マテイルダ？」

普段と様子が違うマテイルダに、マルセイユは恐る恐る振り返る。そこには額に青筋を浮かべた狩人の姿があった。

「あー、マテイルダ？」

「鷲の使いよ、邪魔をするな！」

マルセイユは、テントから放り出された。

「全く、マテイルダめ……」

まだ痛む頭を押さえながら、マルセイユはつぶやく。

「……今回はマテイルダの方が正解だ」

その隣で、部下達とついた餅で鏡餅を作りながら、上坂はため息をついた。

「というより！　なんで私の部屋まで片づけなければならないんだ！」

「……扶桑には、新年を新たな気持ちにして迎えるという習慣があつてな。去年の厄も一緒に片づける意味でも重要なことだ」

「そんなこと言つたつてな……」

「ケイイチロー！」

マルセイユの言葉をさえぎつて、シャーロットが走り込んでくる。この前の戦闘で陸戦ユニットを壊してしまった彼女は、整備兵達と共にこの基地に滞在している。大みそかで忙しくしていた上坂を見て、おっかなびつくりながらも手伝いを申し入れ、小さく平べったいお餅を制作していた。

「こんな感じでいい？」

「ああ、ちょうどいいくらいだ」

上坂はシャーロットからお餅を受け取ると、平べったい餅の上に乗つけて、鏡餅を完成させる。その作業を見ていたマルセイユは疑問に思い、口を開いた。

「……所で、それはなんだ？」

「ああ、これは鏡餅って言つて、神様にお供えるものだ。11日になると、これを割つて、お雑煮とかに入れるんだ」

「へえー、お供え物なんだ」

「……神様のお供え物を食べるのか」

シャーロットの感嘆とマルセイユ突っ込みが入る。

「まあ腐らせたら勿体ないしな。本当ならおせち料理も作りたかったんだが……さすがに材料がそろわなかったな」

「なんか、フソーって色々とやることあるんだね」

「そう言えばイチロー、この前の年賀状ってヤツも、相当凄い奴らに出していたよな……」

マルセイユが見た中には、スオムスのラウラ・ニッシネンやエイラ・イルマタル・ユーティライネン、ブリタニアのエリザベス・F・ビューリング、ウィルマ・ビショップ、カールスラントのエディータ・ロスマンやヴァルトルト・クルピンスキー、さらには、マルセイユがライバルだと認識しているエーリカ・ハルトマン、口うるさいゲルトルト・バルクホルンと、世界各国の名だたるエースの名前があった。

「そうか？ 各地の戦線で一緒に戦った奴らに出しているだけだが……」

「……………」

マルセイユは、上坂の相変わらずな態度に、顔を引きつらせる。心の中で、上坂には怖いものが無いんじゃないかと思っていた。

「……………何考えていた」

「……………いや、なにも」

「……まあ、年に一度くらいは手紙を書いた方がいいからな。マルセイユもやってみたらどうだ？」

上坂の提案に、しかしマルセイユは首を振る。

「いや、いい。私はそういうのを送る気もないし、突然送ったらそれこそびっくりされてしまう」

「……まあ、それもそうだな」

上坂は、マルセイユが手紙を書いている姿を想像して……、思考を止めた。どう考えても、そんな姿が思い浮かばなかったからだ。

「……なんか、失礼なこと考えなかったか？」

「……いや、何も」

上坂は、澄ました顔で答えた。

太陽が地平線に隠れ、アフリカの大地が暗闇に包まれてだいぶたつ。

上坂達は、新年を迎えるための準備を進めていた。そして――

「ハッピーニューイヤー！」

午前零時と共に隊員達の歓声上がり、酒が注がれたコップが高く上げられる。1943年を迎えた基地では、深夜だというのに寝

ているものは誰もいなかった。

「おお、そうだ。稲垣、シャーロット、ちょっと来い」

隊員達に紛れて酒を飲んでいた上坂は、ふと思い出したかのように、二人に手招きをする。

「なんでしょうか……？」

「……………」

呼ばれた二人は、疑問に思いながらも上坂に近づく。上坂は懷から白く小さな袋を取り出すと、それぞれに手渡した。

「大人から子供へのお年玉だ。大切に使うように」

「え、えっと……ありがとうございます……」

「お年玉って何？」

戸惑いながらお礼を言う稲垣に、シャーロットは尋ねる。

「えっと、新年に大人の人が子供にお小遣いをあげることだよ」

「へえ、そんな風習があるんだ」

「よかったわね。シャーロット」

ビールを片手に、空いた方でシャーロットの頭を撫でるフレデリカ。

「ズルいぞイチロー！ 私だってお前に比べたら子供だぞ！」

話を聞いていたマルセイユが、酔った勢いで上坂に絡む。ライーサはその光景を見て苦笑していた。

「……俺より背の高い奴を子供というには無理があるだろう」

「なんだとー！」

上坂より2？ほど高いマルセイユは、上坂に突っかかる。

「……何やっているのよ……」

「相変わらずだな。鷲の使いは」

加東のため息と、マティルダの抑制された声が、喧騒にかき消された。

新年を迎えたアフリカ――。

この場所に、新たな風が吹き始めたことを、皆はまだ気付いていなかった。

第十四話（後書き）

今回は年明けを書いてみました。ちなみに、マルセイユの墜落事故はなかったことになっています。（出撃直前に上坂が止めたため）

第十五話

広大な砂漠のど真ん中に、一人の少女が歩いている——いや、彼女は足に鋼鉄の長靴を履き、その中に入っている履帯で走行していた。

彼女の背中には、ぎっしりと詰まった大きな背囊があり、その周りにも鏡や水筒などが吊るされていた。

「……砂漠三日目は……死ぬ……」

扶桑皇国陸軍北野古子軍曹は、背囊に吊るされていた水筒を取り、中に残っていた数滴の水を舌に落す。

「全く……、あのロマーニヤ人め……」

北野は途中で道を教えてくれたロマーニヤの航空ウィッチに恨みの言葉をつく。

「目的地までたった80km……って、それたぶん直線距離じゃない……!」

確かに航空ウィッチにとって、80kmなどあつという間に飛べる距離だが、北野のような陸戦ウィッチにとってはとんでもなく長い道のりだ。さらに陸上では直線的に進めないことの方が多いため、その距離はさらに伸びる。

北野は祖国から遠く離れたアフリカで、早くもへばっていた。

と――

「ん？」

ふと顔を上げると、前方に砂煙が立ち上がっているのが見えた。目を凝らしてみると、一台の装甲トラックに、二台のバイクがこちらに向かって来ている。

北野はやつと会えた友軍に、思わず手を振る。

「やった……！ あの……すみませー……ん！？」

そう言った瞬間、その一群の後方から巨大なサソリが現れた。全体が黒く、所々に赤い斑点がある、動物にしては無機質な物体——人類の敵、ネウロイがこちらに向かって来ていた。

「ネ……ネウロイ！？」

突然の敵との遭遇に、北野は仰天する。どうやら友軍はそのネウロイから逃げていたようだ。

そうしている間にも、装甲トラックはどんどん近づいてくる。乗っていた兵士が北野を指さしていた。どうやら援軍と勘違いしているらしい。

「あの……その……私も乗せて……」

北野はあたふたしながらも手を振る。しかし——

「あとは頼んだ！ 頼むぞ、ウィッチ！」

彼女の動作を了承と勘違いしたのか、兵士達は手を振りかえして脇を通り過ぎて行った。

「え——！」

北野は愕然とする。彼女の持っている武器は、扶桑皇国軍正式装備の三八式歩兵銃しかなく、これも欧州の陸戦武器と比較しても、あまりにも非力すぎる。もともと扶桑軍一般兵士用に開発されたこの銃は6・5mm弾を採用していて、幾ら魔法力で強化するとはいっても目の前のネウロイの装甲を貫くとは思えない。

その時、突如上空からネウロイに向けて、大量の弾丸が浴びせられる。後方を振り返ると、二人の航空ウィッチが銃撃を浴びせていた。

「その陸戦ウィッチ！ さっきの車の轍^{わだち}を辿れ！」

一人のウィッチが北野に呼びかける。どうやら彼女の境遇を知っているのかもしれない。

北野は全速力で後退し、先ほどの車を追いかける。その後ろでは、航空ウィッチがサソリ型ネウロイに銃撃し続けていた。

ネウロイは不利だと判断したのか、さつさと後退していく。二人はそうはさせまいと攻撃していたが、やはり機関銃では装甲を貫けず、逃げられてしまった。

「ちえ、残念。また逃げられた」

戦っていたウィッチのうちの一人——マルセイユは、空になった弾倉を取り外しながら舌打ちをする。

「しょうがないよハンナ。私達は地上打撃ウィッチじゃないもん。地上型ネウロイは地上攻撃ウィッチか陸戦ウィッチでなけりゃさ……」

僚機のライーサがフォローを入れる。

二人はそのまま帰路についた。

40km/hと、九七式陸戦脚の最高速度で後退し続けた北野は、先ほどの装甲トラックによく追いつく。相手側も彼女を待っていてくれたのか、砂漠の真ん中でいったん停車し、一人の男性が北野に向かって走って来ていた。

「ありがとう、助かった。私はカールスラント陸軍のロンメル中將だ。君の名は？」

ロンメルは北野に握手を求めて手を差し出す。しかし、照りつける太陽と、三日間ほとんど何も食べていなかったために起こる空腹感で、北野は参っていた。

「扶桑皇国陸軍北野古子軍曹……それより……み、水……」

そう言うつと、北野は地面に倒れ込んだ。ロンメルは慌てて北野の頬を叩くが、その痛みも感じないまま、意識が薄れて行った。

トブルクから東に80km――

北野が目指していたその場所で、マティルダは汲んできた水を、基地の一角にあるタンクに入れる。そのタンクのすぐ横には布で四角に囲まれた空間があり、そこでマルセイユはシャワーを浴びていた。

「水の出はのですか？ 鷲の使いよ」

「とってもいいわ、マティルダ」

重力を利用して、タンクの下部に付けられた口から水を浴びていたマルセイユが満足そうにして蛇口を閉める。アフリカでは降水量が少なく、真水が少ないため、シャワーを浴びることが出来るのはウィッチぐらいである。トブルクまで行けば海水を使った温泉にも入れるが、辺鄙なところにある基地に、そんな贅沢なものはない。

「勤務明けのシャワーって最高の贅沢だな。……そうだ、昼間担ぎ込まれた扶桑のウィッチは？」

濡れた体をタオルで拭きながら、マルセイユは尋ねる。

「梟の使いの所に、着任報告しているようです」

「ふーん……」

「……パーティの準備ですね？」

マティルダはマルセイユの考えていたことを的確に当てる。

「さすがマティルダ！」

マルセイユは、そんな彼女を褒め称えた。

「ほ、本日付で配属になりました北野古子軍曹であります！」

「あー挨拶は適当でいいから、とりあえず座って」

「は、はい！」

カチコチになっている北野は、言われるままに近くにあった木箱に座り込む。彼女の前には、陸軍航空歩兵の正装を着た女性が座っていた。

「始めまして、第三一統合戦闘飛行隊副隊長加東圭子よ。階級は大尉だけどあまり気にしないで」

「は、はあ……助かります……」

「それにしてもすごいわね、一人で来るなんて」

「……いえ、私なんて……習志野（陸戦魔女学校）でもミソツカスで……体よく追い出されたよーなもので……」

北野の半べそ姿を見て、加東は娑婆っ気も抜けてない子だなあと
思った。

「……ま、いいわ。しばらくは隊長の下で砂漠に慣れればい
いから」

「は、はい。……ところで、ここの隊長って……」

そう言い切らない内に、北野のすぐ後ろの入り口から人影が入っ
てくる。

「ん？　なんか呼んだか？」

「ひっ……！」

北野が振り返ると、右頬に傷がある、扶桑人にしては背の高い男
性が立っていた。

「ひい、御免なさい！」

「……………」

何もしてないはずなのに、北野は床に滑り降りて、そのまま土下
座する。その様子を見ていた加東は、思わず嘖き出した。

「アハハハ……相変わらず初対面の人には怖がられるわねー、啓
一郎」

「……はあ。取り敢えず顔を上げろ、北野軍曹」

「は、はい！」

言われるままに、北野は涙目になっている顔を向ける。啓一郎と呼ばれた男性の顔には、諦めに似た表情が浮かんでいた。

「第三一統合戦闘飛行隊隊長上坂啓一郎大尉だ。……要するにお前の上官に当たる」

「……あ、……す、すみません！」

北野は慌てて頭を下げようとするが、上坂はそれを手で制す。

「いや、いい。初対面の奴には大抵怖がられるからな。特に気にしていない」

そうは言っているが、上坂の表情は冴えない。

「はははは……。いやーそれにしても、驚いたわ」

「何がですか？」

加藤はふと先ほどの騒動を思い出す。

「さっきその子が、あの“砂漠のキツネ”ロンメル將軍に、お姫様抱っこで担ぎ込まれたのよ」

「ほう、ロンメル閣下が」

「ひいつ、ロンメル將軍！？……って誰ですか？」

「ロンメル將軍を知らないの!？」

北野の疑問に、二人は突っ込む。アフリカはおるか、世界中に知られるその名前を、よもや軍人が知らないとは思えなかったからだ。

「はぁ……すみません……」

北野は体を縮めて頭を下げた。

「……まあいい、俺はこれから用事があるから、ヒガシさんが面倒を見てください」

「用事？ 今日なんかあったっけ？」

加東は記憶の中で今日の用事を思い出すが、何も思い浮かばない。

「ああ、急遽決めたんだ。……ということで失礼する」

上坂は、そのままテントを後にした。それと入れ違えるように、マティルダが顔だけを見せてくる。

「ケイ、驚の使いがあなたと新入りを呼んでいる」

「……？ わかったわ、すぐ行く」

加東は疑問に思いながらも、了承した。

上坂はこれ以上ないというほど緊張していた。

ネウロイ百機に囲まれようが、涼しい顔をしていた彼にしては、珍しい表情である。

なぜそのような顔をするのかというと、彼のいるテントの中には、アフリカにいる各国軍のトップが集まっているからだ。カールスラント軍エルヴィン・ロンメル中将、ブリタニア軍モントゴメリー中将、さらに今はまだ来ていないが、リベリオン軍ジョージ・S・パットン中将まで来る予定である。

アフリカにおいて、扶桑軍で最も高い階級の上坂であるが、ただの大尉である上坂にとって中将という位の人は、雲の上の存在だ。しかし、上坂はこの会議を成功させようと、頭の中で何度もシュミレートしていた。

「おや？ 上坂大尉、君は確か煙草を吸うはずでは？」

椅子に座ってじっとしていた上坂を見て、巻き煙草を吸っていたロンメルが紫煙を立ち上らせながら尋ねる。

「ロンメル。さすがに一介の大尉がこんな場所で堂々と吸えるわけないだろう」

口をハンカチで押さえながら、モントゴメリーが助け舟を出す。と言っても、煙草の煙が嫌いな彼は、これ以上煙草を吸う人を増やしたくないただが……

「よお將軍ども！ 儂の分の敵は残しておいてくれるかね？」

予定していた時間より少々遅れて、パットンが口に葉巻を咥えな

がら、テントに入ってくる。

「ゴホッゴホッ……君が最後だ。時計を変えた方がいい、壊れてるぞそれ」

「おお、それはナイスアイデアだモントゴメリー。こいつはロンドンで買ったやつでね！」

モントゴメリーの皮肉に、わざとらしい笑みを浮かべる。

「カールスラント製したまえ、正確だ。君が使いこなすのかどうかは別問題だが？」

時間に厳しいロンメルも、くだらない言葉合戦に参入すると、上坂を無視して、三人がお互いを睨み合い、一触即発の雰囲気になった。

「……よろしいでしょうか、將軍閣下がた？」

上坂はため息をつきながら、確認を取る。

「ああ、私は構わない」

「フム、さつさと会議を進行すべきだな」

「おう、さつさと始めてくれ」

三人の了承を貰うと、紫煙が立ち込めるテントの中、上坂はこれからのことについて提案を始めた。

第十六話

「エアランドバトルユニット
空陸共同部隊？」

紫煙が立ち込めるテントの中、パットンが吸い終わった葉巻を灰皿に押し付け、新たな葉巻を取り出す。

「はい。ここ数回の防衛戦においての各国のウィッチの連携の遅れ、それを解消するための案です」

將軍達に囲まれた中、唯一の大尉である上坂が、額に汗を滲ませながら答える。

「ゴホッゴホッ……確かに賛成だ。これまでの危機は、現場のウィッチ同士の運用アドリフによって何とかあった」

煙草の煙によって、咳をしながら、モントゴメリーが代表して頷く。

「だが今後もそのままにしておくのは、上級指揮官の怠惰以外の何者でもない」

ロンメルが煙を吐き出しながら続けた言葉に、上坂は安堵する。これまでの防衛戦闘で、各国のウィッチ達と連携するために様々な手回しをしていたが、それからようやく解放される——そのことが、上坂の心を明るくした。

「それでは、了承していただけますね？」

「ああ、僕は構わん。ところで……」

上坂は、パットンの言葉に嫌な予感を覚える。

「その部隊は誰の指揮下に入るのかね？」

その瞬間、上坂は室内の空気が一気に変わるのを感じた。三人の將軍からあふれてくる、得体のしれない気が、上坂を包み込む。しばらく静寂が訪れたあと先陣を切ったのは、煙を吐き出しながら煙草を灰皿に押し付けたロンメルだった。

「……まあここは士氣の観点からも、北アフリカ随一の戦術家たる私に任せていただきたい」

荒い咳をしながら、モントゴメリーが反論する。

「素人は戦術を語り、玄人は戦略を語るものだ！ 全戦線の総予備隊として、私が適切に運用させてもらう！」

「バカ言うなモンティ。お前に任せたら、戦力差15対1になるまでウィッチを温存しかねないだろ。ウィッチがみんな上がっちゃう！」

葉巻をスパスパと吸いながら、パットンが茶々を入れた。

三人の額に青筋が浮かび上がり、一瞬おいて室内に罵詈雑言の嵐が巻き起こる。

上坂は、痛みだした頭を押さえながら、とにかくこの場を収めようとひとつため息をつく、姿勢を正し、殴り合いに発展した三人を諷めるように怒気を含んだ声をあげた。

「少しよろしいでしょうか！」

「うおっ！」

突然の怒声に、三人はビクツと身体を震わせると上坂の方を向く。その顔には、少しばかりの怯えがあった。

上坂は自分の顔に少しばかり感謝しながら、この事態を収束させる提案をした。

傷だらけの顔になった三人は、渋々とその提案を飲み、上坂は自分がまだ頑張らなければならぬ——と、盛大なため息をついた。

「……ねえ啓一郎。昨日あの三將軍に何かあったの？」

翌日、顔中傷だらけにした將軍達を見て、加東は上坂に尋ねる。

「……さあ？ 自分は知りません」

將軍達の名誉のために、適当にはぐらかす上坂。最も、加東もある程度は勘付いているようだが……

「そう、……それにしても、単騎ではぐれたネウロイを早く仕留めた所が指揮権を貰う……って、啓一郎にしては結構単純じゃない？」

「……まあそれしか思いつかなかったの……」

加東の問いに、上坂は盛大なため息をつく。その姿を見て、加東は何かあったなと心から同情した。

「ルコー！ 髪の毛やってー！」

ふと上坂は、近くでシャーロットが北野に抱き着く姿を見てつぶやく。

「珍しいな、シャーロットが誰かに懐くなんて」

「そうね、いったいどんな魔法を使ったの？」

加東も北野に尋ねる。北野は地面にバザールで手に入れた絨毯を敷きながら答える。

「いや、何も……。ただ昨日の宴会で、髪をいじらせてもらって」

昨日上坂が、將軍達と会議していた間に、その他のウィッチ達は北野の歓迎会を開いていた。そこで仲良くなったのだという。

「私——女の子のおしゃれに興味があって、将来そっちの方に進みたくて……」

北野はシャーロットの長い髪を櫛で丁寧に梳かしていく。シャーロットは気持ちよさそうな表情を浮かべていた。

「でも、魔女の素質があるからって軍に引っ張り込まれちゃって……はい、できた」

綺麗なポニーテールを作り上げると、シャーロットに手鏡を渡す。

その覗き込んだシャーロットは、満面の笑みを浮かべた。

「わーありがと、ルコー！」

「……お気の毒ね」

「まあ軍隊というものはそういうものさ」

上坂達がフォローを入れると、ノイエ・カールスラントから送られてきたティーガーの整備を終えたフレデリカがやってきた。

「シャーロット！ 出発するわよ」

「はい！」

シャーロットは北野にお礼を言いながら、自分の愛機に向かっていった。

「……さて、俺らもそろそろ出ますか。……北野！ お前は将軍がたの護衛を頼む！」

「は、はい！」

北野は慌てて立ち上がり、敬礼をした。

砂漠と言っても、全ての場所が砂で覆われた大地というわけでは

ない。ここアフリカの大地も、砂漠の中に所々小島のように岩山が顔を出している。その大地の中に、ブリタニア、リベリオン、カールスラントの陸戦ウィッチ達がそれぞれ隊列を組んで進撃していた。

「……規模だけなら、前代未聞の大部隊なんだけど……」

上空から、加東がカメラで撮影しながら感嘆する。

「……この程度なら、欧州や東部戦線では当たり前前の光景ですよ」

数々の激戦を潜り抜けてきた上坂が特に感情を込めることもなくつぶやく。

「そりや啓一郎は欧州戦にも参加してるけど、私は参加していないから見たことないのよ」

「……そういえばそうでしたね。すみません」

加東の口をとがらせた文句に、上坂は素直に謝った。

場所は変わり、上坂達がいる近くの岩山の頂上――

三人の將軍達が、それぞれ指揮下の部隊をよく見ようとお互いを押しのけあっている。お互いが国家を背負っていて張り切っているということはわかるのだが、傍から見ると子供のじゃれ合いにしか見えない。

その少し後ろに、彼らの護衛を任された北野とマティルダが待機していた。

「あ、あのう……マティルダさん。ご一緒で来てうれしいです」

「鷲の使いの命令だ。仕方ない」

「ひいつ……！」

北野は勇気を振り絞って、隣にいる陸戦ストライカーを履いたマティルダに声を掛けたが、マティルダは前方を見たまま、機嫌を悪そうにしていた。

（……鷲の使いの洗濯物が溜まっているのに！）

マティルダは、心の中でブツブツと文句を言っていた。

陽が頂点に差し掛かった頃――

リベリオン軍陸戦ウィッチ隊「パットンガールズ」は、最近付近に現れていたネウロイを発見し、攻撃を開始。付近に射撃音と爆発音が響いた。

「リベリオンウィッチ隊！ 助力するがいかか？」

ブリタニア軍ウィッチ隊隊長のマイルズが通信を入れる。彼女としては包囲戦を仕掛け、効率よくネウロイを倒したいだけだった。しかし……

『今のところ無用！ 獲物は私達がイタダキよ！』

「……くっ、リベリオンの女子高生め……。狐狩りでもしているつもり！？」
スクールガール フォックスハント

あくまで自分達で倒そうとするリベリオン隊に、マイルズは怒りが込み上げてくる。彼女の視線の先には、リベリオン隊が盛大に撃ちまくって砂煙をあげていた。

少し離れた岩山の頂上――

遠くから砲声が聞こえるものの、上空にはトンビが優雅に舞っていて、のんびりとした空気が流れている。

北野は、機嫌を直したマティルダの髪の毛をいじっていた。

「いい天気ですねえ」

「……砂漠もたまには、こういう日もある」

北野がマティルダの髪にリボンを編み込んでいる間、マティルダは気持ちよさそうに日向ぼっこをしている。

やがて、編み込み終わったのか、北野が手鏡を差し出してきた。

「どうですか？ リボンを編み込むと、マティルダさんの肌に映えると思うって」

マティルダは手鏡の中に映る自分の姿を見て、うつとりしている
と――

「素晴らしい！」

「なんてこったあ！」

前方にいたモントゴメリーとパットンがそれぞれ叫ぶ。彼らの視線の先には、リベリオン隊の盛大な火力によって、ブリタニア軍のいる方へと向かっているネウロイの姿があった。

「来たぞ！ 同士討ちに注意しろ！ リベリオン隊が追ってくるぞ……！」

マイルズが言い終わらない内に、彼女のすぐ後ろでこれまでとは違い、とてつもなく大きな砲声がすぐ近くで起こる。

「こ……こら！ シマを荒らすな！」

副長が張本人に抗議する。通常の陸戦ストライカーよりはるかに大型な機体――カールスラント軍ティーガーに乗った、シャーロットがそこにいた。

「ご、ごめんなさい……でも、えらい人に命令されて……」

シャーロットは涙目になりながらも、上司の命令に従うしかなかった。

「あーもう！ 何やってんのっ、あのおっさん達！」

あちこちで爆発が起こる地上を双眼鏡で眺めながら、加東は近く
の岩山にいる三人の將軍達を見やる。遠く離れているためよく聞こ
えないが、どうやら言い合いをしているようだった。

「交戦規程違反だ！
ルールオブエンゲージメント 貴様のような男にワシのウィッチなど預けら
れん！」

先ほどの砲火に対し、モントゴメリーはロンメルに抗議する。ロ
ンメルもモントゴメリーのウィッチの扱い方に対し、反論する。

「何を！ 思いやりのない貴様に渡すくらいなら、全員我輩の養女
の方が幸せだ！」

「お前ドサクサに何言って……！ パットンも何か言え！」

話の論点がずれていることにモントゴメリーは、今まで黙ってい
たパットンに助けを乞う。

「……フム、あの子は全員……」

パットンは二人に向き直る。そしてとんでもない爆弾発言をした。

「ワシの天使ちゃんにきまっているだろうがっ——！」
エンジェル

「なんだとお——！」

ロンメルはその言葉に、モントゴメリーは話の趣旨が違っていることに怒り、同じ台詞を叫ぶ。

「抜けえ貴様ら！ 決闘だ——！」

「望むところだ——！」

そのまま三將軍改め、三バカは昨日と同じく不毛な殴り合いが始まる。その様子を、上坂達は上空から軽蔑のまなざしを送っていた。

「……ケイさん」

「何？」

「撃つてもいいですか？」

「さすがにそれは駄目よ。私もそうしたいけど」

「……全く、何やってんだあの三バカは……」

マルセイユはため息をつく。そうやっている間に、いつの間にか陸戦ウィッチ隊はネウロイを撃破していた。

「あら、もう終わったようね。じゃあさっさとあのおっさん達を止め……！」

加東は視線を落とすと、驚愕して慌てて三將軍達に叫んだ。

「警報——！ 新手のネウロイ！」

「警報——！ 新手のネウロイ！」

「なに！」

「ど……どこだ！」

加東の叫びで、三將軍達は喧嘩を止め周りを見渡す。しかし敵の姿はどこにもない。

「位置は……！」

加東が言い終わらない内に、サソリのような外観をしたネウロイが、岩山の下から顔を出した。まさかそんな場所にいるとは思わなかったのか、三將軍とネウロイはお互いに固まる。

呪縛から真っ先に解放されたのはパットンだった。

「じよ、上等だっ！ このネウロイめ！」

パットンは腰に吊るしてあったリボルバーを抜くと、そのままネウロイに照準を合わせ、引き金を引く。しかし、弾丸はむなしく敵の装甲にはじかれた。

「バカー！ パットン、逃げる！」

モントゴメリーは銃声で我に返り、一目散に逃げ出す——いや、転進する。ロンメルも腰が引けながらも後ずさっていた。

しかし、ネウロイも攻撃を受けて我に返ったのか、ゆっくりとサソリで言うハサミのところにある砲口を向ける。その口が赤く光り始めたとき——

「どっせ————い！」

パットンの後方にいた北野が突撃し、三八式歩兵銃の先に付けた銃剣でネウロイを刺す。そのまま銃剣は根元から折れたが、その勢いでネウロイはのけぞる。

「マ……マティルダさん！」

北野の叫びと同時に、マティルダは持っていた槍を、力一杯振り投げ、ネウロイのちょうど真ん中に命中させた。

ピストルの弾程度では傷一つなかった装甲だが、マティルダの投擲によりあっさりと破られ、その直下にあったコアに突き刺さり、盛大な爆発を起こして破片と化した。

「……さて、將軍閣下がた」

上坂は額に青筋を浮かべ、地べたに正座している三將軍達の前に

立っている。彼の後ろには、同じく額に青筋を浮かべたウィッチ達が待機していた。

「今回の責任はいつたい誰でしょうか？」

「いや、それは……」

「ダ・レ・の・責任ですか？」

顔は笑っているが、背後にどす黒いオーラをまとった上坂に、三人はガタガタと震えて、さっきまでの仲の悪さはどこに行っただのやら、お互いに抱き合っている。

「……まあ、今回の功労者である北野軍曹に彼らの処遇を決めてもらいますか」

「わ、私ですか!？」

上坂が北野に振り返る。彼女はびっくりして、思わず自分を指さした。

「ああ、何でもいいぞ。せいぜい將軍達をこき使え」

「えーと……加東大尉？」

「かまわないわ。やっちゃんないなさい」

「は、はあ……」

副隊長にも許可をもらい、北野は少しおっかなびっくりながらも、

考えがまとまったのか一つ深呼吸をした。

「——おじさまがた」

「は、はい……」

北野は腰に手を当てて、精一杯の威厳を見せるように胸を張った。

「仲良くしてください——以上！」

「は……はい……？」

少し戸惑いながらも、將軍達は頬を赤く染めて返事をした。

こうして空陸共同部隊の設立は、ここから始まったのである——

第十七話

アフリカの砂漠に砂煙が舞う。その中心には、各国から派遣された陸戦ウィッチ達の姿があった。

「伏せ！ 500m躍進！ 進め！」

アフリカ合同陸戦隊の隊長に任命されたマイルズ少佐は、大声を張り上げ、新しい部下達を叱咤する。

「あんたたちが私達マイルズ隊と同じくらい、砂漠と友達になるまで容赦しないわよ！」

マイルズは特にリベリオン隊の訓練に力を入れていて、彼女達がヘトヘトになつていても容赦なく訓練を進める。

「マイルズ少佐の鬼！ 悪魔！」

「い……いつかギャフンと言わせちゃる……！」

リベリオンのウィッチ達は、荒い息をしながらも必死に食らいついている。

「全隊、とつげーき！」

「うおーす！」

そんな彼女達の横を、物凄い勢いで通り過ぎていく少年達^{少年達}がいた。扶桑皇国陸軍第十一陸戦中隊——新たに配属された扶桑の精鋭部

隊だ。

「うわー、すご……」

パットンガールズの面々は、その後ろ姿を茫然と見送っている。マイルズも、過酷な訓練をしている最中にもかかわらず、暑苦しい笑顔で訓練を行っている彼らにあきれ半分で眺めている。

「……まったく」

マイルズはため息を一つつくと、彼らの突撃癖を注意するため、彼らの後を追った。

そもそも、なぜ彼らがアフリカにやってきたのか。発端は数か月前まで遡る――

「はっきり言おう。戦力が足りない」

各国の指揮官達が集まる会議で、空陸共同部隊の指揮官になったモントゴメリーは早々に発言した。

「戦力が足りない……てえのはどうということだ、モンティ？」

葉巻を吹かしながらパットンが尋ねる。ロンメルや上坂も不思議そうな顔をしていた。

「言葉の通りだ。このままでは例の作戦時に戦力が足らなくなる」

「そう言われてもな……ちなみにあとのくらい欲しいんだ?」

「うむ、あと一個大隊……いや、最低でも一個中隊は欲しい。どこか本国に頼めないか? パットン。お前のところならもう少しぐらい派遣できるんじゃないか?」

「無茶言うな。^{リベリオン}ウチはもともとウィッチが少ないということぐらい知っているだろう」

パットンの言う通り、元々ヨーロッパからの移民達で構成されたリベリオンでは、ウィッチの数が他の国に比べると少ない。そのため、弾薬や戦車などの機械類は要求するよりはるかに多く送って来てくれるのだが、ウィッチだけはどうしようもないのだ。

ちなみにだが、ウィッチの割合をブリタニアを基準としてみると、カールスラントと扶桑が多めで、ガリアとオラーシャが意外と少なく、そのため東部戦線では主力のはずのオラーシャ軍が苦戦している。

「そうだったな……ロンメル」

モントゴメリーは巻き煙草を吸っているロンメルを見るが、彼の表情は渋かった。

「本国も東部戦線に主力を送っているからな……やはり無理だろう」

「そうか……ん、どうした、上坂大尉?」

諦めかけたモントゴメリーは、ふと煙草を咥えたまま目を泳がせている上坂に気付く。いつも冷静沈着の彼にしては珍しい光景だ。

「いえ、その……」

「なんだ、歯切れが悪いな？」

「は、はあ……実は……」

パットンに急かされ、上坂は諦めたのか、煙草を灰皿に押し付けるとモントゴメリーに向き直る。

「……一個中隊程度なら、扶桑の陸戦部隊を派遣することは可能です」

「なんだと！」

この場にいる三人が思わず立ち上がる。扶桑は島国であり、陸軍戦力はそんなに多くないのにもかかわらず、シベリア鉄道を使って東部戦線に部隊を派遣しているから、まさか扶桑が隠し玉を持っているとは思わなかったからだ。

「どうして早くそれを言わなかったんだ!？」

「全くだぜ！ それならもつとウィッチ達の負担も減るだろうに」

ロンメルとパットンが詰め寄るが、上坂はこれだけは言わないといけないと思い、言葉が続ける。

「……確かに部隊を派遣できます……できますが……」

「なんだ？」

「……その部隊は実戦経験がなく、さらに扶桑国内では問題児扱いされている者たちですから……そのような部隊は……」

「なんだ、そんなことか。そんなことで済むならば別に問題はない。儂らで何とかすればいいのだからな」

「は、はあ……ですが……」

「ともかく！　ただちに扶桑から援軍を呼んでくれ。わかつたな、大尉」

上坂はしばらく頬を引き攣らせていたが、諦めたようにため息をつき、軽く呼吸を整えるいつもの冷静さを取り戻した。

「わかりました。……ですが、正直自分では彼ら（・・・）の責任を持てません。それだけは言っておきます」

「構わん。儂らで何とかしよう」

このとき、三將軍達は上坂の発言を深く考えなかった。この出来事により、扶桑の最強にして最悪の問題児集団はアフリカの地を踏むことになったのだった――

「ショーヘー！　そんな直線的な動きの突撃じゃあ砂漠戦ではすぐにやられるわよ！」

マイルズは160?ぐらいの小柄な少年を呼び止める。彼が扶桑隊の隊長である。

池田翔平17歳。極道——フソーマフィアの息子だったのだが、魔法力が発動した時、親に勘当されてまで軍に入った変わり者である。

「なんですか、マイルズの姉御！」

「その呼び方はやめなさい！」

「わかりました！ では姉御と呼ばせていただきます！」

極道というものが嫌いな彼だが、精神だけは受け継がれていて、「義理と人情」が座右の銘である。

「……まあいいわ。それより！ あなた達の突撃は……」

砂漠では格好的になるとマイルズが続けようとした時——

「伏せろ！」

「え……、きゃあ！」

突然池田が叫んだかと思うと、茫然としていたマイルズを引きずり倒す。その瞬間、近くの地面で盛大な土煙と爆発音が鳴り響いた。その上空を、40mm砲を小脇に抱えた稲垣が通過する。

『だ、大丈夫ですか！？』

「心配ないぞ！ ドンドン撃ちこんでこい！」

『でも……』

フレンドリーファイア

友軍誤射を心配する稲垣をよそに、池田はさらに無茶な要求を言う。

「よし！ 今度はさらにギリギリを狙え！」

『え——！？』

「ちょっとショーヘー！ 何勝手に言っているのよ！」

ようやく起き上がったマイルズが、顔を赤くしながら池田に詰め寄る。

「はっはっはっ！ 心配すんなって！」

しかし池田はそんなことは気にせず、腰に手を当て、高らかな笑い声をあげていた。

「フム……」

少し離れた丘の上で、一人の男性がラクダにまたがり、彼女達の様子を見ていた。双眼鏡から見れば、マイルズが怒りをあらわにして池田に詰め寄っている。

「どうですか？　ウチの者たちは」

いつの間にか、その男性の後ろに上坂が立っていた。

「……そうだな」

しかし、男性は特に驚くこともなく、振り返りもしないまま彼らの状況を冷静に分析する。

「だいぶ砂漠にも慣れてきたみたいだが……まだまだ素人といったところか……」

「……だいぶ厳しい意見ですね」

上坂は少し肩をすくめる。

「だが、あの子達なら何かをやってくれそうだよ」

男性は嬉しそうな笑みを口元に浮かべ、双眼鏡から目を離れた。

「だー！　疲れたー！」

過酷な訓練が終わり、ウィッチ達が砂まみれになって戻ってきた。女性達はそのまま浴場へと向かい、今日の疲れを洗い流している。第十一陸戦中隊——通称“土魂中隊”のメンバーは、履いていた扶桑の最新鋭陸戦ストライカーユニット「一式陸戦脚」を脱ぐと、

そのまま整備に取り掛かった。

「お疲れ。どうだ、訓練の方は？」

ねぎらいの言葉をかけた上坂が、冷えた麦茶を人数分持ってきて皆に配る。池田がそれを受け取り、一気飲みして一息入れる。

「ツプハツ！……そうっすね、やっぱり砂漠戦だといつもの訓練とは勝手が違うな」

池田は口元を腕で拭くと、コップを上坂に返し、砂まみれになった自分のストライカーを見やる。

側面に達筆な文字で、部隊の愛称となっている「士魂」という言葉が書かれているが、訓練の為、少し色あせている。

「扶桑じゃ砂漠なんてないから、迷彩塗装もブリタニアやカールスラントの者を参考にしているし、こいつも他の国に比べると、総合性能で劣っている——唯一勝っているとしたら頑丈さといったところだろうかね……」

「それに、我々は実戦経験がありませんから、そこが不安要素ですね」

副隊長の岡部が口をはさむ。池田と違って理性的な風貌をしているが、依然上官を殴ったことすらあり、結構熱血漢あふれる青年である。

「……まあ確かなな。ここの所、ネウロイの侵攻もないし……。できれば作戦前には実戦経験があると嬉しいが……」

「そついや以前も聞いたが、作戦つてえのはいつたいなんだ？」

ふと思った池田が、上坂に向き直る。上坂はああとつぶやくと、近くにかけてあった北アフリカの地図に歩み寄り、ある一点を指さした。

「——現在我々がいるのはここ、トブルク。そして、ここから東のエリアは現在ネウロイに侵略されている」

指先が右側にずれ、アフリカとアジア大陸の付け根あたりを指さした。

「ここがスエズ運河——1940年にネウロイの侵攻があり、当時駐留していたブリタニア軍は、エジプト市民の避難を手伝わずしてまでスエズ防衛に当たったのだが、あえなく陥落。もしここを奪回することが出来ると、扶桑から欧州に向かう船団が半月以上も早く着くことが出来るようになり、東西の物流が大幅に改善できるんだ」

「……なんか話を聞いていると、経済的な問題に聞こえるな」

池田のつぶやきに、聞いていた他の隊員達もうなずく。その言葉を聞いて、上坂は振り返った。

「その通り。元々戦争というものとは経済と密接に結びついているものだったんだ。ただ人類同士の戦いからネウロイとの戦いになり、それはなくなりかけたはずだったんだが、現代の戦争は文字通り鋼鉄の物量で勝敗が分かれるようになったんだ」

「……………」

上坂の説明に、彼らは次第に真剣な表情になっていく。

「そのため今回の作戦は、ただアフリカの解放というだけでなく、欧州奪還という目標に一步近づくために重要な作戦でもあるんだ。今回の作戦が成功すれば、扶桑からの援助物資を迅速に欧州に運ぶことが出来る。そうすれば欧州奪還も夢ではなくなるというわけだ」

「……なるほど。それは面白れえ」

池田がニヤリと笑みを浮かべる。

「要するに、俺達士魂中隊は欧州奪回のための重要な作戦に駆り出されるってえ言うわけですね？」

「そう言うことだ」

「……よし！ 聞いたか、お前ら！ 俺達士魂中隊はこれまで本土で教導隊をやっていたのと違って最前線で戦えるんだ！ こんなうれしいことはねえだろ！」

「オ————スッ！」

池田の掛け声に、他の隊員達も嬉しそうな顔で答える。

「……というわけですよ、上坂さん。こんな素晴らしい戦場に呼んでくださって本当に感謝します」

池田は上坂に向き直ると、姿勢を正して頭を下げる。いつもはべらんべえ口調だが、こういった礼儀正しい一面もあるのが彼の魅力だろう。

「……お前達の働きに期待する」

上坂は彼らの覚悟を受け取ると、静かにうなずいた。

第十七話（後書き）

ようやく新キャラを出せました……。

ちなみにですがこれから出すオリキャラも男性の予定です。正直女の子たちのキャラハハ、ウフフ、は少なめですのでご了承ください。

第十八話

「なんだと！？ 北野がバザールに行った！？」

珍しく上坂の驚愕の声が響き渡る。近くで聞いていた加東は痛む耳を押さえながら、上坂に抗議した。

「ちょっと！ 近くで大声出さないでよ！」

「す、すみません……って！ そういうことではなくて！」

とりあえず頭を下げた上坂は、慌てて加東に尋ね返す。

「北野がバザールに行ったって本当ですか！？」

「え、ええ……。以前バザールでお買い物したことがあるから平気だって言ってる……」

「なんてこった……」

上坂は頭を抱えながら、しゃがみ込む。何がまずかったのか、加東はおずおずと尋ねる。

「えっと……、そんなに心配しなくてもよくない？ ほら、ウィッチは世界中で人気者だし……」

「ええ、以前までならそうでした」

両手で頭をかきむしった後、ため息をつきながら上坂は立ち上が

る。そして顔だけを加東に向けた。

「以前……ってどういうこと？」

「1940年にネウロイの侵攻があった時、在エジプトブリタニア軍はエジプト市民の避難よりもスエズ運河防衛を取ったことはご存知ですよね？」

「ええ、そのくらいは知っているわ」

「……それ以来エジプト市民は他国の軍そのものを嫌悪するようになり、各国軍の主力であるウィッチにもその矛先が向かったんです……さすがに暴行事件までにはいいませんが、それでも嫌悪感を覚える人たちもいるということで、基本的に市民との接触は禁じられているんですよ」

上坂の説明で、ようやく事態が重いことに気付いた加東の顔が青くなる。

「ちょ、それじゃあ……！」

「とにかくヒガシさんはここで待機を。俺はエジプト軍の高官に電話をするのでよろしくお願いします」

「わ、わかったわ！」

加東の返事を待たずに、上坂はテントを飛び出した。

『——ほう、まさか君からかけてくるとはね……』

『突然の電話を失礼します。実は現在ウチの部下がエジプト軍の管轄であるバザールに向かっているのですが……』

『おや、たしかバザールに来るのは禁止していたはずだが……』

『申し訳ありません。まだこちらに来て日が浅い奴でして……』

『——わかった。部下達には穩便に追いつくように伝えておこつ』

『感謝します——閣下』

「……フム」

男性は受話器を置くと、ポツリとつぶやく。

「やはり、まだまだだな……あの子達は」

地平線に陽が落ち始めたころ——

「……………遅い」

上坂はバザールのある方向を向きながら、腕組みをして部下の帰

りを待っている。

「……そろそろ上に報告をした方がいいかしら」

隣では加東が心配そうに同じ方向を向いている。

「こうなったら、エジプト軍にカチコミした方がよくないですか、隊長！」

血の氣が多い池田が、物騒なことを言い出す。

「……人間同士で争ってどうする……んっ？」

池田の発言にあきれ返った上坂は、ふと地平線上に人影が見えた。遠く離れているためよく見えないが、一般市民ならわざわざこちらに来ることはない。間違いなく北野だろう。

「ようやく帰ってきたか……」

「ヤレヤレ。寿命が縮んだわ……」

「全く、世話搔かせやがって……」

全員が安堵のため息をつく。これで司令部に対して報告をしなくても良いと、誰しもが思ったからだ。だが――

「はっ……？」

大きくなった人影を見て、全員の目が点になる。

「おい。ただいまー！」

心配されていたとは知らず、北野は背中に荷物をいっぱい乗つけたロバの手綱を引きながら、空いた方の手で呑気に手を振っていた。

「……全く、北野の能天気さと言ったら……」

上坂はジョッキに注がれたビールを飲み干すと、ため息をつきながら北野がお土産としてもらってきた干し果物を口に入れる。

夜になり、年長者組達は、マテイルダがバーテンダーを務める基地内のバーで、一つのテーブルを囲んでいる。こうした集まりの場では、日ごろの部下への対処の仕方や愚痴、意見の交換などをしている。上坂が話しているのはもちろん今日の北野の行動についてだ。

「まあいいじゃないの。結局何もなかったんだし」

加東も空になったジョッキにビールを注ぎながら苦笑する。確かに心配はしたものの、何もなかったことなので、あまり問題にはしたくはないのだろう。

「そつはいつでもですね……あ、どうも」

マテイルダからビールが並々と注がれたジョッキを受け取ると、上坂は目の前に座っているマイルズに話を振る。

「マイルズ。こういう場合はどういった対処が必要だ……マイルズ

「？」

「ん、どうしたのよ？」

同じようにビールを飲んでいたフレデリカも、ふと手を止め、目がトロンとしているマイルズを心配そうに見つめる。

傍らに置いてあるビールが全然減っておらず、マイルズはテーブルに頬杖をついて、時折ため息をついている。

「マイルズー。どうしたのー」

「わっ！ な、何？」

加東が目の前で手を振ると、ようやく気付いて慌てて背筋を伸ばす。

「何って……今の話を聞いてなかったのか？」

上坂は懐疑的になる。他の二人は何か分かったのか、ニヤニヤと笑みを浮かべていた。

「ご、ごめん。ちょっと考え事をしていて……」

「ふーん。その考え事ってもしかして翔平のこと？」

「ち、ちがう！」

本人は必死に否定しているが、頬がピンク色になっている。

「ま、確かにショーヘーは結構男らしい所があるものね。……シュ

ミットほどではないけど」

「わー、ノロケですねー」

加東が茶々を入れるが、フレデリカは大人の余裕を感じさせる笑みを浮かべるだけだ。恋愛ことには全く興味の無い上坂は、黙ってビールを飲んでいる。こういう時は黙っているのが一番だというのが人生で学んでいる。

「まあね。……それより、マイルズはショーヘーのどんなところが気に入ったの？」

「だから！ 私は別にショーヘーのことなんて気にしていません！ あいつの問題行動について考えていただけだよ！」

頬を赤く染めたマイルズは両手で机を叩くが、二人は冷やかすのを止めない。

「あら聞きました奥さん？ マイルズのお嬢さんたら扶桑の男性に恋をしたそうよ」

「ええ、知っていますわ。シャーロットから、ショーヘーがマイルズさんを押し倒している所を見たと言いましたから」

加東とフレデリカは、近所の井戸端会議の様に、口元に手を当てて囁き合っている。その姿を見て、マイルズはさらに顔を真っ赤にして抗議する。

「ショーヘーに押し倒されてなんかいない！ 啓一郎さんもなんか言ってください！」

「……諦める。“人の噂も七十五日”だ」

マイルズは助け舟を求めるが、上坂は巻き込まれたくないために、扶桑の古い言葉を残して席から立ち上がる。三十六計逃げるに失かず。要するにこれ以上かかわると碌なことが無いと判断したようだ。

「う、裏切もの——！」

上坂はその声を背中に受けながら、テントから出ると煙草を口に加えてつぶやいた。

「ヤレヤレ……」

第十九話（前書き）

最近書く時間がない……

第十九話

「じゃあ、行つてきます。それと、こんなにたくさんのお土産を持たせてくれてありがとうございます」

早朝――

まだ地平線から陽が昇っていない中、北野は背中の雑嚢には目一杯膨らませている。昨日のお礼として、上坂達が持たせたお土産を入れていくからだ。

「ああ、現地住民との交流を深めておいた方がいいからな。……現地で物資を調達できると助かる」

上坂は苦笑する。現地住民への宣撫活動と言うと下心丸出しだと思つたので、あえて言葉を選んだからだ。

と――

基地内に設置されたスピーカーから突如警報が鳴り響く。付近でネウロイが発見されたようだ。

「っ……！ 警報！ スクランブル 緊急発進せよ！」

警報によつて、今まで眠っていた者たちも慌てて飛び起き、基地内は一気に騒然となる。

「くそ！ こんな時間に……。まわせー！」

マルセイユは上着を羽織りながら、愛機に駆け寄ると、発進準備を整える。他の隊員達もそれぞれ戦闘準備を整えていた。その最中

スピーカーから、モントゴメリーの声が聞こえた。

「こちらモントゴメリー。出撃中止」

「なっ……!!」

抑制された声に、皆が耳を疑う。モントゴメリーは続けた。

「奴らはこちらではなく、アルアシブ市場に向かっている。町の防衛はエジプト軍の管轄だ。君たちの任務ではない」

昨日北野が行った市場は、現地のエジプト軍が独自に防衛しており、各国軍の援護を必要としないと最初から公言していた。モントゴメリーとしても、大きな作戦の前に大事な戦力を失いたくなく、たため、出撃を中止させたのだ。しかし――

「何言ってるのよ!?!」

「……………ツク!」

ウィッチ達にとってそのような協定より、軍人として民間人を守るこの方がはるかに大事だ。彼女達は盛んに抗議し、あるものはスピーカーを睨みつける。

「上坂さん! 出撃許可をお願いします!」

池田は唯一モントゴメリーに意見できる上坂に詰め寄る。彼もまたネウロイの侵攻を黙ってみることはできない——しかし、上坂は握り拳をしたまま黙って下を向いている。

「啓一郎！」

加東も上坂に詰め寄るが、微動だにしない。上坂も本当は助けに行きたい。だが、上官の命令は絶対だ——軍隊というものをよく知る彼が葛藤していた、その時——

「あれ、ルコは！？」

シャーロットのつぶやきで、皆が周りを見渡す。北野の姿がどこにもなかった。

「……まさか！？」

「町の皆が！」

北野は一人、市場へと向かっている。彼女は昨日出会った人達を守りたい——その木本だけがあった。

しかし、陸戦ストライカーでは最高で40km/h位しか出せず、このままでは間に合わない。

「——魔女は君一人か！？」

突然北野の後ろに、バイクが滑り込んでくる。ロープをまとった男性がバイクにまたがっていた。

「あの……どちら様？」

「話は後だ！ 近道だ！ 着いて来い！」

茫然とする北野を尻目に、男性は目の前にあった崖を一気に下りていく。北野も慌てて後を追った。

アルアシブ市場――

カイロ市民の避難場所となっていたこの町は、現在ネウロイの猛攻を受け、黒煙を吹いている。瓦礫が散乱する道の中人々は逃げまどい、ネウロイはそれを追いついて立っていた。

と、一台の陸戦ネウロイの前面装甲に砲弾が命中し、バランスを崩して建物を巻き込むように倒れ込んだ。

「ここは我々が守る！ エジプト軍人の意地を見せる！」

ナセル大尉が対戦車砲に取り付いている部下達に声を張り上げる。彼は全体を見回し、次の目標を探すがいかせん大通りとはいえ、車が三台程度通れる位しか幅が無く、結果的に射線も限定される。

対してネウロイは、鉄塔のような長い脚で、高い位置から人間達を見下ろしている。そして一機のネウロイがナセル大尉達を見つけた。

「くっ……！ 撃てっ！」

ナセルの号令で、対戦車砲から37mm砲弾が放たれる。しかし、ネウロイの正面装甲に命中するも虚しくはじかれる。ネウロイはその攻撃をあざ笑うかのようにゆっくりと砲口を向け、発砲した。

「うわっ！」

先ほどの砲撃で照準がずれたのか直撃はしなかったものの、すぐ近くにビームが着弾し、破片で数人の部下が負傷し、大砲も損傷してしまった。

「くっ……！ 後退しろ！ ここは私が何とかする！」

「しかし……！」

「いいから行け！」

部下達が負傷した仲間を抱えて後退する。だが、ネウロイはそんな彼らに方向を向ける。

「くそっ……！ こっちだ、ネウロイ！」

ナセルは拳銃を取り出して発砲しようとした時――

突如ネウロイに何かが命中し、そのままバランスを崩して倒れた。

「……なっ」

ナセルは後ろを振り返る。そこには昨日追いついたウィッチがいた。

「このー！ チャーチルのスパム缶をくらえー！ もったいないけど……」

北野はリュックに入っていたスパム缶を投げつける。咄嗟に出撃したため町に付いたとき武器が無いことに気付き、仕方なしにリュックの中にあつた一番質量の大きい物を使っているが、当たり前のようにネウロイを撃破することが出来ない。

しかしネウロイは北野を脅威と判断したのか、彼女に砲口を向ける。

「くっつ……」

ネウロイの攻撃を、北野はシールドで防ぐ。しかし、彼女の陸戦ストライカーの防御力はあまり高くない、そう長くは持たない。

「何しているんだ小娘！ さっさと逃げろ！」

ナセルは北野に避難を促す。元々アルアシブ市場の防衛はエジプト軍の管轄であり、東洋のウィッチには関係のない場所だ。しかし

「おじさんこそ早く逃げてください！」

北野は何かを覚悟した顔になると、腰につけていた唯一の武器である銃剣を抜く。

「バカ者！ そんなことできるか！」

「私は……！ 私は私に出来ることをします！ あなたはあなたが出来ることを！」

「……ッ！」

ナセルは少女の覚悟をしかと受け止めながら——それでもその場を動かない。

「小娘！ 私はおじさんではない！ 私はエジプト陸軍ナセル大尉！ エジプトの民は私が守る！」

ナセルは持っていた拳銃を構えてネウロイに発砲する。

「なっ、何やっているんですか！？ 早く逃げてください！」

「お前こそ早く逃げろ！ 小娘！」

そうしている間にもネウロイの攻撃は続き、北野のシールドが限界に近づいていく。

「も……もうだめ……！」

北野が覚悟して目をつぶった時——

突如目の前のネウロイが爆発する。その爆風は凄まじく、北野達にも暴風が吹きつけた。

「な、なに……？」

「騎兵隊ただ今参上よ！」

北野が混乱していると、後ろから聞き知った声が聞こえてくる。北野が振り向くと、そこにはリベリオンの陸戦ウィッチ隊がいた。

「みんな……！」

「お待たせ、ルコ！」

彼女達の後ろから、巨大な陸戦ストライカーが現れた。シャーロットのティーガーもようやく戦場に到着したのだ。

「全隊突撃！ ネウロイどもを一匹も逃がすな！」

「ウォー！」

池田率いる士魂中隊がネウロイに三八式小銃で突撃して行き、比較的小柄な物にはそのまま銃剣で突き、大型の物には足に取り付き、そのままよじ登り始める。ネウロイは慌てて振りほどこうともがき、動きが鈍くなる。

「こちらアラドーエ！^{アイン}動きを止めた目標を攻撃！ 攻撃！」

「了解！ 翔平！ 巻き込まれないようにね！ マミ！ よろしく！」

「はい！」

地上からの援護要請を受け取った加東は、隣にいた稲垣に命ずる。稲垣は抱えていた40mm砲を構えると急降下を開始し、照準器い

つぱいにネウロイに近づき、引き金を引いた。

放たれた40m徹甲弾は、直前まで池田達に取り付いていたネウロイの装甲の薄い上部を貫き、内部で爆発を起こす。そのままネウロイは瓦礫の町に崩れ落ちた。

「やった……！」

低空まで降りていた稲垣の真後ろで爆発が起こる。見れば飛行型ネウロイが煙を吹きながら落ちて行っていた。

「稲垣。後方の警戒を怠るな」

「す、すみません！」

どうやら上坂が撃ち落としたようだ。稲垣は気を引き締めてあたりを見渡す。上空ではマルセイユ達がネウロイ達と格闘戦を繰り広げており、空にいくつもの火花が咲いている。ドックファイト

ネウロイは形勢不利と判断したのか、撤退を開始した。それを追撃しようとするマイルズ隊。

「全隊！ ネウロイを逃がすな……！」

『マイルズ君。深追いは無用。あとは任せたまえ』

「だ……誰ですか!？」

突如入った通信に、マイルズは思わず尋ね返す。しかし、それつきり通信がなくなってきた。

「同時刻、近くの岩場――」

ローブをまとった男性が、指揮棒を持った片手を振り上げる。彼の後ろには、何十門もの大砲がいざ火を噴かんとネウロイにその砲口を向けている。

「ネウロイよ……エジプトの民からのプレゼントだ！」

男性が片手を振り下ろすと、後方の大砲群が一斉に咆哮する。そして、撤退していたネウロイを包み込むように着弾、中央あたりから誘爆が起こった。

「ネウロイ殲滅しました！ やりましたね、ロレンス大佐！」

着弾観測班が、指揮官に報告をする。

「ああ、さすがはウィッチ達だ」

かつてアラビアのロレンスと呼ばれた男は、静かに微笑み、双眼鏡をのぞきこむ。その視線の先には市民たちに歓迎されているウィッチ達の姿があった。

「……君が命令違反とは珍しいな……」

ウィッチ達が帰還し、モントゴメリーは上坂を呼び出す。彼は今回の行動についての弁解を聞いたかった。しかし――

「……今回は命令違反などしておりません」

上坂は手を後ろに組んだまま、冷静に答える。

「ほう……。私が出撃中止といったのに、それを無視して出撃しておいて命令違反が無いと？」

「はい。今回は出撃をしておりません。なぜなら我々は“お買い物”に行っただけですから」

「……は？」

モントゴメリーは耳を疑う。上坂がそんな冗談を言うとは思えなかったからだ。

「ですから。今回は市場へお買い物に行っただけです。ネウロイの命を」

「……くくく、はっはっはっ！」

上坂のあくまで冷静に答える姿に、一緒に聞いていたパットンが笑い出す。

「……何が可笑しい」

「ハハハ……！ お前の負けだモンティ！ 今回はお嬢ちゃん達は

出撃していないぜ！」

パットンは葉巻を咥えなおす。

「……“市場へお買い物へ行く（ショッピングインバザール）”だと……。全く……！」

モントゴメリーはため息をつく、天井を仰ぐ。

「あの時もそうだった！ スエズ防衛を命じたのに魔女達はカイロ市民の救済にまわってしまった！」

1940年のスエズ運河防衛の時も、同じようなことがあった彼にとって、ウィッチ達の思考回路が分からなかった。

「……それは」

上坂は彼女達の気持ちを代弁する。それは、彼女達が戦う理由――

「彼女達は軍人である前にウィッチであり、人間だからだと思いません」

「………まったくけしからん連中だな」

ため息をつくモントゴメリーの顔には、笑みが浮かんでいた。

「ええ、けしからん連中で……頼りになる戦友です」

上坂も、つられるように僅かに微笑んだ。

第二十話

「帰ってきたぞ！　すぐに整備を開始する！」

整備兵達は帰ってきた上坂達を見るや否や、急いで武器弾薬を持つてきて、滑走路わきに待機する。彼らの顔には不安そうな表情が浮かんでいた。

上坂達が滑走路に降りると、そのまま駆け出し、弾切れになった銃を受け取る。

「お疲れ様です！」

「おう。30分後にまた出撃する。整備を急いでくれ」

「わかりました！」

上坂達はその場でストライカーユニットを脱ぐと、臨時に設けられた待機所に向かって歩き出す。しかし彼らの足取りは重く、皆疲労の表情を顔に浮かべている。

「……あ」

「おっと……。大丈夫か」

「は、はい……」

倒れそうになった稲垣を、上坂が慌てて支える。稲垣は再び自力で歩き出すが、いつものような元気がない。

「……次は出撃させない方がいいみたいね」

「ええ、稲垣は待機させます。これ以上飛ばせるわけにはいけません。……マルセイユ。お前はどうか？」

上坂は後ろにいたマルセイユを見やる。アフリカの星と呼ばれる彼女も、連日の出撃で目の下に隈を作っていた。

「……私は大丈夫だ。イチローより先にくたばりはしない」

「私も何とか大丈夫です。次も出撃できます」

明らかに疲れているマルセイユとライーサだが、少なくともまだ戦えるという台詞を聞いて上坂は安堵する。稲垣が戦闘不能になっ
てしまった今、これ以上の戦力低下は避けたかったからだ。

「……でも、そろそろ限界が近づいているようね。私達も」

「……………」

加東がポツリと言った言葉に、この場にいる全員が最悪の事態を想定してしまい、空気が一気に重くなる。加東も自らの失言で押し黙ってしまった。と――

「航空歩兵隊！　ただちに出撃せよ！」

スピーカーからモントゴメリーの怒声が響き渡る。どうやら前線から援護要請が届いたのだろう。

「……ヤレヤレ、まだ10分も経っていないぞ……」

「仕方がないわよ。前線の子達なんて休みがあるかどうかさえ分からないんだし、私達はまだ恵まれているわ」

加東はマルセイユを宥める。

「さっさと出撃する！ マルセイユ！ 地上攻撃は俺がやるから、制空は頼んだ！」

上坂は自らを奮い立たせるように大声を出し、整備が終わった自らのストライカーに向かって走り出した。

スフィンクス作戦――

ネウロイにスエズ運河を制圧されている人類が、これを奪還せんと立案された大規模作戦である。主にブリタニア、カールスラント、リベリオンを中心とし、砂漠の狐ことエルヴィン・ロンメル中將が司令官を務める今回の作戦は、序盤こそ特に問題もなく作戦が行われていたが、人類軍はネウロイの巧みな誘導により、主力部隊の大半が大釜盆地に追い込まれてしまい、絶望的な消耗戦へと突入していった。

「全中隊！ ここを死守するぞ！」

マイルズ少佐は爆炎と砂塵が吹き荒れる中、声を張り上げる。そうでもないと思わしき身体が言うことを聞かないからだ。

マイルズの後ろには、ボロボロになったウィッチ達が集団を組んでいて、作戦開始時に比べ負傷や魔法力不足によって数を減らしている。しかし、彼女達はまだ良い方だった。

「この野郎！ こいつでも喰らえ！」

「衛生兵！ こいつを運んでくれ！」

「誰か！ 弾を持ってこい！」

彼女の周りから兵士達の怒声と悲鳴が聞こえてくる。こうしている間にも、ネウロイの攻勢によって多くの命が奪われている。マイルズは歯を食いしばりながら、それでも心は冷静にしてネウロイと対峙していた。と、その時――

「隊長！ 危ない！」

「えっ？」

マイルズの横に、いつの間にかネウロイが回り込んでいて、彼女に砲口を向けていた。もはや避けることもかなわない必殺の位置――

「っ――！」

マイルズは死を覚悟した。その時――

「ぶっや――！」

黒い影が突然横から躍りかかり、ネウロイに体当たりする。ネウロイは自身よりもはるかに小柄な体格をしている影に吹き飛ばされ、宙を舞う。そして影は地面にひっくり返ったネウロイの下腹に小銃の先についていた銃剣を突き刺されて霧散した。

「ふう……。大丈夫かー、姉御ー！」

相変わらずの不敵な笑みを浮かべた池田が何事もなかったかのようにはマイルズに話しかける。彼の服はボロボロだったが、どこからも血を流しておらず、まだまだ体力が有り余っているという感じだ。

「しょ、シヨーヘー？」

突然の出来事に、マイルズは混乱している。しかし、そうしている間にもネウロイの攻勢は続いている。

「隊長！ 新たに50機近いネウロイが接近してきています！」

池田の部下が地平線を指しながら叫ぶ。見れば地平線上で大規模な砂塵が噴き上げていて、その下には黒い無数の影があつた。

「おー、こりやまた団体さんか！ お前ら！ 全員着剣！ 丁寧に
お出迎えするぞ！」

「おーす！」

池田の号令一下、扶桑陸戦隊の面々はある者は腰の刀を抜き、あるものは銃剣を小銃に取り付ける。扶桑お得意の突撃体制を取るつもりだ。

「ちょっと！ 突撃なんて無謀よ！」

我に返ったマイルズが、慌てて彼らを止めようとする。

「心配ないっすよ！ 姉御達はしばらく休んでいてください！」

そういうと、池田は部下達に向き直る。

「よし！ お前ら！ とつげーき！」

「ウオ———！」

隊員達は声を張り上げ、突撃ラッパの音色と共にネウロイに向かって突撃して行く。

ネウロイは近づけまいと砲火を浴びせるが、巧みな回避行動により誰一人として当たらず、周囲に砂煙をあげるだけだ。そして池田達はネウロイの懷に潜り込むと、刀や銃剣などを駆使して白兵戦を繰り広げる。その様子を見て傷ついていた兵士達は歓声を上げ、今まで座り込んでいた者達も銃を持って立ち上がった。

「もう！ 私達も援護するわよ！ 全隊突撃！」

マイルズも彼らの男らしい戦いぶりに顔を赤らめながらも、乱戦を繰り広げている戦場に突撃して行った。

「そんな作戦承認できるか！」

夜。作戦会議中パットンは拳で机を叩く。その衝撃で机の上にあったコップが倒れ、水が机の上にこぼれた。

「……わかってくれパットン。私だってこんなことはしたくない。だが……それでもしないと我々の反撃の糸口はなくなってしまっただ」

モントゴメリーは静かに、しかしながら悔しそうに唇を噛みしめる。

「だから……士官とウィッチ達以外を見殺しにせよというのか！
モンテイ！」

「私だって全員を助けたい！」

パットンが言い終わらない内に、モントゴメリーは珍しく声を張り上げる。

「しかし現状はどうだ！？ 航空歩兵は疲労困憊！ 陸戦ウィッチも僅かに二人！ こんな状態でどうやって彼らを助けると言うのだ！ 士官達やウィッチだけを救出することすら難しいというのに！」

「……っ」

モントゴメリーの怒声に、パットンは思わずたじろぐ。確かに彼の言う通り予備戦力はあまりにも心ともなく、主力部隊の掩護さえできるかどうか怪しい。その上頼みの綱である航空ウィッチ隊も飛行不能者も出ており、そうでなくとも連日の出撃によって心も体も

疲れ切っている。出撃不能になるのも時間の問題だろう。

「……だが！　ここで兵士を見殺しにしたら間違いなく士気はどん底まで落ちるぞ！」

「じゃあどうしたら良いというんだ！」

「……少しよろしいでしょうか？」

それまでずっと黙っていた上坂が手を上げる。

「……なんだね？　上坂君」

上坂は目をつぶり、意を決したように眼を開き、口を開く。

「……まだ戦闘可能なうちにネウロイの包囲網の一角を破り、脱出させるという作戦はどうでしょう？　これならばこちらが少ない兵力でも援護可能だと思います」

「確かにそれは考えた。だがそれでは一力所に攻撃を集中している間に後方から攻撃を受ける危険性がある。とてもではないがその提案は受け入れられん」

モントゴメリーはかぶりを振った。彼もこの作戦を考えたようだが、そこがネックとなって採用できなかったようだ。

しかし、上坂はその解決方法を考えていた。だが、それは普通ならば到底受け入れられないものであり、上坂自身も外道の策だと認識している。だが、こうでもしなければ瀕死の将兵達を助けられないと思っていた。

「はい、なのでⅧの部隊を編制し、後方の安全を確保させます」

「……!?!」

上坂の提案にパットンとモントゴメリーは息を飲む。

「まて！ そんな作戦は受け入れられん！」

「そうだ！ 大体喜んでⅧになるバカがいるわけないだろう！」

「……います」

「なっ……!!」

驚きで目を見開く二人をながめながら、上坂は死んでも地獄行きだ――と、自嘲の笑みを浮かべ、顔を落とした。

第二十一話

「そんな作戦認めません！」

ネウロイに包囲されたスエズ奪還部隊の作戦会議にて、マイルズは上坂を睨みつける。上坂はその視線を受けながらも、全体を見渡す。他の将校達や各国のウィッチ隊隊長も困惑気味の表情で彼を見つめていた。

「囷部隊を募るですって！？ そんなことしなくてもネウロイの包囲網を突破できる……！」

「少なくとも、現状では難しいと思うぞ」

「っ……！」

上坂の断言に、マイルズは言葉を詰まらせる。そうであっても戦場で戦っている彼女もギリギリのところを持ちこたえているに過ぎないことは承知している。だが上坂の提案した作戦は、あまりにも無謀で理不尽な物だった。

「……それで、どの部隊を囷にするのかというのは決めているのかね？」

それまでずっと黙っていたロンメルが重い口を開く。

「それはこちらで決めておりません。あくまで志願を募りたいと思います」

そう言うと、上坂は周囲を見渡す。他の出席者は彼と目を合わせない様に目をそらした。ただ一人を除いて――

「……上坂さんは俺が承知することを予測していたみたいですね」

扶桑第十一陸戦中隊隊長池田翔平大尉は腕組みをしながら不敵な笑みを浮かべて上坂を睨みつける。

「……そうだ。お前なら絶対志願すると確信していた」

上坂はあっさりと心内を明かす。

「今回の作戦ははっきり言って外道だ。思う存分俺を恨んでくれて構わん」

「……全く。あなたは卑怯だ」

池田は鼻を鳴らす。

「俺達の行動を予測して作戦を立て、それが部隊の命運を握っているとまで断言して……ヤレヤレ、理不尽な上官だ」

「……………」

池田の愚痴を、上坂はすべて受け止める。この作戦を立案した彼はそれが当たり前だと言わんばかりに。

「待ってください!」

マイルズが席から立ちあがる。

「せめて彼らに上空援護を！　そうすれば少しは負担軽減に……！」

「マイルズ」

池田が話を遮る。その顔は非常に穏やかだ。

「上坂さん達航空ウィッチ隊は既に疲労困憊の状態だ。とてもではないが紈のために戦力を割くことなんて出来ない」

「……………」

マイルズも上坂ですら目に下に隈がある顔を見て、相当な疲労が蓄積されているのは理解していたから言葉を続けることが出来ない。

「……………本当にいいのかね？」

ロンメルは確認するように尋ねる。池田は居住まいを正すと、胸を張った。

「扶桑皇国陸軍第十一陸戦中隊はスエズ攻略部隊の撤退援護の為、喜んで紈になる覚悟があります。——なぁに、ここが男の見せどころってもんですよ！」

池田はいつもと変わらない不敵な笑みを浮かべた。

「すまん、みんな」

会議が終了し、慌ただしく撤退準備を進める部隊の中で、唯一この場に残ることになった池田達の前で、上坂が頭を下げる。

「今回の作戦を立案したのは俺だ。蹴るなり殴るなり、煮るなり焼くなり好きにしてくれ」

「何言ってますか、上坂さん」

皆が苦笑する中、代表して池田が答える。

「俺達は今まで本土でくすぶっていたんですよ。それを最前線に呼んでくれたのは上坂さんじゃないですか。むしろ俺達はあなたに感謝していますよ」

他の隊員達も満足そうにうなづく。

「……………」

上坂は心が苦しくなるのを感じた。罵詈雑言の嵐を受けてもおかしくない状況なのに、笑っている彼らを見て、罪悪感がこみあげてくる。だが、上坂はそれ以上何も言うのをやめ、頭を上げてただ一言を伝えた。

「……必ず生きて帰ってくれ」

彼の心偽りのない言葉——池田達は見事にそろえて背筋を伸ばし、こめかみに手を当て、それに応えた。

「……無茶よ」

ずっと黙っていたマイルズがポツリとつぶやく。彼女はうつむき、両拳を握りしめていた。

「……なんで、……笑顔でいれるのよ。……死ぬかもしれないって
いうのに」

声が震え、零れ落ちる雫が乾いた砂漠を湿らしていく。

「どうして！ どうして笑っていられるのよ！」

顔を上げたマイルズの目には、涙があふれていた。

「何言ってるんだ、ブリタニアにもあるだろう——“レディーファースト”って言葉が」

池田はおどけた表情でマイルズに笑顔を見せる。そして彼は振り返り、隊員達にむきなおり、大声を張り上げた。

「よしお前ら！ 俺達士魂中隊は超重要任務を託された！ お嬢さん達の盾になるという素晴らしい任務だ！」

隊員達からどつと笑いが起こる。

「いいか！ 俺達は国家のためではなく人類の一員として戦う！ 扶桑男児の意地を見せつけろ！」

「うおーすー！」

少年たちは拳を突き上げ、これまで前線に出ることが叶わなかった分のうっぷんを晴らすかの如く、感情を爆発させる。

マイルズはその様子をずっと眺めていたが、意を決して池田に近づいた。

「ショーヘー」

「ん？　なんだマイルズ――」

池田が答える前に、マイルズは唇で池田の口をふさいだ。

突然の出来事にこの場にいる誰もが啞然とする。

10秒ぐらいした後、マイルズが池田から離れた、彼女の顔が真っ赤になっている。

「いい！　絶対生きて帰ってきなさい！　私のファーストキスを奪ったんだから責任とってよね！」

そういうとマイルズは背中を向けて自分の部隊に戻っていった。あとに残された池田隊と上坂。ややあと上坂が口を開いた。

「……マイルズがあそこまで積極的になるとはな」

「……これは大変なことになりましたね、隊長」

副長の岡部が苦笑しながら池田に話しかける。

「……こりゃあとんでもない物を貰っちゃったな。これで死ねなくなっただけ」

池田は大きく笑う。

「……さて、そんなじゃあいつちよやってやりますか」

池田は反対を向いて、ネウロイが来るであろう方向を睨みつけた。

大釜盆地からの撤退作戦――

それはまさに人類の総力戦となっていた。

「マミ！ 右側のネウロイを掃討して！」

「わかりました！」

加東の指示によって復活した稲垣が、苦戦している地上部隊を掩护するために40mm砲を構え直して低空に降りていく。地上では残存していた？号戦車やクロムウェル巡航戦車がウィッチ達と連携して地上型ネウロイ達と激戦を繰り広げていた。

「マルセイユ！ 3時方向から敵機約20！ 啓一郎は10時方向の敵機をお願い！」

「わかった！」

「了解！」

上空でも地上部隊を攻撃しようとするネウロイを近づけまいと必死の迎撃戦を繰り広げている。

普段ならば一蹴できる規模だが、連日の出撃による疲労で動きに
キレがない。

「ここが踏ん張りどころよ！ 池田達の為にも絶対に成功させるわ
よ！」

加東はMG34を乱射させながら、己に言い聞かすように叫んだ。

「マイルズさん！ お久しぶりです！」

地上ではスエズ奪還作戦に参加しなかった北野とシャーロットが
マイルズ達と合流した。そのまま負傷者を乗せたトラックを守るよ
うに左右に展開する。

「負傷者を優先的に撤退させるわよ！ ウィッチの意地を見せなさ
い！」

「了解！」

マイルズの号令一下、左右から挟撃してくるネウロイに砲弾を送
り込み続ける。それを支援するように後ろに控えている戦車隊も砲
撃をしていた。

愚直に攻めてくるネウロイが砲撃によって擱座し、霧散する。し
かし無尽蔵に現れるネウロイは引くことをしない。

マイルズ達は手当たり次第目につくネウロイに攻撃していたが、
やがて砲弾が尽きてしまった。

「くっ……！ 補給のために一時後退する！ マミ！ 援護お願い！」

「わかりました！」

勢いある返事と共に、近づいて来ていたネウロイが爆発する。その上空を稲垣が通過していった。

「ここが踏ん張りどころだ！ ウイツチ達が戻ってくるまで戦線を維持するぞ！」

「了解！」

ウィツチという盾を失い、ネウロイの攻撃が集中し始めた戦車隊だったが、たとえ仲間の戦車が破壊されようと一歩も引かない。彼らもまた池田達の覚悟を見て、男の意地をネウロイに見せつける。

「ネウロイ一機撃破！ 次！」

彼らは国籍を超え、お互いをカバーしながら鏖の様に突き進み、ついにネウロイの包囲網を突破したのだった。

アフリカの砂漠が夕日に染まった頃――
マイルズは東の方向をずっと見つめて池田達の帰りを待っていた。

「……マイルズ」

上坂が沈痛な面持ちで近づく。しかし彼女は振り返るうともしない。

「池田大尉との通信は既に途絶している。……残念ながら……」

上坂はうつむき、拳を握りしめる。

「あの馬鹿……。結局約束を守らなかった」

「……………」

マイルズの目から涙が流れ落ちる。だが上坂は何も言う言葉が見つからない。彼はただそこに突っ立っていることしかできなかった。

「私……。どうしても自分の気持ちを伝えなかったんだろう……ほとんど一目ぼれだったのに……」

うつむき、嗚咽の合間にマイルズは独り言をつぶやく。

「ショーヘーはガサツで……能天気で……でも……とっても男らしかった……」

「……ああ、そういう男だった」

上坂はマイルズの言葉にうなづく。

マイルズはそのまま砂の上に膝をつく。彼女の鳴き声で、上坂は改めて戦友を牛々♀なってしまったんだと実感した――。

「んっ？」

ふと上坂は、地平線上に何か動くものが見え、目を細める。視線の先には複数の黒い影がうごめいていた。

まさかネウロイ――

上坂は一瞬体が固まる。だが、次第に近づいてくる黒い影達の輪郭がはつきりしてくるとその表情は驚愕に変わった。

「……池田！？」

「えっ……！？」

上坂の言葉で、マイルズは立ち上がり、地平線上を凝視する。

「おーい！ ただ今帰ったぞー！」

池田隊の面々が誰一人欠けることなく、呑気そうに手を振っていた。

「ショーヘー……！」

全員の服装はボロボロで、あるものは頭や腕に包帯を巻いているものもいるが、元気にこちらに向かって来ている。

「池田……！」

見れば他の兵士達も彼らの帰還に歓声を上げ、彼らに向かって走り出していく者もいた。

「……生きていたか！」

「全く……しぶとい奴らだぜ」

「そうは言っているがパットン、お前泣いているぞ」

三国の將軍達も、その光景を万感の思いで見つめていた。

1943年のスフィンクス作戦は失敗に終わった――

だが、人類の絆はさらに深まったと、後にモントゴメリーはそう語ったという。

第二十一話（後書き）

上坂って隊長なのに、命令しているのは加東さんだ……ま、年上だからいつか。

第二十二話

スフィンクス作戦の失敗から2週間がたち、アフリカに再びの秋が訪れ始めた。

ここしばらくの所ネウロイの来襲もなく、連合軍はこれ幸いといばかりに部隊再編を進めた。さらに各国からの増援により、少なくとも防衛戦において問題ないレベルには回復した。そんなある日――

「上坂啓一郎大尉、ただ今参りました」

モントゴメリーに呼ばれて、上坂は指揮所が置かれているテントに入る。

「ああ、来たか。取り敢えずそこに座ってくれ」

モントゴメリーは椅子に座るように促し、上坂はそれにしたがって椅子に腰かける。

「今紅茶を入れよう。少し待っていてくれ」

モントゴメリーは珍しく自分でポットを持ってカップに温かい紅茶を注いでいく。不思議に思った上坂はふと彼の顔色がさえないのに気付き、何かとんでもない命令を拝命するのではないかと身構えた。

こういった時に限って理不尽な命令を受けることが多々あったた

め、その予知能力はもはや魔法と言っても過言ではないぐらい正確になってしまっている。

「どうぞ。あまり上手に入れてないとは思いが……」

上坂の前に温かい湯気を立ち上らせているカップを置いたモントゴメリーを見て、幾多の戦場を生き抜いてきた上坂に備わってしまったあまり欲しくない能力が警鐘を鳴らす。とつとこの場から逃げ出したかったが、上官の前でそういうわけにもいかず、軽く頭を下げてカップを持ち上げる。

カップからは紅茶の良い香りが上坂の鼻孔をくすぐっていたが、彼の脳神経までそれが伝わっていなかった。

モントゴメリーは自分の席に座ると自分の入れた紅茶を飲み始める。上坂もそれに続いて紅茶を口に含んだ。

指揮所に静寂が訪れる。二人はお互いに向かいあったままカップに注がれていた紅茶をただ静かに飲んでいる。お互いが話のきっかけをつかもつと静かに待っている。

「……それで、なぜ自分は呼ばれたのでしょうか？」

我慢できなくなった上坂は、空になったカップを置くと。意を決したように話を切り出す。

「……そうだな。いつまでもこうしているわけにはいかな」

モントゴメリーも飲みかけのカップを置くと、咳払いを一つして上坂に向き直った。

「上坂啓一郎大尉——第501戦闘航空団に参加せよ」

唐突の命令に、部屋が一瞬で静まり返った。上坂は今の言葉を頭の中で咀嚼し、一分ほどで理解する。そして彼の顔から表情が消え、冷徹な目でモントゴメリーを睨みつけた。

「……どういうことでしょうか？」

静かな、しかし内在する感情を押さえずに発せられる言葉と、ただでさえ恐ろしいと言われる目つきを目の前の將軍に突き刺す。

「……ウオホン！」

少しばかり狼狽えたモントゴメリーだったが、わざとらしく咳をすると説明し始める。

「今回の作戦の失敗によつて、我々はしばらく攻勢に出れなくなつた。つまり現在の我々にできることはあくまでトブルク防衛であり、防衛ならばあまり戦力は必要としないのだ。それに加えてブリタニアでは最近ガリア方面からの攻撃が多くなり、ウィッチが一人でも多く欲しい状況なのだよ」

「それは知っております」

上坂もしばらく攻勢に出れないことや、ブリタニアへの攻撃が多くなっていることは小耳にはさんでいたからよくわかる。

「ですがアフリカにいる航空ウィッチは非常に少ないです。むしろ増強してもらいたいぐらいです。それに501と言えば各国からエース達が集まった部隊……正直言つて士気を保つことすら難しいと思います。そんなところに行くのは……」

上坂の発言に、モントゴメリーはため息をつきながら答える。

「その気持ちはよくわかる。……本当ならばブリタニアから航空ウイッチの増援が来てくれるはずだったんだが……ブリタニア方面のネウロイの増加で白紙になってしまったどころかこっちにまで援軍を寄越せとまで言ってきたのだよ」

「……確かにブリタニア防衛は重要ですが……」

なぜ自分が行かなければいけないのかと尋ねる前に、モントゴメリーが答えた。

「……ダウディングが是非君に来て欲しいと言ったそうだ」

「ダウディング閣下が？」

上坂はいぶしかげな顔になる。ブリタニア空軍大将のダウディングには一度だけ会ったことが会ったが、そんな無茶を言うような人には思えなかったからだ。

「ああ、あいつはわざわざ君を指名したんだ……自らの職を辞めてまでもな」

「そこまでして……どうしてでしょうか？」

「さあな、それは知らん。」

モントゴメリーはヤレヤレと首を振ると、おもむろに立ち上がった。

「……まあ私も本国の意向には逆らえんからな。それに各国のエースが集まる部隊に呼ばれたってことは大変名誉なことだ。……出発は三日後、飛行艇に搭乗するように」

モントゴメリーは自分で飲んだカップを片づけ始めた。

「異動!？」

夜、マティルダがバーテンダーを務める酒場で、ウィッチ達が驚愕の声を上げる。

「ああ、三日後にブリタニアに行くことになった」

「ちょ、ちょっと待ってよ! それじゃあアフリカの指揮は誰がとるのよ!」

ビールを飲み干した上坂のため息交じりの言葉に、加東が捲し立てる。

「ヒガシさんがそのまま指揮すればいいでしょう。それに今までもヒガシさんが指揮を執っていましたから問題はありません」

「それはそうかもしれないけど……!」

「なんで上坂さんが行かなくちゃいけないんですか! アフリカのウィッチはただでさえ少ないのに……!」

「そうだ！ 何も行くこたあはねえだろう！」

稲垣の言葉に池田も続く。そんな二人をマイルズが宥めた。

「まあ上からの命令には従わないと。私達は軍人なんだから」

「……………」

マイルズの発言で誰もそれ以上言わなかったが、皆の顔は明らかに不満そうだ。上坂は軽いため息をつく。

「……次の所は各国のエースが集まる部隊だから名誉なことだと思えば。……まあ辞令は粛々と受け取るさ」

「…………ヤダ」

上坂が話を終わらせようとした時、唐突に場の読めない発言が飛び出した。

「……マルセイユ」

「ヤダッ！ 私はまだイチローに勝っていない！」

顔を真っ赤にしたマルセイユが、半分ほどに減ったビールの入ったグラス片手にそうわめく。どうやら酔っているようだ。

「そうは言っても……。俺の９８戦９８勝だろ。それでまだ勝つだなんて……………」

「だったら勝負しろ！ 今度こそ私が勝ってやる！」

「……………」

全世界のファンが見たら間違いなく百年の恋も冷めるだろうという醜態をさらすマルセイユを見て、上坂はため息をつく。その様子を見て加東が慌ててフォローを入れた。

「まあまあ……。だったら明日また勝負すればいいじゃない」

「ホントか！？ よし！ なら明日勝負だ！」

途端に目を輝かせるマルセイユ。上坂は顔を引き攣らせながらも、了承するしかなかった。

翌日――

滑走路上にウィッチ達や整備員、さらにはモントゴメリーやパットン、ロンメルといった高級士官までもが出て、上空を見上げている。

その上空6000mでは、上坂とマルセイユがお互いに空中で静止して向き合っていた。

「――今回の勝負はお互いに固有魔法使用禁止。純粹な空戦能力を駆使して戦う。異論は？」

「あるわけないだろう。今度こそお前をペイントだらけにしてやる！」

マルセイユは真剣な表情で上坂を睨みつける。今回の勝負でしばらく停戦できなくなるのだ。真剣になるのもうなずける。

『二人とも準備はいい？』

二人の無線に加東の声が入る。地上から開始の合図を出してもらったためだ。

「ああ、構いません」

「いつでもOKだ！」

『了解。それじゃあ……開始！』

加東の号令で、二人はお互いに交差する。そしてお互いの後ろを取ろうと横回転の旋回戦となった。

「始まったわね……」

加東は地上からその様子を見上げる。

「あの……。旋回戦はマルセイユさんには不利なんじゃ」

稲垣が不安そうに加東に尋ねる。マルセイユの使用するB f 109-Gは一撃離脱戦闘を主眼と置いたストライカーユニットであり、幾ら上坂のキ61が格闘戦闘に弱いとはいってもそれは他の扶桑軍機と比べたらの話であり、B f 109に比べたらはるかに格闘戦に

強い。事実そう言っている間に上坂がマルセイユの内側に回り込み始めている。あともう何回か旋回したら確実に後ろを取るだろう。

「そうね。でもマルセイユはむしろタイミングを計っているみたいよ」

そう言うや否や、マルセイユは一気に急降下に入る。2000m級のダイブだ。

上坂もそれに追従する。以前使っていたキ43ならば確実に追いかけれなかっただろうが、キ61はマルセイユの機動に付いていく。

「上坂さんが後ろを取った！」

「ここまでではいつも通りね」

マルセイユは小刻みに左右に横滑りをする。相手の射線をかかわすための機動だが、後ろの上坂はまだ発砲しない。

「もっとひきつけて撃つつもりね……」

「照準器からはみ出るくらい……ですね」

加東と稲垣は、二人の機動にほればれとしながら、自身の考えをつぶやいていた。

「くっ……！　さすがイチローだな！」

マルセイユは上坂に後ろを取られているにもかかわらず、口元に笑みを浮かべている。まるで自分の勝利を確信しているのかのようだ。

（確かにイチローは強い。でも私は“アフリカの星”だ！　負けるわけにはいかない！）

心の中で、ある一つの技を思い描く――

――左捻り込み――

通常ストライカーユニットは、左右のユニットで呪符の回転方向が違い、それによってトルクを打ち消している。捻り込みという技はループ（宙返り）の頂点でそのトルクを意図的に消し、急激な制動をかけて半ロール（横回転）して相手の後ろに付く大技だ。

失敗すると失速してしまうため、実戦ではもちろんのこと、訓練でも成功させたものは少ない。

マルセイユはこっそりと左捻り込みの特訓をして、今度こそ上坂の勝つという意気込みだった。

次第に上坂が距離を詰めてくる。どうやらスピードを上げたようだ。

Bf109の方がキ61よりも最高速度は速いが、今の状態からでは恐らく間に合わない。マルセイユは覚悟を決め、上昇に転じた。上坂もその動きに付いていく。

――よし！　かかった！

マルセイユは左側のストライカーの出力を意図的に下げ、左に横

滑りする。そして絶妙な重心移動で背面飛行のまま空中を滑りつつ回転した。

——いける！

マルセイユの脳裏には上坂の背中が見えた。このままいけば現実のものとなるだろう。そのままペイント弾の入った銃を前方に向けた。だが——

「なっ——！？」

視線の先に上坂の姿が無い。マルセイユは咄嗟に後方を振り返る。

——なんだと！？

そこにはどんな操作でも手遅れになるほどの超至近距離に、銃口を向けた上坂がいた。

「……世話になったな」

「……………」

二日後——

トブルクの港に、上坂の姿があった。その先にはブリタニア軍の大型飛行艇サンダーランドが海に浮かんでいる。

上坂のそばには加東や稲垣といったウィッチ達。その中には頬を膨らませたマルセイユの姿もあった。

「まっ、こっちのことは任せて。アフリカの防衛はしっかりやるから」

「お願いします」

上坂は加藤に頭を下げる。苦笑する加東の肩には少佐を表す記章が光っていた。

「稲垣」

「はっ、はい！」

稲垣が慌てて返事をする。上坂は手提げ袋から数冊のノートを取り出し、稲垣に渡した。

「それに色々な料理法が載っている。炊事は任せた」

「はっ、はい！ 頑張ります！」

稲垣はノートを胸に抱きかかえ、頭を下げた。

「上坂さん、ブリタニアでも頑張ってください！」

「おう、池田もマイルズと仲良くな……。節度は守るように」

「ちよっ……！ 何言っているのよっ！」

上坂の珍しいからかいに、マイルズの顔が真っ赤になる。それを池田がまあまあと諷めた。なかなかお似合いのカップルだ、と上坂は思った。

「マルセイユ」

「……なんだ」

相変わらず不機嫌なマルセイユ。上坂は構わず続けた。

「あの左捻り込みはすごかった。——アフリカを頼んだぞ」

「……当たり前だ。私は“アフリカの星”だぞ。——それよりも！」

マルセイユは語気を強める。

「絶対に負けるんじゃないぞ！ お前を倒すのは私なんだからな！」

「そうか。……まあ頑張れ」

上坂は軽く肩をすくめた。

「なんだと……！」

「はいはい。そろそろ出発でしょ？」

加東の言葉で、上坂は腕時計を見る。出発の時間が近づいていた。

「ああ。そつだな」

そついつと飛行艇に向かって歩き始める。

「あつ！ そうだ、これ！」

「……？」

上坂は振り返り、加東が投げた物を受け取る。彼の右手には葉巻が握られていた。

「パットン閣下が啓一郎に渡して置いてって。——幸運のお守りだそうよ」

「幸運のお守り……ですか。有難くもらっておきます」

上坂は、朗らかな顔で葉巻を握りしめる。パットンが愛用していたキューバ産の葉巻を懷にしまうと、振り返ることなく飛行艇に向かって再び歩き出た。

次の戦場へ——

第二十二話（後書き）

おまけ5

イ、マ「祝アフリカ篇完結！」

イ「いやー、長かったねー」

マ「うん。作者も最後の方はオリジナルだったしね」

作「おい、……まあ事実だけどさ」

イ「というわけで！今回はスペシャルなゲストをお呼びしています！」

マ「なんと！アフリカの主要三人に来てもらいましたーパチパチ」
イ「パチパチ……って、こっつて天国でしょ？それって不味くない？」

作「心配するな！ウィッチ達は今回のことは夢だと思っているから問題ない！」

イ「そ、ならいつか」

マ「というわけでどうぞ！」

マルセイユ「……どこここは」

稲垣「真っ白な世界……まさか天国？」

加東「まさか……って、誰？」

イレーナ「まあそんなのは気にしないで……ズバリ、あなたにとって上坂さんとはなんですか！」

マルセイユ「いきなりだな……。まあ私にとってイチローは越えなければならぬ壁だな」

稲垣「私は……。なんかお父さんっていうか……お母さんっていうか……あつ、近所のおじさんみたいな人！」

加東「そうね……。啓一郎はパシリ？」

イレーナ「……」

マリア「……」

加東「だって……啓一郎とは絶対恋愛感情にはならないでしょう」

マルセイユ「そうだな…… とうか想像できない」
稲垣「うーん…… そういうのは無いかな……」
作者「要するに上坂は便利者扱いってわけね」
アフリカ一同「うん（ああ）（はい）」
イレーナ「…… えっと…… 以上質問コーナーでした」

おまけコーナーが難しいです。とうかこれもうやめていいですかね？一応意見があったらお聞かせ願います。
さて、ようやくアフリカ編が終了しました。次はいよいよブリタニア編に入ります。つまりはアニメ原作に……。いや、長かった……。

第一話（前書き）

ようやくアニメ版に突入！ ……とはいっても、まだ宮藤はいませ
んが……

第一話

「……久しぶりね、啓一郎」

1944年10月――

ブリタニアにある第501統合戦闘航空団が置かれている基地の執務室で、ここの隊長であるミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐はかつての戦友である上坂啓一郎との再会を果たした。

「ああ、ミーナが中佐になっているとは……。思ってもみなかったな」

「それは私もよ。それよりも啓一郎がいまだに大尉であるほうが驚きよ。何かやったの？」

「いや、何も」

ミーナの問いに、上坂は肩をすくめた。

「まっ、いいわ。では……上坂啓一郎大尉、あなたの配属を心より歓迎いたします」

「はっ！」

先ほどの親友同士の会話とは打って変わり、命令口調になったミーナに対し、上坂も真剣な表情になって敬礼をした。

「めずらしいな、ミーナ中佐が招集をかけるのって」

ブリーディングルームでリベリオンから派遣されているシャーロツト・イエーガー中尉がおもむろにつぶやく。前方に黒板と教壇があり、教室のような部屋には珍しく全員がそろっていた。

「……ミーナのことだ、このところのお前達の行動について何か話す気だろう」

シャーリーにそう返したのは、ミーナと同じカールスラント空軍所属ゲルトルト・バルクホルン大尉。彼女の言葉には少しトゲがあった。

「あたしはそんな怒られるようなことはしてないけどな」

「お前な……！」

「まあまあトゥルーデ」

激昂し、勢いよく立ち上がったバルクホルンを、隣に座っていたエーリカ・ハルトマン中尉が諫める。

「ミーナはそんなことで集合を掛けたりしないよ。それにこの前新しく隊員が入ってくるって言うていたからその紹介でしょー、たぶん」

「む……そうか……」

渋々とバルクホルンが椅子に座ると、ミーナが入ってきた。

いくら少女達とは言っても軍人としての教育を受けた彼女達。全員がサツと立ち上がり、直立不動になる。ミーナが教壇の前に立つと、全員が敬礼をした。

ミーナも答礼をする。そして彼女達が座ると話し始めた。

「おはよう皆さん。今日は新しく501統合戦闘航空団に配属になったメンバーを紹介するわ。……いいわよ、入ってきて」

ミーナが促すと、上坂は大股でブリーディングルームに入る。途端に全員の表情が変わった。新しいメンバーがどう見ても男性であるということに驚いた者もいたが、それはごく少数だ。

上坂はミーナの隣まで来ると、全員の方に向き直った。

「始めまして……というより、久しぶりと言った方がいい奴の方が多いと思うが……本日より第501統合戦闘航空団に配属になった上坂啓一郎大尉だ。よろしく頼む」

「けっ、啓一郎!? ナンでお前こんなところにいるンダ!？」

「……久しぶりだというのに随分な挨拶だなエイラ」

部屋の後ろの方で素っ頓狂な声を上げた主に対して、上坂はため息をつく。

エイラ・イルマタル・ユーティライネン少尉——スオムス空軍所

属で、彼女とは東部戦線で一緒に戦ったこともある。

「イヤそれはびっくりするダロ普通！」

「知っているのエイラ？」

エイラの隣にいた白い髪の少女が尋ねる。

「ああ、東部戦線でネウロイを破壊しまくって、バルバロッサ作戦の途中段階まで成功したのは啓一郎のおかげとまで言われているんだ」

「さすがにそれは言い過ぎだろう……所で君は？」

「失礼しました。オラーシャ陸軍所属サーニヤ・V・リトヴァク中尉です」

サーニヤと名乗る少女がゆっくりと頭を下げる。少し眠たそうな眼をしていた。

「サーニヤは唯一のナイトウィッチで夜間哨戒を担当しているんだ」

エイラが我がごとの様に胸を張った。

「なんでお前が威張るんだ……」

上坂はため息をつく、前の方の左側の席に座っていたバルクホルン達に向き直った。

「……で、久しぶりだな、エーリカ、バルクホルン」

「ヤッホー、啓一郎」

「久しぶりだな、まさか501に来るとは思わなかったぞ」

「それは俺もだ。アフリカの砂漠でわがままな鷺の世話をし続ける
とっていたからな」

自嘲気味な笑みを浮かべる。

「ああ、あいつか……」

それを聞いてバルクホルンは途端に難しい顔になった。彼女も昔
色々と迷惑をかけられていたと言っていたからそれを思い出したの
だろう。

「ああ、勝負しろ勝負しろとうるさくてな……。全く、もう少し腕
を上げてからやってくれた方が俺もやりがいがあるのに」

「全く、マルセイユめ……。って！　ちょっと待て！　その言い方だ
とお前マルセイユに勝ったのか！？」

「ああ。そうだが？」

「……………」

「あははは……！　相変わらずだねー、ケーイチロー」

呆れ果てるバルクホルンの横で、エーリカがケラケラと笑った。

相変わらずだなこいつらも、と心の中で思いながら左側に目を移す。こちら側には初めて会う者たちが集まっていた。

「ま、というわけでこの部隊にも知り合いが多くいるわけだが……、改めてよろしく頼む」

「おっ、お久しぶりです！ 上坂大尉！ ガリア空軍所属ペリーヌ クロステルマン少尉です！」

しかしながら、前に座つてた眼鏡の少女は自分を知っているらしい。上坂は尋ねずにはいられなかった。

「？ 君には会ったことが無いはずだが……」

「はっはい！ 上坂大尉はご存じないかもしれませんが、私はカレー撤退戦の時に上坂大尉が守った船に乗り合わせていました！」

「カレー……。ああ、あのときか……」

上坂は記憶の中でペリーヌの姿を探すが、どうしても見つからない。

「すまん。残念ながら覚えていない」

「いいえ、気にしないでください。……私はあの時の大尉の姿を見て、ウィッチになろうと決意しました。お会いできて光栄です！」

ペリーヌの記憶の中ではどうやら相当美化されているらしい。上坂はあの時の記憶が殆どなかったが、少なくとも尊敬されるような人物ではなかったと思っているため、思わず苦笑した。

「……どうかされました？」

「いや、何でもない。……まあそんなに肩肘張らずに、宜しく」

「はっはい！」

尊敬する人物に声を掛けられたことが嬉しかったのか、ペリーヌは力強く返事した。

「なんか相当知り合いが多いんだな」

「……そついう君は？」

上坂はペリーヌの後ろにいたシャーリーに目を向ける。

「ああ、失礼。リベリオン陸軍所属のシャーロット・イエーガー中尉だ、宜しく」

軽く手を振るシャーリーを見て、リベリオン人らしく陽気な人だと上坂は思う。どこことなくアフリカで一緒に戦ったパットンガールズの面々と姿が重なった。

「ああ、宜しく……」

そう言いかけた刹那――

突然後ろに気配を感じた。

「な――」

振り返る前に、二つの小さい手が上坂の胸を掴む。

「んー……やっぱない……」

まだ12、3歳ぐらいの少女が上坂の固く平らな胸を揉みながら（？）ガツクリと頭を垂れながらつぶやく。

「お、おい。ルッキー二……」

「何やっているんだ？」

上坂はとりあえずルッキー二と呼ばれた少女に尋ねる。その顔は怒りを通り越して呆れの表情があった。

「んーとね。ケーイチローの胸がどれくらいあるかと思ってねー。でもつまんなーい」

「そりゃ男なんだしあるわけないだろう……。ああ、そいつはフランチェスカ・ルッキー二少尉。ロマーニヤ空軍所属だ」

「ありがとうイエーガー中尉。……さて、ルッキー二」

「ひっ……！」

ルッキー二は上坂の雰囲気が変わったことに気付き、体を震わせる。

「初対面の奴の胸をいきなり揉むのは……同姓でも失礼にあたるぞ」

「は、はひ……」

ただ少しだけ睨んだけなのに、ルッキー二の顔が半泣きになる。上坂は心の中で傷つき、苦い表情になる。

「おい……。別に俺は怒っていないんだが……」

「あっはっはっはっは！」

上坂が狼狽えると、突然ドアの方から高笑いが聞こえた。

「いやー、相変わらずの様子で何よりだ。しばらく会っていなかったからどんなふうになっていたのかと心配していたぞ」

入り口には左目に眼帯をかけた少女が腕を組んで立っていた。上坂は体を向けて旧友との再会を喜ぶ。

「坂本か、久しぶりだな」

「ああ。懐かしいな、リバウ以来か」

「まあな」

二人の言葉は少ないが、それでも通じるあたりお互いに信頼し合っているのだろう。いや、もしかしたらお互いが心の中で言っていることが分かっているのかもしれない。

「……さて、皆の自己紹介も済んだことだし、各自待機してください」

「了解！」

「……どうだった？ あの子達」

執務室に向かう途中、ミーナは歩きながら上坂に尋ねる。

「……そうだな。各自の腕は見ていないから何とも言えないが、なかなか個性的な奴らだと思う」

「そうね。それは私も思うわ」

ミーナが苦笑する。だがすぐに顔を曇らせ、言葉をつづけた。

「……だけどみんな自分勝手っていうか……とにかく連携がうまく取れなくて……個人個人の腕に頼っているのが現状なのよね」

「そうなのか。とてもそうには見えなかったが……」

上坂が見た限りでは、そこまでひどいと感じることはなく、むしろ仲良くやっているように見えた。

「確かにあの子達、地上ではそこそこ仲良くやっているんだけど……空じゃどうしてもね……」

「ふむ……」

上坂は良い案を考えてみるが、初対面でありまだ戦闘風景すら見
ていない状況ではまったく思いつくはずがない。

「……まあそのうちに何か考えてみる」

「お願いね」

ミーナが安堵した表情を浮かべる。そうしている間に、二人は執
務室に到着した。

「いいわよ、入って」

「ああ、失礼する……」

そう言いながら上坂は中に入ると、中の光景に思わず声を失って
しまった。部屋の奥にある重厚な机の上には、1m近く積まれた紙
の束があるからだ。

「……おい、あれはなんだ？」

いやな予感しかないが、それでも尋ねずにはいられない。案の
定思った通りの返事が返ってくる。

「実はこの頃いろいろ忙しくって……だからお願いね、啓一郎」

（……絶対確信犯だろ）

にこやかなミーナを見て、心の中でそう思いながらも、間違いな
くやる羽目になる書類整理を想像して、上坂は盛大なため息をつい
た。

第二話

基地に警報が鳴り響く。ネウロイがガリア方面からの侵攻が確認されたようだ。

「敵は高度6000！ ロンドンへ向けて時速200マイルで侵攻中！ 先行して敵を待ち伏せて！」

「了解！」

ミーナの号令一下、隊員達は自分のストライカーユニットに足を滑らせる。薄暗い格納庫内が青白い光に照らされ、明るくなるその中心には銃を背負い、戦闘準備を整えたウィッチ達が待機していた。

「全部隊、発進！」

懸架台からウィッチ達がそれぞれ大空へと飛び上がっていく。その数8――。ミーナとサーニャは基地に待機している。

現在指揮を執っている副隊長の坂本を先頭に、ウィッチ達は進撃していった。

「……いたぞ」

坂本は左目についていた眼帯を外し、はるか遠方にいるネウロイ

を発見する。上坂も使い魔によって強化された視力で前方を見るが、まだ発見できていない。

「確認できない。どのくらいの大きさだ？」

「恐らく300m級。ブリタニア方面では特に珍しくないやつだ」

「ふむ……」

改めて前方を見やる。すると芥子粒ぐらいの大きさだが、黒い物体がこちらに向かって来ているのが確認できた。

「……デカブツか……。これではあまり戦闘機動は役に立たんな」

「ああ。ありったけ近づいて弾を叩きこむ。ほとんどこの戦法だ」

両手にMG42を持ったバルクホルンが同意する。

「よし、バルクホルンとハルトマンが先行してくれ」

「りょうか……って！ おい！ リベリアン！」

「おーす！ 先に行ってるぞー」

「とつつげーき！」

坂本の命令を聞かず、シャーリーとルツキー二が一気に増速する。そのままウロイに一直線に向かっていった。

「くっ……私達も行くぞ！ ハルトマン！」

「りょうかい！」

少し遅れてバルクホルンとエーリカも突撃して行く。

「全くあいつら……！ 全機攻撃開始！ 奴の頭を抑えるぞ！」

坂本は苦虫を噛み潰しながら、作戦を変更して攻撃を開始した。

「……フム」

しかし上坂は、全員の能力を確認したかったため、今回は戦闘に参加せず、少し離れた上空から観察することに決めていた。事実今回は戦闘に参加しないことを坂本とミーナには伝えており、二人からも了承を得ている。

まず最初にシャーリーとルツキー二がネウロイの上方から逆落とりにダイブする。それを防がんと体表の赤い部分から無数のビームを発射するが、二人はバレルロールでそれをかいくぐり、それぞれBARとM1919の引き金を引く。

二つの銃口から発射された7.62mm銃弾がネウロイの表面装甲を削り、ビームの発射口を破壊していく。とはいってもネウロイは再生能力があるので短時間で再生してしまうだろう。

その脇をシャーリーとルツキー二が降下していく。それを追うようにしてネウロイの下部から大量のビームが彼女達を狙う。しかし二人は紙一重でこれかわしていった。

ネウロイが二人に気を取られている隙に、今度は前方からバルク

ホルンとエーリカがMG42を発砲した。先ほども少しだけ直径の大きい7・92mm弾が装甲を削っていく。ネウロイはまるでハエを追い払うかのようにあらゆる方向に向けてビームを放つ。

「きゃあ！」

「オイコラ！ アブナイじゃない力！」

そのうちの一発が続けて攻撃しようとしていたエイラとペリーヌの脇をかすめ、二人は慌てて回避行動をとった。

「うるさい！ さっさと攻撃せんか！」

「ナンだとー！」

「おまえら！ ケンカしている場合じゃないだろう！」

バルクホルンとエイラがお互いに睨み合う。それを見た坂本が声を荒げた。

「全く、堅物軍人はこれだから」

「命令違反のリベリアンには言われたくない！」

「……何やっているんだあいつらは」

戦場であるはずなのにもかかわらず喧嘩を始めた彼女達を見て、上坂は盛大にため息をつく。確かに個人個人の技能は高いものだが、戦闘に一番重要であるはずの連携が全く取れていない。こうしている間にもネウロイはロンドンに向けて機首を進めているし、削って

いた表面装甲もすでに修復されている。さっきの攻撃が無駄になっていた。

「……仕方ないな」

上坂はそうつぶやくと、手に持っていたMG15/20の安全装置を外し、一気に急降下を開始する。

大型で表面上に無数のビーム発射口を持つネウロイに対抗する手段——それは上空から逆落としに急降下する一撃離脱戦法——

上坂は教科書通りの綺麗な機動を描きながら、ネウロイの鼻先に向かって降下する。ネウロイは上坂に気付き、先ほどと同じくビームを撃ち放つ。上坂はそれを避けようとせず、前方にシールドを張った。

幾十本もの火線が上坂のシールドに当たり、上坂の降下速度が落ちる。それを見計らってか、背中に背負っていた二丁のMG42を空中に放り投げた。

「——ゆけ」

短くつぶやくと、放り投げられた二丁の銃の周りが青く光り始め、重力に逆らって空中に制止。そしてネウロイの下部に潜り込んだ。

ネウロイの下部に潜り込んだ二丁の銃は超至近距離から銃撃を浴びせ、ネウロイの表面装甲を砕いていく、さらに上坂は手に持っていたMG15/20の引き金を引く。

上下からの挟み撃ち射撃——

本来ならば連携して初めてできる機動を、上坂は固有魔法を駆使して一人で行う。さすがのネウロイも上下から受ける銃撃によって表面装甲を削られ、攻撃手段がなくなった。

——いまだ。

上坂は持っていたMG15/20を背負うと、腰に差していた扶桑刀「黒耀」を抜く。

黒く輝く刀身が、上坂の魔法が込められることによって赤く妖しく光り始めた。

「——唸れ、雲耀——」

ネウロイと交差した瞬間、上坂は目にもとまらぬ速さで刀を振り下ろす。

そのまま降下を続ける上坂の上空には先ほどと変わらずに飛行するネウロイの姿——と。

ズ——

ネウロイの中心部分から縦に線が入り、左右がズレる。一瞬遅れてネウロイは白い破片となり、黒い巨体は大空から消えた。

「……ふん」

上坂はつまらなそうに、刀を鞘に納めた。

「おいしー!」

食堂にルツキー二の歓声と、チーズの香りが広がる。

戦闘が終わり、帰還した後そのまま夕食の時間になった。

そこで出されたのはグラタン。上坂が帰還後厨房にこもり、丹精を込めて作り上げた逸品だ。

程よくとろけて焦げたチーズの中にマカロニと鶏肉、玉ネギやブロッコーリを入れたそれは、ルツキー二ほどではないが、皆に高評価を受けている。

「やっぱり、ケイイチローのご飯は最高だねー、ホント」

そう言いながらエーリカは器を抱え込んで、勢いよく頬張る。

「ああ。上坂の料理を食べると、不思議と力が湧いてくるな」

普段からあまり食に興味が無い……というより、必要な栄養さえ取れていれば問題ないと公言するバルクホルンでさえ、素直に賞賛している。

「あたしは結構味の濃い物が好きんだけど……イチローのは薄そうでしたりと味が効いていてうまいな」

「濃厚なチーズにしっかりと、でも柔らかく煮込まれた鶏肉……素

晴らしいですわ」

「それはよかった。お代わりもあるからどんどん食べる」

上坂の料理を食べたことが無かったシャーリーとペリーヌから褒められて、上坂は頬を緩める。だが内心では先ほどの戦闘のことに
ついて考えていた。

(……こうして見ると、普段の生活の中では特に大きな問題は見当たらない……だが今回の戦闘では全くと言っていいほど連携が取れていなかった。……なぜだ?)

生活面でいがみ合うということは、ここ数日観察した中では、バルクホルンとシャーリーが少々やっただけで、特に問題では無いと判断していた。

むしろ共同生活を送るという点では、お互いが助け合ったりしている場面もみられるため、非常に友好的な雰囲気である。

だがひとたび戦闘になると命令違反、独断専行が横行して簡単に倒せる敵も時間がかかってしまう。

今日のネウロイも、この部隊の実力ならば海上で撃破できたはずなのに、内陸の方まで侵入を許してしまった。

(……今回の様に敵が一体ならまだ問題ない……だが、もし複数で来られると現状のままではブリタニアを守りきれない……)

ブリタニアは欧州奪還のためにとっても重要な拠点だ。ここをネウロイに蹂躪されてしまったら人類は欧州を失い、結果的にアフリカ

方面、オラーシャ方面に多大な負担をかけることになる。そうなつてしまうと……

（やはり部隊内の連携訓練を重点的に行わないとな……ヤレヤレ、また仕事が増えるな……）

上坂はため息をつく、グラタンを口に含んだ。

第三話

「そこだ！」

「いつけ〜！」

「ハルトマン！ 後ろだ！」

「お待ちなさい！」

「お前ら！ 何勝手に行動しているんだ！」

……これはひどいな。

上坂は目の前で繰り広げられている空中戦を見ながら、隊員達のあまりの自分勝手な行動にため息をついた。

上坂は隊員達の連携の悪さを直すため、ミーナに無理を言っ、翌日に模擬戦を行うことになった。

今回の模擬戦は、坂本をリーダーとしたペリーヌ、バルクホルン、ハルトマンチーム。ミーナをリーダーとしたエイラ、シャーリー、ルッキーニチームに分け、どちらかが全滅した時点で終了するもので、上坂は今回の模擬戦の審判を行った。なお、サーニャは夜間警戒のために訓練に参加していない。

こうして模擬戦が開始されたのだが、開始早々に、シャーリーとルッキー二が坂本チームに一撃離脱を仕掛け、バルクホルンとエーリカとの乱戦に突入。両チームリーダーが一旦立て直そうとしたが、挑発をするエイラに対してペリーヌが激昂し、最早追いかけることしか言えない状態になっている。

空中にデタラメな機動が絵描かれ、当たらないペイント弾を発射する虚しい音が上坂の耳に入ってくる。

……これは駄目だ。何も変わらない。

今回はあくまで連携を取るために行った模擬戦であり、勝ち負けは全く関係ない。だがそれを理解している者が少なく、また理解はしていてもそれを実行に移そうとはしていないか、統率がとれなくなっている。

……やっぱり”アレ”をやるしかないか。あいつらの為にも。

上坂はあまり使いたくなかった手段を取らざる負えなかった。

「訓練やめっ！」

上坂が唐突に叫ぶ。

「どうかしたの？ 啓一郎」

全員が空中に制止し、上坂に疑問の目を向ける。

「こんな訓練を何時間もやっても無駄だ」

「無駄って……あなたが提案した訓練じゃない」

ミーナの言った通り、昨日の夜、上坂は書類を提出するついでに、ミーナに頼み込んでわざわざ今回の訓練メニューを取り入れたのだ。文句の一つも言いたくなるのはうなずける。

「ああ、わかっている」

上坂は背中に背負っていたペイント弾入りの機関銃二丁を空中に頼り投げる。

機関銃は周りを青白い光で覆われたかと思うと、上坂の左右にそれぞれ位置に付いた。

「……だけど今の訓練では意味がない。だから訓練を変更する。全員で俺にかかってこい。俺を撃墜した時点で訓練終了とする」

「……おいおい、そんなんでいいのかよ」

先ほどバルクホルンと格闘戦を繰り広げていたシャーリーが軽口を叩く。

「構わん。……最も、墜せたらの話だが」

「……ふうん。そうか。なら……！」

上坂の挑発が癪に障ったのか、シャーリーはそういつとルッキ―
二と共に一気に急上昇をする。

「後悔するなよ！ イチロー！」

「するなよ〜！」

高度を上げた二人はそのまま上坂めがけて急降下する。リベリオ
ンの一般的な戦法——撃離脱戦法。機体の優速を生かし、急降下
と急上昇を繰り返す戦法だ。

扶桑皇国で一般的な格闘戦に比べると短時間での敵の撃墜数に劣
ると言われているが、その分相手との交差する時間が短く、格闘戦
よりも安全で確実だ。

そしてシャーリーとルッキ―^{タイプ}二の急降下は非常に急角度で、よほ
ど訓練されていない限りそういった機動は取れない。

——さすがに501に呼ばれることだけあるな。

上坂は表情を変えずに心の中でつぶやく。

確かに彼女達のダイブなら、普通のウィッチでは避けることはで
きないだろう。だが、数々の激戦を潜り抜け、最も多く戦闘を経験
している上坂にとってみれば大した脅威にならない。

「——ふん」

上空から降り注ぐペイント弾の嵐をあっさりとかわすと、横を抜

けて急降下を続けるシャーリー達を見ることなく、手に持っていた銃を向け、二回引き金を引く。

セクターで単発撃ちになっていたため、僅か二発しか発射されなかったペイント弾が、いとも簡単に二人の背中に着弾し、黄色い花を咲かせた。

「なっ……！」

「うそっ！」

あっさりと“撃墜”されたことに驚ろく二人。他の隊員達も、驚愕した。

「シャーリーおよびルッキー二撃墜。——さあ、次は誰だ。——いや、メンドくさい。全員いっぺんにかかってこい」

「——上坂……！」

「さすがに私も怒ったよ——」

さすがに馬鹿にされて怒ったのか、今度はバルクホルンとエーリカが仕掛ける。二人は連携して上坂を囲み、同時に攻撃を仕掛けようとする。

——今度は同時多重攻撃か。

上坂は心の中でつぶやきながら、それでも焦ることなく対処する。

—— 普通なら同時に対処しなければならなかったため、上坂

が圧倒的に不利だろう。” 普通なら”

上坂は急降下を開始。二人も後に続き、上空からまんべんなく弾をばらまく。だが空戦では相手の真後ろを取らないことにはいくら銃撃しても大して意味がなく、せいぜい威嚇にしかない。

上坂はそれをあえて下手な機動で躲していく。そうすることで相手がイラつき、正常な判断が出来なくなる。実際、後続の二人は躍りになって上坂を追いまわしている。

——戦場では前四割、後ろ七割だぞ。

「トウルーデ！ 逃げて！」

ミーナが叫び、二人が慌てて振り向く。後ろには二丁の銃が二人に銃口を向けていた。上坂の固有魔法——ボルトガイスト物体浮遊によって物理法則を無視して、空中に浮かんでいた二つの銃が、同時に火を噴く。

「うわっ！」

毎分1200発で放たれたペイント弾がカールスラントのダブルエースを襲い、二人を黄色く染め上げた。

「そんな！ ありえせんわ…… きゃあっ！」

あまりの惨状に茫然とするペリーヌに、いつの間にか回り込んだ上坂の放ったペイント弾が襲い掛かり、五人目の脱落者が出る。

「んにやろー！」

エイラが上坂の後ろから銃撃をする。彼女の固有魔法——未来予知を使つての偏差射撃が上坂を襲う。だが――

「うっ、嘘ダロ!？」

未来予知をしたにもかかわらず、上坂はその銃撃をかわす。そして攻守が入れ替わり、今度はエイラが追われる立場になった。

——確かに未来予知は厄介だ。

上坂は機関銃の照準器を覗きこみながら、心の中でつぶやく。彼の視線の先には必死に逃げ回るエイラの姿があった。

——だが、未来予知は、あくまで不確定な未来でしかない。

上坂は”エイラの未来位置を予測し”、引き金を引いた。

——なら簡単だ。”その予知を外せばいい”。

放たれた弾丸は、エイラが予知して、安全だと思つた所に降り注ぐ。

「ナッ——!」

彼女はその弾幕の中にまともに突っ込み、体中を真っ黄色に染めあげた。

「……ばかな」

「……なんてこと」

坂本とミーナは、上坂があつという間に全員を倒したことに驚愕する。

確かに二人は上坂が強いということは知っていた。だが、今回戦った相手は各国から集められた精鋭であり、幾ら連携が取れていないとは言ってもこう短時間で敗れるとは思ってもみなかったからだ。

「——さて、どうする。ミーナと坂本は？」

上坂は訓練前と同じく、涼しい顔で二人に尋ねる。

「……いや、やめておこう」

「そうね。今の私達じゃかなわないわ」

坂本とミーナは、戦わないことに決めた。たった二人では上坂に勝ち目はないだろうし、そもそもなぜ上坂がわざわざ隊員達を挑発したのか、その意図が分かったからだ。

（……すまん、上坂。汚れ役を押し付けてしまった）

坂本は心の中で詫びを入れる。それが上坂に伝わったのかどうかはわからなかった。

上坂は体中を黄色く染めたウィッチ達に向き直る。その顔には少し

ばかり寂しそうな表情があった。

「……今日の晩飯は、鍋に入っているシチューを好きに食べてくれ。俺は基地に戻る」

そう言つと、上坂はさつさと基地に戻っていく。あとに残された隊員達は茫然とその背中を見送ることしかできなかった。

夜――

ほとんどの隊員が自室に戻っている頃、サーニヤは夜間警戒に出るため、目を覚まそうと食堂へと足を向けていた。

「……………」

ふと足を止め、耳を澄ます。するとトントントンという小刻みな音が前方から聞こえてきた。

――たしかもう消灯の時刻なのに……

見れば廊下の奥の部屋から光が漏れている。サーニヤが目指していた食堂だ。

サーニヤはそつと扉に近づくと、ドアの隙間からそおつと中を覗きこむ。

部屋は明かりにともされて、奥の台所には緑色の軍服を着た人がこちらに背中を向けて何かをしている。先ほどの音はその人のそばから発せられているようだった。

——たしかあの軍服は……

「上坂……さん？」

「ん？　なんだ、サーニヤか」

サーニヤに気付いて、エプロンをつけて包丁を握っていた上坂が振り返った。

第三話（後書き）

これから、少しばかり投稿期間を開けようと思います。というのも、いろいろ忙しいので……

第四話（前書き）

クレーンゲームで、エイラをゲットしました。

第四話

「ほれ、ホットミルク。これで目を覚ませ。それとこっちは、哨戒中にお腹がすぐと思ったからサンドイッチを。あと水筒には、あったかい紅茶を入れておいた。最近めっきり寒くなったからな」

「あ、ありがとうございます……」

椅子に座って待っていたサーニヤは、立て続けに繰り出される言葉に、少しばかり戸惑いながらも、差し出されたマグカップを手に取り、一口飲む。

「温かく、ちょうど良い温度に調節されたミルクがのど元を通って体の中に落ちていき、次第に目が覚める。」

「そうだ、アップルパイを作ってみたんだが……食べるか？」

「アップルパイ……ですか？」

——似合わない。

サーニヤは失礼ながらも、心の中でそうつぶやき、上坂がエプロン姿でアップルパイを焼いている姿を想像してしまう。

「……ふふっ」

思わず微笑んでしまったサーニヤを見て、上坂は怪訝な顔になった。

「どうかしたのか？」

「いえ……何でもありません。いただきます」

「そうか」

上坂は肩をすくめると、台所に戻り、焼き立てのアップルパイを持ってくる。そしてサーニヤの目の前で八等分に切り分けて、その一切れを小皿に乗せて差し出した。

「ほれ」

「どうも」

サーニヤはその一切れを手で口元まで運び、一口噛む。

サクッ

サクサクのパイ生地の中に、濃厚でいて、それでいてさっぱりと甘酸っぱいアップルジャムが、口の中に広がる。

「……おいしい」

「そうか。それはよかった」

上坂は顔をホツとした顔になり、近くにあった椅子に座って、懷から煙草を取り出し――バツが悪そうな顔になって、渋々とそれをした。

「……どうしたんですか？」

「いや、他の奴がいる所では吸えんからな」

「別にいいですよ。煙草ぐらい」

「そう言うわけにはいかんだろう。健康に悪いし」

「……それなら、吸わなければいいのでは？」

「それを言っな」

上坂は慚然とした表情になって――ふと思いつく。

「……どうかしましたか？」

「いや……。昔、同じようなやり取りをしたことがあったと思ってな……」

「昔……ですか」

「ああ。あれは……確かオストマルクの時……だったかな」

「オストマルク……」

サーニヤは大戦初期、上坂がオストマルクで戦っていたと、エイルが言っていたことを思い出す。

「ああ。……よく突っかかってくる奴で、そんなに腕も良くないのに突っ走って……だがひたむきでまっすぐな目をしていた奴だ」

上坂は昔を懐かしむように語る。

「その方は……」

「……オストマルク撤退の少し前にな……。ネウロイの攻撃をまともを受けて……」

「……そうですか……」

サーニヤは居たたまれなくなつて視線を落とす。彼女の視線の先には食べかけのアップルパイがあつた。

「……あの時もこうやってお菓子を作つて……。絶望に支配されていたあいつらの士気を何とか繋ぎ止めたっけな」

上坂は視線を落としたサーニヤを見て、苦笑する。

「……すまなかつたな。過去の話なんかして」

「いえ……、その……」

サーニヤは言葉を続けようとしたが、上坂はそれを手で制した。

「いやいい。……すまなかつたな。夜間哨戒頑張ってくれ」

そういうと上坂は残りのアップルパイを冷蔵庫にしまい、食堂を後にしようとする。

「あの……!」

だがサーニヤが珍しく声を上げ、上坂は立ち止まった。

「上坂さんは……そういった人を無くすために、わざとエイラ達と模擬戦をしたんですよね？」

サーニヤは、先ほどエイラから、今日の模擬戦について聞いていた。

「……………」

上坂はサーニヤの方を見ずに、黙ったままだ。

「……エイラは上坂さんのことが嫌いだって言っていたけど……、でも！……上坂さんは優しい人だと私は思います」

「……そうか、ありがとう」

上坂はポツリとつぶやくと、食堂を後にした。

翌日――

「上坂」

鍛錬が終わり、上坂は朝食を作ろうと食堂に向かっている時、突然後ろから呼び止められた。

上坂が振り向くと、そこには坂本が立っていた。今は早朝で、ほとんどの者は眠りにについているが、坂本も朝早くに鍛錬をしているから起きていても不思議ではない。

「どうした？」

「今日なんだが……、昨日と同じく模擬戦をやりたい。いいか？」

「構わんぞ、そのくらいは。ただ、あいつらの連携が取れない限りは……」

「わかっている。さすがにあいつらも、昨日の模擬戦でプライドをへし折られたからな」

坂本は苦笑する。

「そうか……」

「あ、待ってくれ」

そのまま歩き出そうとした上坂を、坂本は慌てて呼び止める。

「なんだ？」

上坂は顔だけを向ける。

「いや…… すまないな、こんな役を押し付けてしまって」

「……構わんぞ。このくらい」

上坂は軽く肩をすくめると、今度こそ食堂へ歩を進めた。

「……みんな準備は済んだ？」

静かな朝食を終えた後、夜間哨戒を終えたサーニャ以外の隊員達は格納庫に集まり、それぞれ自分のストライカーユニットに足を滑らせる。

「ああ」

「大丈夫だ」

「オッケーだよ」

「……それでは、全機発進！ 高度6000で待機！」

「了解！」

ミーナの号令一下、全員が大空へと飛び立つ。

全部で九条の飛行機雲が、上空に向かって綺麗に伸びていく。その光景は、恐らく見る者に感動を与えるだろう。

しかし当の本人達はそんなことを一切考えず、ただ己の成すことだけを頭の中で復習していた。

やがて高度6000mに到達する。そして上坂だけが皆の前に進んだ。

「……さて、昨日と同じく俺を撃墜したら訓練終了だ。今回は坂本とミーナも参加するんだよね？」

「ああ」

「ええ。私達も、参加させてもらっわ」

「そうか…… というわけで。 戦闘開始」

上坂が静かにそう告げると、全員が一気に散開した。

第五話

「いいか。今日の模擬戦でなぜ上坂が、いきなりあんなことを言っただかわかるか？」

時間は少し遡り、前日の夕食の時間――

上坂にプライドを打ち砕かれ、どんよりとした空気が漂っている中で、坂本は皆を見回しながらそう告げる。

「それは……私達が、連携が取れていなかったから……からか？」

持っていたスプーンを置いて、カールスラント撤退戦の時一緒に戦ったバルクホルンが発言した。

「そうだ。……確かに私達は各国から集められた精鋭部隊であり、個人個人の技量は非常に高い。だが、上坂は、我々よりもはるかに強い。なぜならあいつは、沢山の過酷な戦場を経験してきたからだ」

「……確かにそうダヨナー あいつ東部戦線にもいたシ」

かつて東部戦線で一緒に戦ったエイラが同調する。

「そう。つまり啓一郎は私達の誰よりもネウロイのことを理解し、その対策を講じてきたのよ」

坂本の後を継ぐようにミーナが語る。

「でもあなた達ならわかるでしょ？ どうして啓一郎が、あれだけ

連携にこだわるかを」

「……かつて連携が取れていなかったばかりに、被害を拡大してしまったから……でしょうか？」

「その通りよ、ペリー又さん」

ペリー又はかつてガリア撤退戦の時、ガリア軍がともに機能していなかったがために多くの人々の命が奪われてしまったことを思い出し、顔を伏せた。

「……昨日の戦闘も、本来ならば海上で撃破できたはずなのに、連携が取れずに仲間同士でいがみ合い、結局上坂が撃墜しただろう？
我々の任務はブリタニアの防衛であり、ネウロイを寄せ付けないことだ。そうするためには国とか関係なく、協力し合ってネウロイと戦っていかねばならない。上坂はそう言いたかったんだ」

「……………」

心当たりがあり、全員が気まずそうに顔を伏せた。

「だからこそ啓一郎に勝たなければいけないの。……ネウロイに勝つためにも」

「そうだ。そのためには、全員の連携が必要だ」

「それはわかったけど……具体的にどうするの？」

ハルトマンが尋ねる。坂本は待つてましたと言わんばかりに、目を輝かせた。

「そうだな。まずは……」

（ふむ……）

上坂は散開した隊員達を見て、少なくとも昨日の様に独断専行で動いているわけではないと感じた。

（動きが洗練されている。恐らくミーナが指揮を執っているな）

僅かな動きから、かつて彼女の下で戦っていた頃の動きに似ていると気づき、彼女達が本気で自分に勝とうとしているのが分かる。それほどまでに昨日の模擬戦は彼女達に衝撃を与えたのだろう。

（となると、まずは……）

上坂が上を見ると、昨日と同じくシャーリーとルッキー二が急降下で突っ込んできていた。

「昨日のあたしとは……！」

「違うんだよ！」

まっしぐらに突っ込んでくる二人だが、まだ引き金を引かない。

（まずはシャーリーとルッキー二が上空から一撃離脱を仕掛け、上

坂の注意を引く。ただし、あいつの混乱を誘うために攻撃は控える)

そのまま二人は上坂の横を通過した。

(銃撃をせずに通過した? ……ということは……)

上坂はホバリングしたまま右にずれる。すると先ほどまでいた場所
所に三条の火線が通過した。

「うそ! 気付いたの!」

「くっ…… さすが上坂だ……」

上坂のすぐ脇をバルクホルンとエーリカが高速で通過した。

(その隙にバルクホルンとエーリカが背後から銃撃を仕掛ける……
と言っても当たるとは思えないが……)

(やはり死角からの攻撃か……。だが、それだけでは意味がない
ぞ)

上坂は二人を撃墜しようと手に持った機関銃を向けた。だが、

ゾクリ――

戦場の勘―― 上坂の背筋に何か冷たい物が走り、慌てて左手で
刀を抜く。

「はあああつ!」

上坂が振り返った瞬間――坂本が振りかぶった刀を片手で受け止めた。

「くっ！ 刀も有りなのか！」

「勝負に有り無しは関係ないだろう！」

（その隙に私が上坂に斬りかかる。……ああ、心配するな。本気ではやらないさ）

上坂は何とか押し返し、一旦坂本と距離を取る。

「今ですわ！」

「くっ……！」

後方から襲い掛かるペイント弾をすんでの所で躲す。攻撃を仕掛けたペリーヌに銃口を向けようとするが、ペリーヌはさっさと離脱してしまった。

（なるほど……！ 多人数による同時多重攻撃……！ 連携が取れているならば、これほど厄介なものはない！ だが……！）

上坂は、背負っていた二丁の機関銃を放り投げる。そして二丁の銃は、上坂の物体操作によって青白く光り、大空へと放たれた。

「わっ！」

「くそっ！ これは厄介だ！」

「こんなのズルいよ〜！」

二丁の銃で隊員達を翻弄している隙に、上坂はあたりを見回し、指揮を取っているであろうミーナの姿を探す。

（……確かに昨日に比べれば厄介にはなった……。だが、指揮官が“撃墜”されれば連携もうまく取れなくなる……！）

連携攻撃の弱点——それは、指揮する人がいなくなると、途端にどうやって動いたら良いかわからなくなってしまうことだ。この場合、今まで攻撃してこなかったミーナがこの攻撃の士気を取っているのだらうと、上坂は予測した。

そして上坂は、上方約1000mの所で全体を見回しているミーナを発見した。

（やはり上空から……。だが……！）

上坂は未だ翻弄され続けている隊員達の間を縫って急上昇する。ミーナはそれに気づき、回避行動をとるが、歴戦の上坂にとって見れば、相手がどの様に動くか簡単に予測できる。

「そこだ！」

上坂はミーナが来るであろう所に銃口を向けて引き金を引く。放たれたペイント弾は真直ぐ突き進んだ。だが——

「なにっ!？」

ミーナが、それを咄嗟の所で躲した。

（馬鹿な！　なぜ……　！？）

上坂は、ミーナの背中に張り付くように、もう一人いることに気付いた。

（なるほど……！　考えたな！）

ミーナにぴったりと張り付くエイラを見て、上坂は確信する。ミーナは未来予知を使えるエイラの力を借りて銃撃を避けたのだ。

確かに上坂は未来予知を外すこともできる。だが、それはあくまで相手が未来予知を使っていると分かっているからであって、今回の様にこつそりと使われていたならば、上坂の銃撃を避けることなど簡単だ。

（……昨日までとは違う。　こいつらは絶対に俺に勝つために、対策を講じてきた）

上坂は悔しさよりも、安堵と喜びを感じていた。

——自分がやったことは無駄ではなかった。

（あいつらも仲間との連携の重要性に気付いてくれた……。なら……！）

——あとはこの勝負を楽しむまで！

上坂は口元に笑みを浮かべ、急降下を開始した。

——すごい……！

ミーナは上坂を包囲しながら、心の中で感嘆していた。

八対一という明らかに不利な状況にもかかわらず、上坂は巧みな機動でミーナ達の攻撃をかわし、逆に攻撃をり返してくる。

既に模擬戦を開始してから十分—— 追い詰められているのは包囲しているはずのミーナ達だった。

——さすが傷だらけの守護神と呼ばれるだけあるわね。

だれが言い出したかわからないその仇名は、かつて一緒に戦っていた時の上坂にぴったりだった。

避難民を守るために自らを盾にして戦い、たとえ傷付いていようと、ストライカーユニットがボロボロになってもいようと出撃し、誰よりも仲間を大事にしていたあの頃の上坂。

今はだいぶ性格が丸くなったが、ひとたび空に上がれば、それは健在だ。

——だからこそ啓一郎、あなたを倒すわ。

ミーナは隊員達に合図を送る。

すると今まで上坂と格闘戦を繰り広げていた隊員達が、一斉に距離を取った。

——これで、終わりにする！

全方位からの同時多重射撃——

360度あらゆる方向から放たれたペイント弾は、上坂に避ける暇も与えずに、彼を真っ黄色に染め上げた。

「ありがとう、啓一郎」

訓練が終わり、体中をペイント弾まみれにされた上坂がシャワーを浴び終え、食堂に向かっていた時、唐突にミーナに話しかけられた。

「……別に、あいつらが無事に帰ってくるためにやったことだ」

上坂は少しぶっきらぼうに返事する。今回負けたことで少し悔しいのだろう。最も、この人数差であそこまで善戦していた方が驚きなのだが……。

「ええ。でも、これであの子たちの結束も、より強まったと思うわ」

「まあそうだな。……そうでないと困るが」

上坂はため息をつく。だが、その表情はどこか明るかった。

「……ところで」

「なんだ？」

「最後の攻撃なんだけど……、あの時、手を抜いたでしょ？」

「……さて、何の話やら」

この後――

年末にかけて、連携機動を取り入れ始めた第501統合戦闘航空団は、これまでよりもさらに戦果を拡大した。そして、その活躍を聞いた連合軍司令部は、新たな隊員の増強を認め、より一層の活躍を期待することになる。

だが、それを快く思わない人物もまたいて、彼らは彼女達の活動を妨害するために暗躍をし始める――

第六話

「扶桑に戻る？　なんで今頃？」

先ほど、ミーナに呼ばれて執務室に來た上坂は、坂本が一旦扶桑に戻るということを告げられ、驚いた。

その驚きは当然だというように、坂本は苦笑いしながら、話を続ける。

「いや、実は扶桑で有望なウィッチが見つかったという連絡があったな。それで私がスカウトしに行くことになったんだ」

「スカウトって……。それじゃあブリタニア防衛はどうするんだ？」

上坂の言う通り、501はブリタニア防衛の一翼を担っていて、ガリア方面からのネウロイ侵攻を防いでいる。

しかし、現状は戦闘統合団の定数である14人にも届かず、網渡りの部隊運営が続いている。そんな中で副隊長である坂本が抜けるのは、非常に問題だった。

「それは問題ないわ」

だが、ミーナはその対応策を練っていたのか、一枚の書類を机の引き出しから取り出すと、上坂に差し出した。

上坂はその書類を受け取り、パラパラとめくる。

「リネット・ビショップ軍曹…… 新たな補充か」

「ええ、そうよ」

「なるほど……。これなら確かに人数が増えて楽にはなるな。……
だが新人か」

上坂は苦い顔をする。実戦では、新人——特に初実戦時の死傷率が極端に高く、ましてや501は、ブリタニア防衛の中でも激戦区に投入されることが多く、そのため性格はともかくとして、隊員達の腕は非常に高い者が中心だ。

そんな中に右も左もわからない新人隊員を入れると、自信を無くしてしまうのではないかという懸念があった。

「まあ確かにそれは問題だけど…… そこは啓一郎が何とかやって頂戴」

「……俺に押し付ける気満々だな」

上坂は半ばあきらめた声で、恨めしそうにミーナを睨む。その様子を見て、ミーナは苦笑いをする。その様子を見て、坂本はすまなそうな顔をした。

「すまないな。本当なら私が新人の教育をすべきなんだが……」

「……まあいいさ。それに、他の奴に教官なんて出来ないだろうしな」

上坂は、規則に厳しい者や、自分の夢に向かって突っ走っている

者、戦闘では頼りになるのに日常生活ではむしろ足を引っ張り続けている者を思い浮かべた。

そんな奴らに教育を任せたら、さらに大変なことになるな、絶対――

上坂は、将来の自分に負担がかからないよう教育せねばと、半分以上本気で考えた。

（どうして私がこんなところにいるんだろう……？）

ブリタニア空軍所属、リネット・ビショップ軍曹は、心の中でつぶやいていた。

自分の所属することになった第501統合戦闘航空団は、祖国であるブリタニアの防衛の一翼を担う多国籍精鋭部隊であり、各国の名だたるエース達が名を連ねている。

（それに……）

リーネの訓練教官である、上坂啓一郎と名乗った、世界でも珍しい男性ウィッチを見る。

彼の右頬には横に走る大きな傷があり、ほとんど変わらない表情と鋭い目つきで、男性とあまり接点がなかったリーネにとって、少し苦手な存在だった。

それだけならばまだしも、彼は欧州のウィッチの間では有名で、曰く「百機のネウロイに囲まれても生還した」、「自信を盾にしてまでも避難民を救った」など、凄まじい伝説がある。

そんなすぐくて怖い人に、よりによって射撃訓練の指導を受けている—— 気が弱いリーネにとって、それはあまりにも大きなプレッシャーだった。

「よし、リーネ、撃ってみろ」

「はっ、はい！」

リーネは慌てて伏せ、銃を構えると、1 kmほど離れた海上に浮かんでいる標的に照準を合わせる。

リーネの使用している銃は、ボーイズMk・1対装甲ライフル—— ボトルアクション式の大型狙撃銃である。その銃の使用する弾丸の口径は13・9 mm。この銃以外ではほとんど使われることのない弾丸だ。

リーネは、その弾丸を標的に命中させるべく、全神経を集中させて息を止める。そして——

轟音——

音速のおよそ三倍の速さで放たれた弾丸は、待機を切り裂き—— 標的の右側30?の所を通過した。

「……っ！」

「……外れたな。もう一回」

焦るリーネの横で、上坂は淡々と告げる。

リーネはもう一度照準器を覗き込み、今度は連続して発砲する。だが、その弾丸は標的に当たることなく、虚しく周囲を通過する。

（どうして……！？）

射撃をするにつれて焦るリーネ。彼女はむきになって射撃を続けようとしたが、

「待て」

上坂の一言。その言葉を聞いた途端、リーネはハッと我に返る。

「これ以上続けても駄目だ。今日はこれまでにする」

「でもっ……！」

リーネは食い下がろうとした。だが、反論する前にその勢いがなくなる。その様子を黙っていた上坂は、ため息をついた。

「……訓練が早く終わったからな、リネット。ちょっと着いて来い」

そういうと、上坂は踵を返して格納庫へ歩いていく。

「あっ、あの……！」

リーネは慌てて上坂の後を追った。

銃を片づけ、上坂の後に付いて行ったリーネが着いた先は、食堂の厨房だった。

上坂は厨房に着くなり、入口付近にかかっていたエプロンを二つ取り、そのうちの一枚をリーネに投げてよこす。

「それを着ろ」

「あ、あの……」

それを受け取ったリーネは何か言おうとしたが、その前に上坂はさつさと倉庫に入ってしまう。しばらくして、彼は籠いっぱいにジヤガイモやニンジンを入れて戻ってきた。そして台所にそれを置くと、包丁とまな板を取り出して、リーネの目の前に差し出した。

「ほれ、カレーを作るから、野菜切るの手伝ってくれ」

「は、はあ……」

リーネがおずおずと受け取ると、上坂はもう一つ包丁を取り出して、籠の中のジャガイモを手に取り、器用に皮をむき始めた。

「……………」

しばらく呆然としていたリーネだったが、やがて上坂と同じよう

に野菜の皮をむき始める。その動作は上坂と比べても、劣るとも勝らないほど上手だった。

「ほう。なかなかやるじゃないか」

上坂も、その腕に感心する。

「そんな……。普通ですよこれくらい」

庭で家事を手伝っていたリーネにとって、これ位は造作もないことだ。だが、上坂は、それに反論した。

「……その普通のことを、ウチの奴らはできないんだがな。全く……」

「……………」

上坂はブツブツと愚痴を言っているが、リーネの耳にその言葉は入って来ておらず、彼女はただ黙々と野菜の皮むきをしている。

しばらくして、二人は皮むきを終えた。そして、上坂はリーネに料理を教えるためにゆっくりと、丁寧に彼女に教えていく。

「本当ならば俺が出来れば良いんだが…… なにせこのところ書類が多くてな……………」

「は、はあ……………」

少しばかり虚ろな目になった上坂を見て、リーネは彼の苦勞に、少しばかり同情しながら、心の中で人間味がある人だなと思っている。

た。

先ほどの訓練の時とは打って変わって、不器用ながらも感情を表し、口元には笑みを浮かべている。そして、料理をするときは、非常に楽しそうにしていることから、外見から想像できないが、料理が好きなのだろう。リーネは思わずクスリと笑ってしまった。

「どうかしたか？」

「いえ、なんでも」

そういったやり取りをしていると、鍋に放り込んだ野菜がだいぶ煮込まってきて、カレーのルーを作る段階となった。

上坂は、台所の棚から香辛料の入った瓶を、いくつか取り出し、鍋に振り掛けた。

「カレーっていうのは、こうやっていくつものスパイスを混ぜ合わせて作るんだ。この中には辛さだけでなく、時には甘み、酸味なども加えると、よりおいしくなる。色々なスパイスを混ぜることにより、より味わいが深くなっていくんだ」

「へえー、そうなんですか」

リーネは上坂の解説を聞き、感心する。カレーは元々インドの伝統料理だが、ブリタニアにも普及しており、これまでも何度か食べたことはある。だが、カレーというものがどうやって作られたのかは知らなかったのだ、非常に勉強になった——と、彼女はハツと気付く。

「気付いたようだな」

上坂は、リーネの顔を見て、満足そうにうなずく。

「……スパイスにも、やはり主役というものはある。だが、それだけでなく、他のスパイスを混ぜることにより、よりおいしく、味に深みが増すんだ」

「……………」

上坂が言いたいのは、部隊運営にはエースだけではなく、その人を支える人たちも重要だということなのだろう。リーネはそれをわかっていたつもりであったが、支える人たちの重要性を、改めて感じた。

「……ま、人間関係なんてスパイスみたいに単純じゃないけどな。まあ参考までに言っただけだ」

リーネの呆けた表情を見て、上坂は鍋をゆっくりかき混ぜながら、苦笑する。

上坂のその笑顔——不器用ながらも、どこか温かみのある笑顔を見て、リーネは、いつの間にか彼に対する苦手意識が無くなっていた。

第七話

第501統合戦闘航空団――

ネウロイの侵攻からブリタニアを守るため、世界各国から集められた精鋭部隊。

その部隊の基地の滑走路の脇で、シャーリーとルツキー二は、デツキチエアに寝そべって肌を焼いていた。

「いやー、いい天気だなー」

本来ならば戦闘待機中の二人だが、なぜか彼女達は軍服ではなく、水着姿でゆつたりとしている。

「……おまえら、今は戦闘待機中のはずだが」

そこに、バルクホルンがやってきて、彼女達の前に立つなり、腰に手を当てて睨みつけた。

「心配すんなって。情報部のデータ解析だと、あと二十時間は来ないはずだって。それに、ミーナ隊長からも許可を貰っているしな」

「そーそー、問題ない」

しかし二人は、バルクホルンの忠告など、どこともなく吹く風のように、気にしない。

「そう言う問題じゃないだろ！ まったく……」

バルクホルンは呆れてため息をつく。その時、格納庫の方で、ストライカーユニットの起動音が聞こえた。

「ん？　なんだ？」

この時間に飛行計画があるなど聞いていなかった彼女達は、怪訝な表情で格納庫の方を向く。そこには、飛行脚ストライカーを履いた上坂と、リーネの姿があった。

「よーイチロー、どうしたんだ？　ストライカーなんか履いて」

「ん、シャーリーか……。いや、ミーナに頼んで、リーネの訓練を行うことにしたんだ……。って、お前はなんていう格好をしているんだ……」

近付いてきたシャーリーの、あられもない姿を見て、上坂はため息をつく。男性ならば眼福ものの光景だが、上坂にとっては頭痛の種にしかない。

「いやー、ほら、今日も暑いからさー」

あつはつはと、シャーリーが豪快に笑ったびに、大きな胸が揺れる。

「ほら、上坂もこう言っているじゃないか！　さっさと服を着んかー！」

上坂に援護をもらって気をよくしたバルクホルンは、さっさと服を着るように二人に言う。だが、シャーリー達は、それを拒否した。

「えゝ、別にいゝじゃゝん」

「そうだぞ、これだから堅物軍人は……」

「なんだと！ だいたい貴様は……！」

上坂そっちのけで、喧嘩を始める二人。上坂は二人に呆れながら、それを無視して、さっさと離陸体勢にうつる。

「……じゃあ、ちょっと訓練に行ってくる……。行くぞ、リネット」

「はっ、はい！」

蚊帳の外に置かれていたリーネは、上坂に呼ばれて、慌てて離陸していった。

「がんばってねゝ、リーネ」

その姿を、ルッキーニは手を振って見送った。

「……さて、リネット」

基地から少し離れた海上で、上坂は、リーネに向き直る。彼女の履いている飛行脚は、ブリタニアの誇る、ウルトラマリン スピットファイア Mk.？——稼働時間こそ短いものの、非常に balan

スのとれたストライカーだ。

「空戦において、一番重要なことは、何だと思う？」

「えっと……、位置取りでしょうか？」

「そうだ。空戦では、基本的に相手の後ろを取ることが重要だ」

基本的に、航空歩兵だろうと、戦闘機だろうと、空戦時には相手を後ろを取ることが重要になる。なぜならば、射撃を行う際、最も照準を合わせやすいのは、進行方向上だからである。

最も航空歩兵の場合、ベテランウィッチになると、振り向きざまに射撃を行ったりする者もいるが、新人であるリーネには、まだそれは早い。

「リネットの場合、味方の後方から、ネウロイに一撃の必殺を加えなければならぬ。この時、位置取りがうまくないと、咄嗟に味方を援護できなかったり、場合によっては友軍誤射フレンドリーファイアをしてしまうこともある。それを防ぐためには、激しい空戦機動の中で位置取りをすることが大切なんだ」

「位置取り……ですか……」

リーネはその言葉を、口の中で転がした。

「そうだ。そのためにはまず……」

上坂が続けようとした時だった。

『啓一郎！ 聞こえる！』

突然、ミーナの切羽詰まった声が通信機に入った。

「どうした、ミーナ？」

『先ほど、扶桑の遣欧艦隊から、ネウロイに攻撃されているとの通信が入ったわ！ 啓一郎はリーネさんと先行して、時間を稼いで頂戴！』

「なんだと……！ わかった。すぐに援軍に向かう」

上坂は驚いたが、すぐさま己の成すべきことを考える。現在の位置から遣欧艦隊まで約十分。基地からの増援を待っていたら、その倍以上かかってしまう。ここは、ひとまず二人で先行して、時間を稼ぐことが得策だと判断した。

「リネット、聞いていたな ただちに現場へ急行するぞ」

「りよっ、了解！」

上坂は、リーネがまだ新米であったことが唯一の心配事だったが、リーネの力強い返事を聞いて、少なくとも彼女の覚悟の強さを感じた。

——あとは、実戦だけだ。それをフォローするのは、俺の役目だ。

上坂は、心の中でつぶやきつつ、現場へと急行した。

扶桑皇国海軍遣欧艦隊旗艦、航空母艦「赤城」――

排水量三万トンを超え、艦上戦闘機など九十機以上を搭載することが出来る巨艦は、ネウロイのビーム攻撃によって、嵐でもビクともしないその船体を大きく揺らしていた。

「駆逐艦浦風被弾！ 沈没します！」

「くそう、ネウロイめ！」

周囲を固めていた駆逐艦が、真つ二つに船体を折られて沈んでいく中、まるでエイのような漆黒のネウロイが上空を優雅に飛んでいる。赤城艦長の杉田淳三郎大佐は、赤城の艦橋から悔しそうにネウロイを睨みつけていた。

今急速に沈んでいく駆逐艦浦風は、本来対水上目標を相手に作られたもので、対空戦闘には不向きな艦である。現在対空戦闘用の大型駆逐艦が就役し始めているが、今回派遣された艦隊には、旧式の陽炎型駆逐艦しか所属していない。

陽炎型には、扶桑海軍が誇る、九三式六十一センチ酸素魚雷を搭載しているが、大空を飛ぶネウロイには、全く役に立たないどころか、一発の被弾で轟沈してしまうお荷物でしかない。

こうしている間にも、駆逐艦天津風に被弾し、大爆発を起こして艦隊から落伍していく。

「艦長！ 全戦闘機隊発艦準備完了並びに、坂本少佐出撃準備完了しました！」

「……よし！ ただちに発艦せよ！」

本来なら、戦闘中の発艦作業など、自殺行為にしかない。だが、杉田艦長は、艦から打ち上げる対空砲火だけでは駄目だと判断し、あえて危険な賭けに出た。

「頼むぞ、坂本少佐」

杉田は、今発艦していった坂本少佐の背を見ながら、祈った。

ネウロイの攻撃の合間に、赤城から飛び上がったのは、零式艦上戦闘脚を履いた坂本と、扶桑皇国海軍主力戦闘機、九九式艦上戦闘機。

「戦闘機隊は、ネウロイのコアを探しつつ、敵の攻撃を錯乱させる！」

坂本は、指揮下の戦闘機隊に指示をしながら、上昇をする。彼女の固有魔法は魔眼—— 物体を透視して内部構造を見ることが出来る。そのため、比較的攻撃の少ない上空から、ネウロイの観察をすることにした。だが——

「！ くっ……！」

ネウロイの上面から、赤く太いビームが何条も伸びて、坂本を襲う。坂本はシールドを張ってそれを防ぐと、一旦距離を取った。

「まるでハリネズミだな……」

坂本が思案していると、戦闘機隊がネウロイに銃撃を浴びせかける。だが、九九式の装備する魔法力を込めていない7・7mm機銃弾では、ネウロイの装甲を削ることすら出来ない。ネウロイはお返しにと言わんばかりに、四方八方に向けてビームを乱射した。

九九式艦上戦闘機は旧式の固定脚機ながらも、世界初の全金属製戦闘機であり、格闘戦闘能力は欧州のストライカーユニット並とも言われている。だが、ウィッチと違いシールドを持たない戦闘機では、ネウロイのビームがかすっただけで致命傷になってしまう。ネウロイのビームに絡め取られてしまった戦闘機は、次々と黒煙を吐いて落ちていく。

「バカもの！ 迂闊に攻撃するんじゃない！」

坂本は叫ぶ。

（くそっ！ 501の基地まで150km……。救援に駆けつけてくれるまで最低でもあと十五分はかかる！）

そう考えている時、赤城で爆発が起こり、黒煙が上がった。

「宮藤！」

坂本は、赤城にいる扶桑から連れてきた少女―― 宮藤芳佳の名

前を叫ぶ。先ほど出撃する直前に、彼女に通信機を渡していたため、無事ならば返事が返ってくるはずだ。

『坂本さん！？　どうしたんですか！？』

通信が返つてくると同時に、甲板上に宮藤の姿を見つけて、坂本は安堵した。出撃前には艦内に居ると言っていたはずなのだが、勝手に飛び出してきたようだ。

通信の後方から、兵士の怒号が聞こえてきた。先ほどの爆発は、どうやら機銃を撃ちすぎたせいで、銃身爆発を起こしたためだったらしい。坂本は宮藤の無事を確認すると、通信機に向かって怒鳴った。

「宮藤！　なぜお前がそこにいる！　お前は艦内に居ろ！」

『でもっ……！』

「でもない！　お前は民間人だ！　そこにいても邪魔になるだけだ！」

坂本は通信を切った。

「まったく……　だが、無茶するバカは嫌いではない」

坂本は、苦笑すると、改めて戦場を見渡す。

大空をネウロイが悠々と飛び、その周囲には先ほどよりも数を少なくした戦闘機隊が待っている。

「援軍が来るまであと十分……」

坂本がつぶやいたその時だった。

『坂本、大丈夫か』

抑制された、男性の声――

坂本の目に、戦闘機隊に交じってネウロイの周りを飛んでいる緑色の軍服を着た人影が映った。

「その声……、上坂か！」

『すまない。少し遅れた』

上坂の冷静な声――

それは、反撃の開始を告げる言葉だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7442w/>

続・ストライクウィッチーズ 影のエース戦記

2011年12月20日22時48分発行